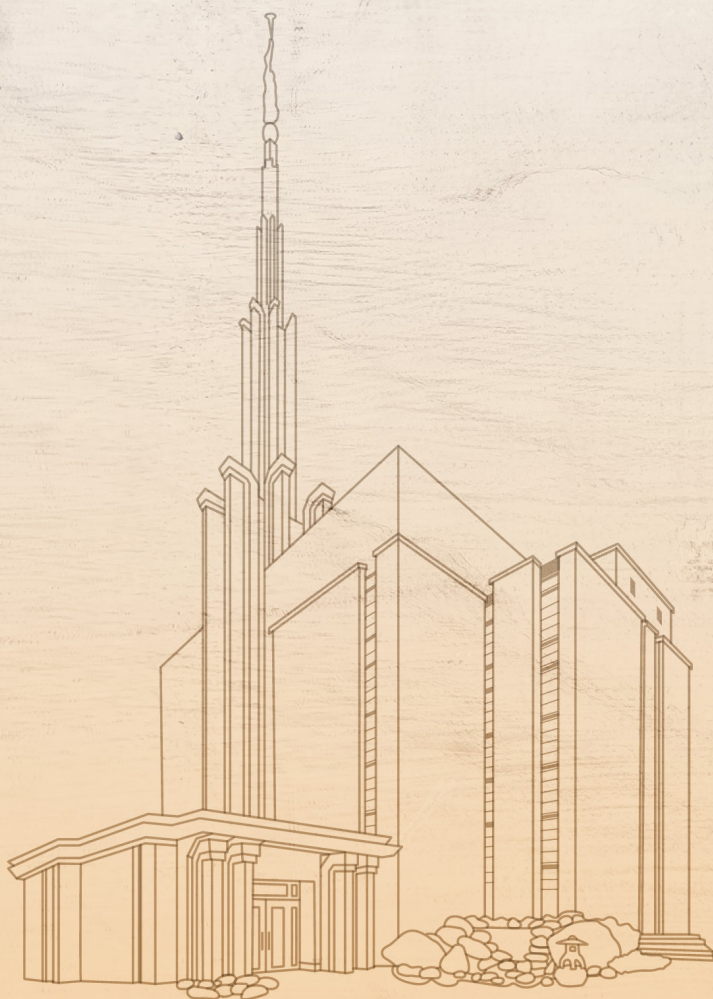


かがり火

東京神殿
再奉獻記念誌



はじめに



2022年7月3日、シオンの日本にて、恵まれてアジア初の神殿である東京神殿が、41年の歴史を経て再奉献されました。

神殿の話をする際、「授かるもの」という表現をよく使われますが、何もせず手ずから与えられるものではありませんでした。私たちは古の聖徒や、回復初期の開拓者たちのように、計画を立て、土地を手に入れ、段取りや材料を整え、多くの犠牲を払い、この神殿を授かりました。

私たちはこの神殿を「利用する」だけではなく、また新たに「建立する」特権をも授かった、とするならば、なぜ主はこの経験を私たちに「授けられた」のでしょうか？私はこのことを思うときに、教義と聖約29章32節の言葉を思い出します。「わたしの業の初めには、先に霊的なものがあり、次に物質的なものがあり、さらにまたわたしの業の終わりには、先に物質的なものがあり、次に霊的なものがある。」高価な真珠によると、世の初めには主は先ずこの世を霊的に創造された、と書かれています。世の初めは主の言葉という霊から創造の業がはじまったことが詳しく述べられていますが、この末日の世では、先に物質的なものから始め、霊的なものに至ると記されています。

主の業において、私たちがこの神殿の再奉献のプログラムという物質的な手順から初め、私たちを霊的に築かれるようにされているのではないのでしょうか。私たちは多くの事を行いました。皆さんはそれを小さいことと思うかもしれませんが。他の人から聞いたような、目に見える奇跡を見ることはなく、あるいは面倒だったり、がっかりした経験もあるかもしれません。しかしその個人的な主観からさらに一歩さがり、私たちの天の父が見ているのと同じ広く永遠の視点に立った時に、あなたの行った犠牲がどれだけ小さく、あるいは退屈だったとしても、それは完璧な建造物である主の宮の一部として聖い輝きを放っています。そしてそれに携わった皆さんの手も、救いを告げる者の足のように、山の上にあって美しいものであることでしょう。

もしこの記録が正確であるならば、この記録は皆さんが物質的におこなってきたことの記録であると同時に、私たちがどのように奉仕をし、忍耐をし、信仰や証を築いたか、皆さんがどのように霊的に主に似たものとなるよう精錬されたかの記録であることでしょう。そして、実際にこの記録は、単純に物質的な建設、イベントの記録ではなく、信仰、希望、慈愛の記録であり、主がご自身の御業の中で、どのように私たちを導き、癒し、励まし、支えられるかの記録であるはずです。この記録を心を開いて読む時に、文章や写真を通して、主にまみえることができますように、私たちの霊が鼓舞されて、信仰や希望、慈愛を築く糧となるようにと願い、この記録を作成し、皆様に届けます。



聖きを主に捧ぐ

はじめに

目次

東京神殿の歴史 ... 1

歴代神殿会長とメイトロン ... 9

改修前の東京神殿 ... 45

オープンハウス ... 57

再奉献式 ... 83

東京神殿再奉献委員会 ... 89

証集 ... 155

おわりに



1

東京神殿の歴史



「いつの日か、この国に多くの教会堂と、さらにはいくつか
の神殿が建てられるであろう。」

(マシュー・カウリー、日本伝道本部の奉献式にて)

東京神殿に該当する神殿地区と
日本での末日聖徒イエス・キリスト教会の発展から
東京神殿の奉献までの歴史。

日本の伝道への扉

「千八百二十年の早春、美しい晴れた日の朝」(ジョセフ・スミス歴史 1:14)に、当時 14 歳の少年ジョセフ・スミスが父なる神と御子主イエス・キリストに見えてから、52 年経過した頃、アジアの極東の地、日本と呼ばれる国に新しい変化が起こった。1872 年 2 月 4 日、日本の明治政府が派遣した岩倉使節団がユタ州オグデンに到着し、「教会の幹部指導者をはじめとするソルトレーク・シティ市民の代表団はオグデンに赴き丁重に歓迎した」(p.13)。紆余曲折があり、1873 年、大日本帝国憲法第 28 条の元となる法律が制定され、信教の自由が保証され、かつキリスト教が解禁されたことで、アジアの日本への伝道の扉が開かれることになった。

日本の地の奉獻

日本は、イスラエルからも遠く離れ、アメリカ合衆国からも太平洋を経てようやく辿り着く「海の島々」(1 ニーフアイ 19:10) からなるこの土地に回復された福音がもたらされたのは、1901 年のことであった。1901 年 9 月 1 日(日)、ロレンゾ・スノー大管長から最初の日本の伝道部長として任命された十二使徒ヒーパー・J・グラント長老は、日本の横浜で日本の地を奉獻した (p.19, p.34-36)。

日本の地の奉獻の祈りについて、日本の教会歴史には次のように述べられている。「奉獻の祈りの概要は次のようであった。神の召しと祝福への感謝、イスラエルの集合と地上に義を確立するためにこの地を奉獻すること、主が日本人の心に触れられて、人々が羊飼いの声を理解するように、またグラント自身が瀕死の病から癒されたのはこの召しのためだと感じていること、ケルチ、エンサイン、テラーのそれぞれすばらしい特質を備えた同僚を与えられていることへの感謝、そして三人のニーフアイ人がこの伝道を助けてくれるように、またこの地の人々にリーハイとニーフアイの血が伝わったと感じていること、もしそうならばその子孫に与えられた約束をかなえてくださるように」(p.38)。日本におけるヒーパー・J・グラント長老の役割は、アダムにかたどられている。いや、ある意味パウロなのかもしれない。種を蒔く人もいれば、白い畑を刈り取る人もいる。グラント長老は日本人にとって種蒔きの人であった。エデンの園、あるいはエルサレムに例える祝福の地、すなわち約束の地アメリカを離れ、伝道地としては未開拓の日本の地にグラント長老は到着した。アメリカという心地の良い母国から離れ、環境、言語、文化の異なる場所で、わたしたちの日本の先祖のために福音を述べ伝えた。アブラハムの宗教のバックグラウンドがほとんどない日本の地における伝道活動は、「あなたは一生、苦しんで地から食物を得る」(創世 3:17)と表現しても良いほど難しいものであった。種蒔きが苦しい分、収穫が豊かになると希望を持ちながらグラント長老たちは日本で懸命に伝道した。日本の地の奉獻

は、日本の散乱したイスラエルの民が集合するための第一歩であり、日本の神殿活動が発展する上で欠かせない日本の伝道活動の始まりを宣言するものであった。

第二次世界大戦後—日本の伝道本部の奉獻

途中、アメリカと日本が共に敵対国となり、日本では信教の自由に制限がかけられるようになった。さらに、1924 年 8 月 2 日、ロバートソン伝道部長が日本から撤退し、日本伝道部は閉鎖されることになった。「将来いつの日か」ロバートソン長老は希望を持って語ったが、そのいつかは、第二次世界大戦が終了する 20 年以上も後になってしまった (p.112-p.113)。伝道活動という意味では「地はかたちなく、むなしく、やみが淵のおもてにあ[る]」(創世 1:2)の状態であった。日本で改宗した末日聖徒の少数は暗闇の中で福音生活を継続した。実に 20 年以上もの年月、日本は暗闇で覆われていた。

「その怒りはただつかのまで、その恵みはいのちのかぎり長いからである。夜はよもすがら泣きかなしんでも、朝と共に喜びが来る。」(詩篇 30:5)とある通り、長い夜は過ぎ去り、喜びの朝を日本は迎えることになった。1945 年 8 月 14 日に日本国政府はポツダム宣言を受諾し、1947 年 5 月 3 日に日本国憲法が施行され、信教の自由が保障され、再び日本国民は道徳的な選択の自由を再び行使できるようになった(教義と聖約 101:77-80)。「神は『光あれ』と言われた。すると光があった」(創世 2:3)とあるように、日本の地に再び福音の光が差した。アダムの時代、イエス・キリストの時代にあったのと同じ光が、大背教の暗闇の末、神の預言者ジョセフ・スミスによって再び回復された。同様に、「わたし(イエス・キリスト)は暗闇の中に輝いている光である。そして暗闇はそれを理解しない」(教義と聖約 6:21)とあるように、イエス・キリストの永遠の福音が再び日本の地で自由に宣べ伝える日々が始まった。福音は日本全国に広まることになった。

日本の教会歴史は、次のように述べている。「1947 年、教会本部は日本に伝道部を再開することを決定し、ジョージ・アルバード・スミス大管長はエドワード・L・クリソルドを再開後の初代伝道部会長として按手により任命した。しかし、入国許可がすぐには下りなかったため、実際には 1948 年 2 月にクリソルドは単身、日本へ入国している」(p.174)。そして、クリソルド伝道部長は、1948 年 3 月 8 日から伝道本部の建物と土地の確保を開始した。最終的には有栖川宮記念公園に面している麻布の建物を購入し、日本の伝道本部とした (p.176-p.177)。

十二使徒マシュー・カウリー長老の預言

1949 年 7 月 17 日、十二使徒のマシュー・カウリー長老が来日し、修復が完成した伝道本部の奉獻式が行われた。その時、日本の教会歴史で有名な預言の言葉を語った。「い

つの日か、この国に多くの教会堂と、さらにはいくつかの神殿が建てられるであろう」(p.188)である。この預言に日本で伝道する宣教師と改宗者は希望を持ち、多くの日本人を末日聖徒イエス・キリスト教会へと導いた。この預言は、日本の末日聖徒の約束の地として、日本は伝道活動によってシオンの多くのステークを備え、「あなたがたはわたしに対して祭司の国となり、また聖なる民となるであろう」(出エジプト 19:6)という約束が日本国民の母国に建てられる神殿で成就する日が来ることを指し示した。

日本におけるマシュー・カウリー長老の役割は、アブラハムにかたどられている。旧約の時代、神はアブラハムに約束の地としてカナンの地を示した。神権、土地、子孫という豊かな祝福を日本の末日聖徒にもたすための約束の地が日本であることを示したのは、日本の教会歴史で有名なマシュー・カウリー長老だった。

1962年夏、日本の神殿歴史に大きな影響を与えることになるドゥエイン・N・アンダーセン長老が伝道部長として着任した。1965年に日本の末日聖徒を率いて、第一回ハワイ神殿団体訪問を実施した(p.256)。日本の末日聖徒は、まずアメリカのハワイの地で、神殿の儀式と祝福を享受し、高い所から力を得るようになった。

日本におけるドゥエイン・N・アンダーセン長老の役割は、モーセにかたどられている。旧約の時代、イスラエルの民を集め、エジプトの奴隷の状態から救い出し、移動式の神殿こと幕屋でイスラエルの民を聖別したのは、イエス・キリストよりイスラエルの集合の鍵を委ねられたモーセであった。アンダーセン伝道部長は、日本最初の神殿団体参入を実現し、まずはハワイの地へと日本の末日聖徒を集め、神殿のエンダウメントと結び固めの儀式の祝福をもたらしたのであった(p.254)。

イスラエルの民がエジプトから約束の地に入るまでの長旅と同じく、日本の末日聖徒は日本からハワイまでの長旅を経験した。しかし、主は日本国民を祝福し、飛行機を備えた。「主は遠く離れた国民に一つの旗を掲げ、地の果てから彼らと呼ばれる。すると、彼らは急いで速やかに来る。見よ、彼らの中には疲れる者も、つまずく者もない。また、まどろむ者も、眠る者もない。彼らの腰の帯は解けず、靴のひもも切れない。」(2ニーファイ 15:26-27)とある通りであった。極東の地、「地の果て」(2ニーファイ 15:26)から、「遠く離れた国民」(2ニーファイ 15:26)である日本の末日聖徒を主は呼ばれた。

さらにはソロモンの時代にエルサレムに神殿が建てられるまで、イスラエルの民は主が選ばれたシロの地に置かれた幕屋で神を礼拝した(ヨシュア 18:1)。同様に日本の末日聖徒は、日本に東京神殿が建てられるまで、主が選ばれたハワイ神殿で昇栄に不可欠な儀式を受けることになった。

東京神殿への礎

東京神殿の礎として、ハワイ神殿参入において、日本の末日聖徒が神殿の儀式を日本語で執行できるように、翻訳作業などを実施し備えた。ハワイの日系2世の教会員を中心に毎週火曜日夜6時から、一年に渡って神殿で訓練を受けた(p.258)。また、1970年10月の総大会において、ソルトレーク神殿に日本の末日聖徒が360人訪問した(p.284)。その際、ハワイの日系の神殿儀式執行者はハワイからソルトレーク神殿へ赴き、日本人のための儀式執行者として奉仕した(p.284)。

東京神殿建設、奉献

1836年4月3日、イエス・キリスト、モーセ、エライアス、エリヤがカートランド神殿で預言者ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリに現れて、全ての神権時代の鍵を彼らに委ねた。それから139年後、日本の神殿歴史は建設と奉献の時代を迎えることになった。

マシュー・カウリー長老の預言を成就したスペンサー・W・キンボール大管長は、結び固めの鍵を持つエリヤにかたどられている。主の僕の預言は必ず成就するという御言葉の通り(教義と聖約 1:37-38)、使徒の預言を結び固めたのであった。キンボール大管長は1975年8月8日、武道館における東京神殿建設発表で、使徒、預言者の言葉が必ず成就することを高らかに宣言した(p.287)。武道館には日本全国から末日聖徒が集まっていた。キンボール大管長の言葉は次の通りである。「さてここで、皆様方とアジアの国々および世界中の人々に、非常に大切な事柄をお知らせしたいと思います。……十二使徒であったマシュー・カウリー長老は、アジアと日本に神殿が建つことを預言いたしました。そして、わたしたちの多くは、この地に神殿が立てることができるのを待ち望んでいました。そこで私たちはこの会場にお集まりの皆様、全アジアのため日本の東京に神殿を建てることを提案します」(p.287)。日本の末日聖徒は満場一致で預言者の提案を喜んで支持した(p.287)。

Dedications Set for Tokyo, Seattle Temples

Dedications Set for Tokyo, Seattle Temples

Dedications Set for Tokyo, Seattle Temples

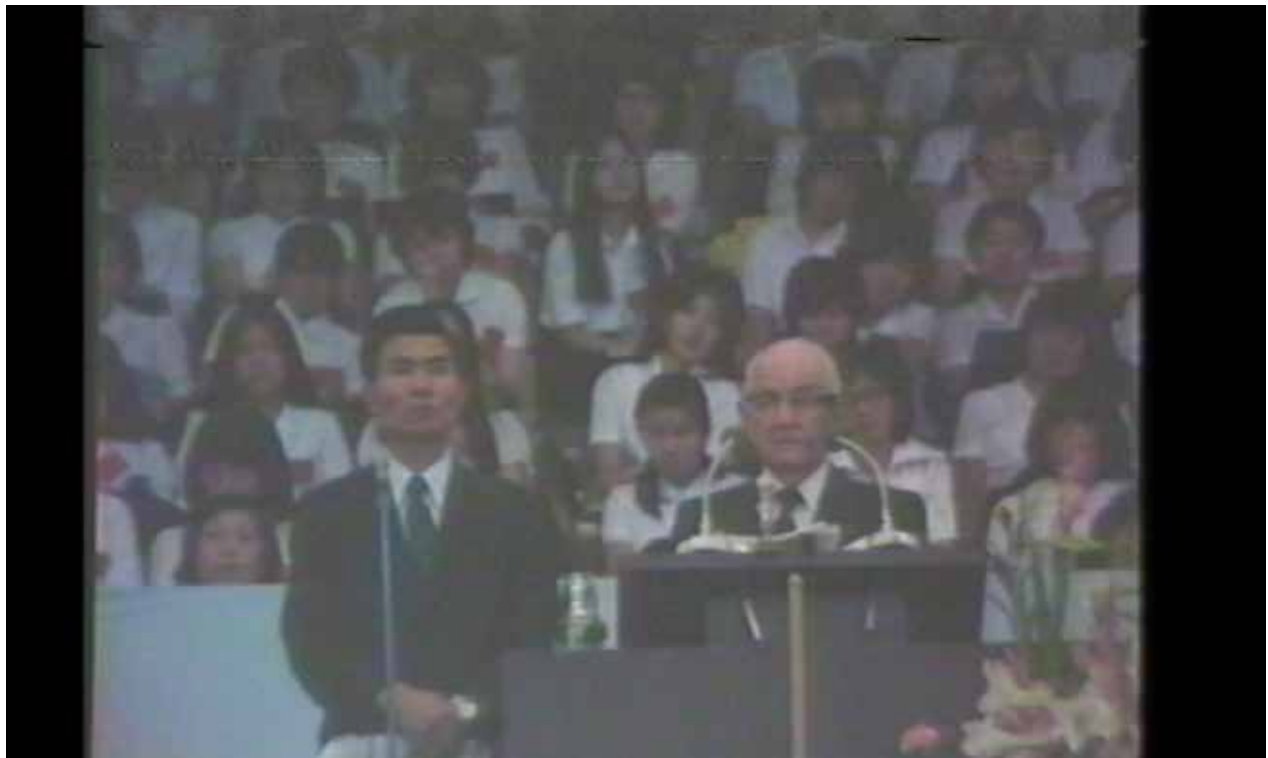
Dedication and open house dates have been announced for the Tokyo, Japan, and Seattle, Washington, temples, and the Tokyo Temple president has been announced.

The First Presidency has scheduled a five-week open house for the Tokyo Temple, starting September 15 for invited guests and September 16 for the public. The open house will run through October 18, excluding Sundays. Dedicatory services are scheduled October 27-29. A cornerstone service will be conducted October 27. The temple will be open November 4 for ordinance work.

An open house for invited guests will be October 6 for the Seattle Temple. The general public will be able to tour the temple from October 7 through November 8. The temple will be dedicated November 17, with the service repeated three times daily November 18 through 21. Ordinance work will begin December 2.

Attendance at dedicatory sessions is limited to qualified members of the Church.

President of the Tokyo Temple will be Dwayne Nelson Andersen, assistant professor and counselor in career education at Brigham Young University. Peggy Jean Huish Andersen, his wife, will be matron. Counselors in the presidency will be named later.



「1978年4月5日、神殿着工のため日本東京伝道本部は管理本部事務所内へ一時移転し、既存の伝道本部は取り壊されて、東京神殿の建設が開始された。」(p.288)。1980年6月、Ensignで次の発表があった。

1980年10月27日に東京神殿はスペンサー・W・キンボール大管長によって奉献された(p.287)。「キンボール大管長は東京神殿の奉献の祈りで次のように述べている。『この神殿に来る者すべてが謙虚な心を持ち、清く汚れなき状態で参入できるようになりました。我らはこれらの聖徒の献身と信仰、また清くあらんとする決意と努力のゆえに汝に感謝し奉る。』」(p.292)。東京神殿は、ジョセフ・スミスによる福音の回復以降に奉献された最初の神殿、カートランド神殿が1836年3月27日に奉献されて以来(教義と聖約109章、『教会歴史』第二巻, p.420 - p.426)、アジアで一番最初に奉献された神殿である(The First Temple in Asia, Ensign, October 1980)。

Liahona 1980年10月号には下記の通り



初代東京神殿会長

日本の末日聖徒がハワイ神殿において神殿の儀式を受けられるように指導したアンダーセン長老は、東京神殿奉献後に初代東京神殿会長として召された。ふさわしい日本の末日聖徒を神殿で聖別し、最後まで忠実であれば永遠の命、すなわち昇栄を家族と共に享受する儀式を執行した。神殿会長の歴史は、東京神殿再奉献以前は、アンダーセン会長から新山会長までに至る。

日本の東京神殿の歴史記録執筆

上記の輝かしい、救いの業、日本における東京神殿の歴史記録を執筆し、この時代の人々の主への信仰と神殿への強い思いを書き記し、後世の人々へと伝える。「荒廃をもたらす病気が地を覆う」(教義と聖約45:31)時代にあって、「しかし、わたしの弟子たちは聖なる場所に立ち、動かされない。」(教義と聖約45:32)ほどの強い信仰、従順、犠牲、祝福の東京神殿の歴史をわたしたちは書き記す。

日本の教会の公式な歴史資料を調べたい場合、『世紀を超えて---Beyond the Century』日本伝道100周年実行委員会を参照すること。さらに詳細な歴史記録を閲覧したい場合、有志執筆の資料、元東京神殿会長福田真監修の『日出ずる国とともに』2007年9月10日参照すること。

(定義)

p.XXX・・・日本の教会の公式な歴史資料(『世紀を超えて---Beyond the Century』2002年2月28日 日本伝道100周年実行委員会)のページ番号を示す。

奉献の祈り

1980 年 10 月 27 日（月）

スペンサー・W・キンボール大管長

在天の御父よ、諸々の天と地と、また地上の万物を創造したまい、完き慈悲と愛と真理に富みたもう、いと聖き御方なる御父よ、汝の愛する御子イエス・キリストの御名により、我らは本日、生ける神なる汝に捧ぐべくこの神聖なる建物に会したり。我らは、汝と汝の御子を愛する東洋の聖徒たちの犠牲により備えられしこの美しき神殿を、今汝に捧げ奉る。

我らは、汝がこの地上に汝の生みたまいし独り子を我らの救い主として送たまいしことを感謝し奉る。また、この最後の神権時代に、汝が前世にて召したまいし預言者ジョセフ・スミスを遣わし、福音の回復を得させたことを感謝し奉る。汝と汝の愛する御子が御自ら親しくジョセフ・スミスに顕われ、再び諸々の天を開き、世に汝と汝の御子のことを知らしめたまいしことを、また汝の聖なる神権の権能により汝の教会と王国を完全に打ち建てたまいしことを感謝し奉る。

愛に満ちたもう御父よ、汝は我らが、生者と死者のために栄ある救いの業を行なう場所としてこの地上に数多くの聖なる神殿を建て、それを汝に捧げることを許したまへり。この美しい日本の地に建てられしこの麗しい、設備のよく整いし神殿はそのひとつなり。我らはまた、現在他に 10 を数える神殿が建設さるる予定なること、すなわちやがて全世界に 30 にものぼる神殿が建立されんことを感謝し奉る。

聖なる御父よ、我らは汝が末日の預言者たちに靈感を下し、生者と死者双方のために神聖な儀式が執り行なわれるこれら数多くの神殿の建設を得させたまいしことを感謝し奉る。

また、御父よ、汝の教会の組織が今日完全なることを汝に感謝し奉る。なにとぞ、汝の教会の大管長会に、汝の民が恵みと祝福と幸せにあずかるために必要なよろずの事柄について、汝の御旨と御心とを示したまへ。限りなく発展を続けるこの地上の汝の王国で靈感に基づく指導を行なえるよう、大いなる知恵を大管長会に与えたまへ。

汝がこの時代に全人類への汝の預言者として召したまい、この世で多くの歳月を過ごしたる汝の僕を、愛をもって見守りたまへ。また、僕の寿命を延ばし、聞く耳を与え、健

康と強さを授け、また汝の民を導くに必要なりと汝がおぼしめす力と賜を与えたまへ。

汝の特別な証人なる十二使徒に、汝の聖き御霊を豊かに授け、また先を見通す力と判断と知恵とを与えたまへ。

我らの御父よ、我らは数多くの祝福にあずかりしことを感謝し奉る。世界各国において福音の伝道の業に携わる 3 万人を越える献身的な宣教師の故に、汝に感謝し奉る。なにとぞ彼ら宣教師に知恵と信仰と献身の思いを授け、彼らが世界至る所に住む真理を求める人々、誠実な心を持つ人々に福音を伝えることを可能ならしめたまへ。彼らの働きに喜びを、彼らの愛の業に成功を得させたまへ。

汝の福音の伝わる道に横たわる障害が取り除かれ、汝の真理が全地にあまねく行き渡り、汝の御子なる救い主により指示されしごとく、あらゆる国民、民族、国語の民、人々が救いと昇栄のおとずれを耳にできるよう、諸々の国の為政者、全世界の政府に汝の感化力を及ぼしたまへ。

御父よ、汝のすべての聖徒たちの家庭に平安を宿させたまへ。汝の民の中の貧しき者、乏しき者を祝福したまへ。未亡人や孤児、孤独なる者、心ふさぎたる者の叫びに心をとめたまへ。

在天の御父よ、汝に特に祈り奉る。全世界のシオンの若人たちを祝福し、支えたもうように。彼らを悪から守り保護し、邪悪な者、下心ある者たちの言葉や業から守りたまへ。御父よ、汝の民をして永遠の生命に通ずるまっすぐな狭き道を歩ましめたまへ。足下の落とし穴から彼らを守りたまへ。我らの子供たちに、この業が神の業であるとの証を増し加えさせたまへ。また彼らを清さと真理の中にとどめたまへ。なにとぞ我らをして、シオンの若人たちに、汝の聖なる神殿での永遠の結婚を望む気持ちを起こさせたまへ。

教会の姉妹たち、我らの妻、母、娘たちに、尊い召しと責任を果たす気持ちを豊かに得させたまへ。御父よ、汝は我らが彼女たちに抱く深き愛を知りたもう。それ故、必要な折々に、彼女たちに知恵と信仰と知識の貴き賜を授けたまへ。

慈愛深き御父よ、この神殿に來たる者すべてが謙虚な心を持ち、清く汚れなき状態で参入できるようになしたまへ。



我らはこれらの聖徒の献身と信仰、また清くあらんとの決意と努力の故に汝に感謝し奉る。

聖徒たちがエンダウメント、結び固め、結婚、灌油、その他の儀式のためにこの聖なる宮居に来たる時、彼らを祝福したまえ。この神殿を、祈りの家、断食の家、信仰の家、栄光の家、永遠の結婚の家、結び固めの家、また汝の家、神の家となし、ここにおいて、生者と死者の双方の救いのために、汝の聖なる救いの業を行なわせたまえ。

我らは汝に祈り奉る。この神殿の神殿長会、神殿長夫人、また儀式を執り行なうすべての人々を祝福したまえと。彼らに知恵と、識別の賜を授けたまえ。彼らがこの建物の内に聖なる雰囲気をかもし出し すべての儀式が愛と心温まる霊的な思いの下に執り行なわれんことを。またここにとどまりたいとの望み、度々帰り来らんとの大いなる望みを聖徒たちに抱かせることを可能ならしめたまえ。

また保安や管理に携わる人々、機械室やランドリー、食堂、その他この神聖な建物の施設で働くすべての人々を祝福したまえ。また、この宮居の建設に携わり、その力を尽くして建築の完成に寄与せしすべての人々を、汝の慈悲をもて覚えてまえ。

我らの聖なる御父よ、我らはこの日を歓呼をもて迎う。汝が我らにこの神殿の完成を得させ、我らが長らく待ち望み、努力を傾け、祈り願ひしこの日を迎えるを許したもうたことを、汝に感謝し、汝を喜びをもてたたえ奉る。

今日、我らはこの聖なる神殿を、これに伴うすべての物と共に汝に捧げ奉る。汝の栄光をこの宮居にとどめ、汝の聖なる力を絶えず注ぎたまえ。我らの救い主なる汝の愛する御子のとどまる所となし、また汝の御前に立つ天使たちが聖なる御使いとして訪れる所となしたまえ。

汝のこの宮居の入口より入り来たるすべての人々が汝の力を感じ、汝がこの建物を聖別し、汝の家、聖なる所となしたまいしを知るようになさせたまえ。

在天の御父よ、我らは汝に祈り奉る。この建物の基礎より尖塔の最先端に至るまですべてを受け入れたもうように祈り奉る。

我らは汝に祈り奉る。壁や仕切り、床、天井、屋根、エレベーター、階段、扉、窓、その他の通路、照明や暖房、衛生設備に関わるすべての物、またこの宮居での聖なる儀式で用いられる、あるいは儀式に関わるすべての物を聖別したもうように。とぼりや聖壇、バプテスマフォント、またフォントを支える牛の像を聖別したもうように。

家具や椅子、錠、掛け金、その他この神殿に見いだされるすべての設備と付属品、装飾品のすべて、塗装部分や金属部品、あらゆる種類の見事な木工細工、金属細工、刺繍品を聖別したもうよう汝に祈り奉る。

おお主よ、この神殿の立つ敷地を聖別したまわんことを。また塀や歩道、この敷地に育つ樹木や草花、かん木を聖別したもうように汝に祈り奉る。美しき花が咲き、すべての人々に心温まるものを感じさせ、平安と安息を深く心にもたらす所となさせたまえ。その美しさがこの栄えある神殿の業に神聖さと清さを加えるものとならせたまえ。

御父よ、この建物を、あらゆる損傷から、また火による破壊から、洪水など自然の災害から、落雷から、暴風雨から、地震から、その他あらゆる種類の害悪から守りたもうよう汝に願い奉る。

エライジャの霊を我らに授けたもうよう祈り奉る。我らが死者の贖いに携わり、また始祖に至るまで、汝の聖なる神権によりつながれし切れ目なき輪の中に先祖と結ばれるようになしたまえ。

我らの御父よ、我らは汝を崇め奉る。汝に栄光を帰し奉る。汝を拝し奉る。日ごとに汝を崇め、汝に感謝し奉る。我らは汝の御子にして我らの救い主なるイエス・キリストの御名により、我らがへりくだり願うこれらの嘆願を聞き届け、この聖なる汝の宮居を受け入れたもうよう汝に祈り奉る。

汝より授けられし聖なる神権の力により、我らはこの建物と、これに属するすべての物を、我らの聖き御父なる汝に奉献し奉る。而して、この宮居に汝の祝福のあらんことを。汝の愛する御子にして我らの贖い主なるイエス・キリストの尊き御名により奉献し、願い奉る。アーメン、アーメン、アーメン。

東京神殿エリアのステーキ / 地方部のユニット一覧

仙台ステーキ

石巻支部、泉ワード、上杉ワード、多賀城ワード、鶴岡支部、
長町ワード、福島ワード、古川支部、山形ワード、米沢支部

郡山地方部

会津若松支部、いわき支部、郡山支部、白河支部

新潟地方部

佐渡支部、三条支部、新潟支部

桐生ステーキ

宇都宮ワード、小山ワード、桐生ワード、熊谷ワード、
古河ワード、高崎ワード、前橋ワード

松戸ステーキ

足立ワード、我孫子ワード、牛久ワード、春日部ワード、
越谷ワード、つくばワード、松戸第一ワード、松戸第二ワード、
水戸ワード

千葉ステーキ

浦安ワード、おゆみ野ワード、鎌ヶ谷ワード、小岩ワード、
千葉ワード、東金ワード、成田ワード、八千代ワード

東京ステーキ

麻布ワード、浦和ワード、桶川ワード、坂戸ワード、所沢ワード、
中野ワード、ひばりヶ丘ワード、ふじみ川越ワード

東京西ステーキ

吉祥寺ワード、国立ワード、甲府ワード、相模原ワード、
高尾ワード、多摩ワード、八王子ワード、府中ワード、
福生ワード、町田ワード

東京南ステーキ

岩国軍人支部、座間軍人支部、三沢軍人ワード、東京第一ワード、
東京第二ワード、横須賀軍人ワード、横田軍人ワード

神奈川ステーキ

厚木ワード、神奈川ワード、鎌倉ワード、川崎ワード、
港北ワード、湘南ワード、藤沢ワード、保土ヶ谷ワード、
山手ワード、大和ワード

長野地方部

上田支部、諏訪支部、長野支部、松本支部

金沢ステーキ

金沢ワード、小松ワード、高岡ワード、高山支部、富山ワード、
七尾支部、福井ワード

静岡ステーキ

静岡ワード、沼津ワード、浜松ワード、袋井支部、藤枝支部、
富士ワード

名古屋東ステーキ

岡崎ワード、刈谷ワード、瀬戸ワード、豊田ワード、豊橋ワード、
中津川支部、名東ワード

名古屋ステーキ

伊勢支部、一宮ワード、犬山ワード、岐阜ワード、御器所ワード、
高畑ワード、津支部、福德ワード、四日市ワード

京都ステーキ

綾部支部、茨木ワード、近江八幡ワード、大津ワード、
岡町ワード、下鴨ワード、城陽ワード、伏見ワード

神戸ステーキ

明石ワード、北六甲ワード、神戸ワード、豊岡支部、西宮ワード、
西脇支部、花屋敷ワード、姫路ワード

大阪ステーキ

阿倍野ワード、大阪ワード、河内長野ワード、御坊支部、
堺ワード、泉南ワード、奈良ワード、橋本支部、大和郡山ワード、
和歌山ワード

沖縄ステーキ

石垣支部、糸満ワード、沖縄ワード、名護支部、那覇第一ワード、
那覇第二ワード、普天間ワード、宮古支部

沖縄軍人地方部

嘉手納軍人支部、具志川軍人支部、佐世保軍人支部、
普天間軍人支部





2

歴代の神殿会長とメイトロン



「この白い衣を身にまとっている人々は、だれか。…」

「…神の御座の前におり、
昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。

御座にいますかたは、
彼らの上に幕屋を張って共に住まわれるであろう。」

(ヨハネの黙示録 7 章 15 節)

歴代の神殿会長とメイトロンの来歴と証。



ドゥエイン・N・アンダーセン 神殿会長

ペギー・H・アンダーセン メイトロン

1980 年 ～ 1982 年

来歴

ドゥエイン・N・アンダーセン 神殿会長

1921 年 1 月 11 日、ユタ州ブリガムシティに生まれる。1941 年から 3 年間、ハワイアン伝道部で専任宣教師として奉仕する。1948 年アリゾナ州メサ神殿にて ペギー姉妹と結婚、4 人の子どもを授かる。結婚後も、戦争による宣教師不足により 1951 年から 2 年間、日本伝道部へ召される。仕事では、ブリガムヤング大学ハワイ校の外国人留学生アドバイザー、ブリガムヤング大学プロボ校の助教授兼生涯教育顧問などを勤めた。教会の召しとしては、北部極東伝道部会長、日本での神殿訪問計画の指導者（日本人最初のハワイ神殿団体参入を実施）、祝福師、ハワイ神殿顧問、ビショップ、南アフリカのヨハネスブルグ神殿などの責任を果たした。2012 年 8 月 13 日にユタ州プロボにて 91 歳で逝去。

ペギー・H・アンダーセン メイトロン

1929 年 9 月 3 日、アリゾナ州ダグラスに生まれる。教会の召しとしては、プライマリー、若い女性、日曜学校、扶助教会などの役員教師、ハワイ神殿ガイド、南アフリカでセミナリーのスーパーバイザーの責任を果たした。2018 年 5 月 31 日ユタ州プロボにて 88 歳で逝去。

引用元：

- ローカルページ (1982) 「東京神殿の神殿長会 新たに組織される」『聖徒の道 1982 年 10 月号』65 頁
末日聖徒イエス・キリスト教会
- リアホナ 2011 年 4 月号 アドニー・Y・小松長老が逝去される」、
<https://jp.churchofjesuschrist.org/2011-apr-03?lang=jpn>、2022 年 5 月 3 日にアクセス。

ドウエイン・N・アンダーセン 神殿会長の証

この召しに全身全霊を

1980年2月15日のことでした。私はブリガム・ヤング大学の私の部屋で、学業上の問題を抱えている学生たちのカウンセリングを行なっていました。すると、ソルトレーク・シティからの電話で、キンボール大管長がその日の午後4時に、大管長の自宅で私に会いたいとのことでした。私は昼食のために家に帰った時、キンボール大管長が私に会いたいと言ってきたと妻に話しました。しかし妻は笑うだけでした。私が冗談を言っていると思っていたようでした。

私は予言者の前に座り、「あなたはアジアにおける初めての神殿の神殿長に選ばれました」と言う言葉を聞いた時、胸の高鳴りを抑えることができませんでした。このような神聖な責任に召されたことは、何という名誉であり、特権でしょうか。と同時に、自分には数々の弱点があり、能力も十分ではないことが思い起こされました。日本語に対する理解力の不足やその他の弱点は、とても克服し難いもののように思われました。その時、私の心に、1 ニーファイ 3:7 の聖句が浮かんできました。「わたしは行って、主が命じられたことを行います。主が命じられることには、それを成し遂げられるように主によって道が備えられており、それではなくては、主は何の命令も人の子らに下されないことを承知しているからです。」この聖句によって、私は召しを引き受ける勇気が出てきました。

...

こうして日本の地を訪れて以来、私の心に幾つか過去の出来事がよみがえってきます。

...

そこで1965年、神権指導者夫妻のために飛行機をチャーターしてハワイ神殿を訪問する計画を立てました。それはまさに奇跡でした。神殿でメッセージを聞き、御霊を感じた時の日本人の聖徒たちの顔は喜びの涙で濡れていました。その光景は、教会の初期の時代、カートランド神殿の献堂に際して起こった出来事をしのぐほどのものでした。このハワイでの歴史的な出来事に続いて、大勢の信仰篤い日本人の会員たちがハワイやソルトレーク・シティを訪問し、自分と先祖のために神聖な儀式を受けるようになりました。その結果、ステーキ部やワード部が設立されるに至ったのです。こうした日本人の聖徒たちの献身は主を喜ばせ、主の予言者の心を動かしたのです。1975年、キンボール大管長は日本に神殿を建てることを発表しました。これは、非キリスト教国における最初の神殿です。

今日、この栄えある神殿は完成しました。この神殿はアジアにおける新しい霊性の時代を開くことでしょう。教会員が主の宮居で奉仕し、神聖な儀式に参加する時、さらに大きな犠牲と献身が求められるかもしれません。しかし、それに対して、どのような犠牲にも勝る永遠の報いが与えられるに違いないのです。家族は強められ、個人の生活は高められることでしょう。人生の目的はさらに明確になり、結び固めの絆は永遠に続くのです。

ドウエイン N アンダーセン
(『聖徒の道』1980年10月号より抜粋)



アドニー・Y・小松 神殿会長 ジュディー・N・小松 メイトロン

1982 年 ～ 1984 年

来歴

アドニー・Y・小松 神殿会長

1923 年 8 月 2 日、ハワイホノルルに生まれる。17 歳の高校生のとき宣教師に出会い、バスケットボールの活動に誘われたことをきっかけに教会に集うようになる。母からのバプテスマの反対があったが、1 年間福音を学んで 1941 年に改宗した。1945 年に宣教師として任命されるが、徴兵により陸軍に入隊したため宣教師として働くことはできなかった。1950 年ハワイ神殿でジュディー姉妹と結婚、2 男 2 女を授かる。実業界に入り、その後、預金貸付協会の副頭取兼担当部長として働く。教会の召しとしては、高等評議員、ステーク書記、ビショップ（1961 年当時、日系人では初）、北部極東伝道部会長（1965 から 3 年間、アジア人で初）、十二使徒評議員会補助（1975 年当時、アジア人で初）、七十人第一定員会名誉会員を果たしてきた。趣味はスイミングとバスケットボール。好きな聖句はマタイ 6:33。2011 年 2 月 23 日にハワイ州ホノルルにて 87 歳で逝去。

引用元：

ローカルページ (1982) 「東京神殿の神殿長会 新たに組織される」『聖徒の道 1982 年 10 月号』65 頁 末日聖徒イエス・キリスト教会

「リアホナ 2011 年 4 月号 アドニー・Y・小松長老が逝去される」、<https://jp.churchofjesuschrist.org/2011-apr-03?lang=jpn>、2022 年 5 月 3 日にアクセス。

ジュディー・N・小松 メイトロン

1925 年 11 月 11 日、ハワイホノルルに生まれる。1948 年、将来の伴侶となる小松会長が進駐軍時代に、ジュディー姉妹にバプテスマを施した。結婚してすぐ、事前連絡なしに小松会長が支部長に召され、ハネムーン出発日に、その会合に彼が出席することになったとき、「家内は何の不平も口にしませんでした。何という忠実さでしょう！」と小松長老はたたえた。専業主婦として 4 人の子どもを育ててきた。教会の召しとしては、初等協会会長、日曜学校教師と書記、プライマリー書記、扶助協会顧問、扶助協会中央管理会会員の責任を果たしてきた。好きな言葉は「Her closeness to the Lord is reflected in how she lives her life.」現在、ハワイに在住。



サム・K・島袋 神殿会長 島袋道子 メイトロン

1984年 ～ 1988年

来歴

サム・K・島袋神殿会長

1925年6月7日、ハワイホノルルに生まれる。10代の時にラジオでモルモンタバナクルの音楽を聞き、興味を覚える。その後、仕事の同僚から教会の活動へ誘われ、6ヶ月の求道者の期間を経て、1942年2月25日に改宗。1954年から3年間、北部極東伝道部で専任宣教師として奉仕する。1956年4月、沖縄に赴任した最初の宣教師となった。1957年10月30日、道子姉妹とハワイ神殿で結婚。その後、一人娘を授かるも、彼女が15歳のときに病気で先立たれてしまう。

ハワイ大学で学士号を取得後、ハワイ州労働部で勤務。教会の召しとしては、ビショップ、高等評議委員、ステーキ会長（ハワイ州ホノルル西ステーキ）、伝道部会長（仙台伝道部）、東京神殿第一副神殿長、七十人定員会、アジア北地域会長会など。

趣味は、クラシック音楽を聴くこと。タバナクル合唱団日本公演があったとき島袋神殿長の希望で神殿内で合唱してもらったことがあったとのこと。

2015年10月8日ホノルルにて90歳で逝去。

島袋道子メイトロン

1933年11月30日に群馬県で生まれる。女学校に宣教師が訪ねてきたことがきっかけで改宗。

群馬県立前橋女子高等学校を卒業。教会の召しとしては、プライマリー教師、若い女性書記、扶助協会教師、ハワイ神殿オーディナンスワーカー。趣味は、箏曲。ハワイにも琴を持っていくほど熱中し、テレビ局で正月演奏をしたこともある。免許は準師範。

島袋道子 メイトロンの証

私たちが東京神殿へ召されたのは1984年9月だったと記憶しています。神殿が奉献されて数年が経っていましたので当時の神殿宣教師や奉仕者は経験を積んでいました。謙虚で物静かな振る舞いは神殿内の空気まで清められていると感じました。いろいろな経験と一緒に働いた人々を思い出しますが紙面に限りがありますので少しだけ書いてみます。

古い会員の柳田兄弟姉妹は奉仕者として働いておりました。姉妹はお父さんの高木兄弟と共に教会の賛美歌を日本語に訳した方と聞いています。戦前の会員で奈良兄弟姉妹はもう高齢で参入者として度々神殿に来られていました。奉仕者の眞実操姉妹は沖縄出身で戦中から戦後にかけて壮絶な経験したということで証は本当に素晴らしかったです。彼女の吹き込んだテープは宣教師たちも熱心に聞いていました。今でもテープが残っていれば若い人たちに聞いてもらえるのと思います。この方々は皆故人になっています。

ハワイからの神殿宣教師も開館当時から少々いましたが神殿長として主人がハワイ日系兄弟姉妹にぜひ神殿宣教師になるよう勧める手紙を送った甲斐もあってかハワイから神殿宣教師が多くやってくるようになりました。また宣教師用の宿舎も建てられ、外国からやってくる宣教師たちも自分で借家を探す心配も無くなりました。団体参入者たちの宿舎もできたので地方からもたくさんの参入者がやってきました。

神殿参入者の感想と証も聞くようになりました。ここに紹介しますのは一人の姉妹で地方からきた参入者でしたが儀式を終えて帰る前にわたしのオフィスにきて仰った事です。

彼女のお母さんは既に故人となっていました。夢で母さんが自分の儀式も早くして欲しいと言ったのを聞いたそうです。彼女は地方からやって来て身代わりの儀式をおこなうために直ぐに実行できず神殿に来たときは時間が経っていました。やっと身代わりの儀式を終わった後本当に安心しましたとおっしゃいました。また会社の仕事を終えてから神殿参入していた兄弟がいました。神殿に入ると心身が清められ、それから帰宅するのだと言っていました。また別の兄弟は神殿は安住の場所だと言いながら神殿に来ていました。

儀式が終わって神聖な部屋で長いこと瞑目をしている兄弟姉妹の姿を何回も拝見しました。3年目がすぎる頃、大管長会からヒンクレー長老が来日していましたので神殿にも来られ、もう1年伸ばして欲しいと仰り私たちは4年間東京神殿で務めました。

末日聖徒になって本当にたくさんの事を学びました。扶助協会で習ったことは日常生活にも大いに役立ちました。若い時に学んだ事は生涯身に付くと母親が言っていました。が実感しました。

主に導かれて人生を歩む事は大切なことだと証することができます。

島袋 道子





ラッセル・N・堀内 神殿会長 アネット・愛子・モリ・堀内 メイトロン

1988 年 ～ 1991 年

来歴

ラッセル・N・堀内神殿会長

1923 年 1 月 25 日に、ハワイ州マウイ島のラハイナにおいて堀内光隆と堀内（旧性小山）菊代の息子として生まれる。一人で教会を探し、改宗に至った。

進駐軍として日本に滞在中に愛子姉妹と出会い、1947 年 8 月 6 日に結婚。一人娘を授かる。

ブリガムヤング大学を首席で卒業し、カリフォルニア大学バークレー校で政治学修士号取得、ワシントン大学シアトル校で地政学博士号取得、カリフォルニア州サンマテオ短期大学で教鞭を執り、ブリガムヤング大学プロボ校では地理学部長などを務めた。教会の召しとしては日本東部伝道部会長（初代）、BYU アジアワードビショップ、MTC 支部会長などの責任を果たしてきた。趣味は釣りや庭仕事。

2011 年 1 月 15 日に、ユタ州オレムにて 87 歳で逝去。

アネット・愛子・モリ・堀内メイトロン

1925 年に東京で生まれる。伴侶となる堀内神殿会長からの紹介で改宗をした。米国サンフランシスコ日本総領事館 VISA & 法律、カルフォルニア州バアクレイ市カリフォルニア大学のテスト部、ユタ州ブリガムヤング大学日本語部の講師などを務めた。教会の召しとしては、プライマリー、日曜学校教師、扶助協会会長や顧問など。

趣味は 水彩画や読書。

好きな聖句は第 2 ニーファイ 1:5-7。

アネット・愛子・モリ・堀内 メイトロンの証

私達にとって神殿奉仕は特別な祝福でした。熱心な信仰の会員たち、日本全国だけでなくアジア各地からの会員の方々とお会いでき、ひとりひとりの強い証を受けるすばらしい経験でありました。残念ながらあまりにも霊的な貴重な経験ですのでそれを公開できません。

神殿内の職員、宣教師すべてに「ひとりひとりの参入者は特別ですから、愛と笑顔をもって接するように」いつも強調しておりました。神殿長はドアを空けて参入者の方々を送迎するのを毎日のよろこびとしておりました。遠路からの参加者の方々の便利の為に食事を提供することもはじめました。誰一人本職の料理人ではないので全く悪戦苦闘の状態からはじめました。

職員の方々は実に多くの犠牲をはらって下さり、本当に福音を愛する人々でした。ハワイから又、米国本土からの宣教師、国内の宣教師たちも同じく、神を愛し、人を愛する人々で多くの犠牲をはらって下さいました。団体参入日などは参入者用のエレベーターには宣教師たちは乗らず、皆さんご高齢でしたが、2階3階まで日に何回も階段を使用して頑張ってくれました。その他に、奉仕人がたりないと職員、宣教師一同でキッチン・ランドリー・ベールと皆さん頑張ってくれました。感謝しています。

神殿長とメイトロンにとっては、その他、ほとんどの週末は列車、バス、タクシーに乗って、日本中のステーキ・又ワード大会に出席して神殿参入を会員に感謝し又励ましました。多くの日本中の会員の方々とお会いし、福音のよろこびを分かち合う機会があり、うれしかったですが、体力的にチャレンジされました。私たちは神様を愛する故に彼の御心のままに行動いたしました。

私達が召しを受けた時のエピソードを少しお話しします。ソルトレーク本部に呼ばれ、東京神殿奉仕について聞かれました。その時のショックが大きかったので、二人して涙をこぼしてしまいました。

しばらく沈黙の後に涙と共に心からお受けしました。神を愛して今まで従ってきた者としてあたりまえのことでした。会員であるがゆえに時としてチャレンジを受けたり、困難にあうけれども、それはほんのわずかの間のことで、神様は愛と知識を与えてくださいます。常に良い計画を教えてくださいますことを証いたします。

主人がまもなく定年になるので魚つりのライセンスも買ってあり、数人の友人たちが待っているという話から、ヒンクレー長老が神殿の近くの有栖川公園の池で魚つりをしたらいいよという話になり、御自分の趣味は木を樹えるのが好きで・・・という話となってしまいました。そして、お別れの際に何回も感謝のお言葉“ありがとう”を繰り返され私達の方が恐縮してしまいました。

この長い人生で一番印象強いことといえば、宣教師としての奉仕の期間です。それによって今も多くの祝福を受け感謝しています。神様は私達を愛し、見守ってくださっていることを証します。お互いに頑張りましょう。

主人の好きな言葉として、「頑張りましょう。出来ます」イエス様の御名を通して証します。

堀内 アネット 愛子





トモスエ・アボ 神殿会長 ヘレン・F・アボ メイトロン

1991 年 ～ 1992 年

来歴

トモスエ・アボ 神殿会長

1922 年 8 月 8 日、ハワイのカウアイ島ワイメアに生まれる。伝道地は太平洋中央伝道部。後に 1971 年から 1974 年まで日本伝道部会長にも召される。他にもビショップリック、高等評議員、ステーク会長、神殿の結び固めの儀式執行者などの教会の責任を果たしてきた。

1957 年 1 月 10 日にヘレン姉妹とハワイ神殿にて結婚し、5 人の子どもを授かる。仕事としては新聞販売業でいた。2008 年 4 月 7 日ユタ州アメリカンフォークにて 85 歳で逝去。

ヘレン・F・アボメイトロン

1926 年 5 月 17 日オアフ島ワイアナエに生まれる。ハワイ大学を卒業。扶助協会のワークリーダー、指揮者、神殿奉仕者などの教会の責任を果たしてきた。

2010 年 8 月に 84 歳で逝去。



ウォルター・繁雄・照屋 神殿会長
ジョイス・利根・永澤・照屋 メイトロン

1992 年 ～ 1994 年

来歴

ウォルター・繁雄・照屋神殿会長

1915 年 6 月 1 日、ハワイのマウイ島ワイカプに生まれる。
1942 年 7 月 11 日、ジョイス姉妹とライエ神殿にて結婚。
仙台伝道部の初代伝道部長に召される。他にも教会の召し
としてハワイ伝道部長会の一員、東京神殿副神殿長、日曜
学校教師、支部長などの責任を果たしてきた。
2004 年 12 月 18 日にハワイのマウイ島で 89 歳で逝去。

ジョイス・利根・永澤・照屋メイトロン

1922 年 2 月 15 日、ハワイのホノルルに生まれる。教会
の召しとしてステークのプライマリーや扶助協会の会長会、
プライマリーや日曜学校の教師などの責任を果たしてきた。
2006 年ハワイのマウイ島で逝去。



菊地良彦 神殿会長 菊地登志子 メイトロン

1994 年 ～ 1997 年

来歴

菊地良彦神殿会長

1941 年、北海道日高幌泉郡幌泉町（現えりも町）に生まれる。病氣療養のため室蘭の叔父の家に身を寄せていた頃に宣教師と出会い、数週間後に改宗する。同じころ、2 年間の求道者生活を経て教会に入った越谷登志子姉妹と出会う。1960 年から北部極東伝道部で専任宣教師として 3 年半奉仕する。1964 年に登志子姉妹と結婚。3 人の娘と 1 人の息子を授かる。亜細亜大学で経営心理学を専攻する。その後シカゴ大学グレートブックス（西洋哲学書）の販売を担当し、その後レナウエア社の日本販売ジェネラルマネージャーに招待される。教会の召しとしては支部会長、ステーク会長などを経て 1977 年には七十人定員会の会員に任命された他、ハワイ伝道部会長やアジア北を含む多数の地域会長会で奉仕をされてきた。趣味は読書、特に歴史書を読むこと。好きな聖句はヨハネ 3:16。「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」

菊地登志子メイトロン

北海道室蘭市に生まれる。教会の賛美歌に誘われて教会の前に立ち、その後 2 年間の求道者生活を経て教会に入る。東京アテネフランセ語学院普通課、日本語タイプライター学校を卒業後その学校の教師となる。教会の責任としては扶助協会会長、子供日曜学校責任者、日曜学校教師、扶助協会教師、音楽指揮者およびコーラスの指揮者、プライマリー教師、伝道会長婦人などの召しを果たしてきた。趣味は読書、特に健康に関する本や薬草の研究。好きな聖句はヨハネ 13:34-35。

引用元：

— ローカルページ（1994）「東京神殿の新神殿長菊地良彦長老が召される」『聖徒の道 1994 年 9 月号』2 頁

末日聖徒イエス・キリスト教会 — 菊地長老 教会ホームページ プロフィール

<https://www.churchofjesuschrist.org/church/leader/yoshihiko-kikuchi?lang=jpn>

菊地良彦 神殿会長の証

神殿内の霊性の欠如

最初、私たちが神殿に着任したときは、神殿内の霊的な雰囲気欠如に驚かされました。参入者がロビーで大声で話することに驚かされました。それから数か月間、神殿の玄関に入るドアを開けて入る、その玄関のドアの所から、そこは神殿の一部であるので、神殿内に参入されたら「主の声を聴く」ことが「神殿礼拝の本質である」ことを強調しました。儀式を執行するどのような場所でも、例えばバプテスマの部屋、礼拝堂、エンダウメントの部屋、洗いの部屋、日の栄の部屋、結び固めの部屋、「神殿のとばり」での儀式の執行は、授ける者も受ける者も「神との交わりを受ける最も聖なる場所なので...」（教義と聖約 124 章 39 節）厳粛に執行することが必要であることを強調しました。特に、儀式執行者（オーディナンスワーカー）及び、神殿会長会、メイトロンとその補佐、神殿宣教師の皆さん、全儀式執行者の皆さん、特に儀式執行者の主任は模範として、神殿内では「囁く＝ささやく」ように努めることを要請しました。口を一回開くと同時に、耳と心で三回以上「主の声を聞くように」とお願いして、次第に霊性を持つ方々が多くなり、「囁くこと」に努めるようになりました。神殿内の霊性が大きく変わりました。「主の、御霊の声」を聞く人が多くなりました。それは神殿礼拝の大きな変革でありました。

神殿の周りの雑草を取り、鉄のフェンスに 花のハンギングバスケットをかける

最初に赴任した時、時差の関係で朝早く起きました。神殿の周りを一回りしました。特に、玄関の入り口の周りに雑草が沢山生えていることに気がつき、台所からステンレスのナイフを持ち出して、雑草取りを革靴を履いて取り始めました。それから毎朝雑草取りが私の日課になりました。主に捧げるものは、心も、庭も、建物も、最上のもの、最高級のものではなくてはならないと信じていた私は、神殿の清掃管理人の方々が自分の責任を取得するまで忍耐して一年ぐらい草取りを続けました。ある時、近所のお年を召した方が私を清掃の管理人だと思い、「管理人さん、どうなさいましたか。最近はこの建物は、生き生きして輝いていますね。とても気持ちがいいです。ありがとうございます。」彼女は、私にお礼をしてくれました。この近くに長く住んでいますのに、とてもこの建物が生き生き輝いていますと言ってくれました。私は神殿内の掃除をしてくれる兄弟の方々にもお願いしましたが、参入者が少ない時には、階段や廊下、エレベーターの中のカーペットのシミを取って歩きました。ただ清潔だけでなく、「ベスト、すなわち、最善と最高級ものを、主に捧げる気持ちが重要なのです。」その

うちにソルトレイクから予算を頂き、裏に小さな温室を作り、年中、神殿内が、蘭の花が飾られるように努めました。

土曜日、神殿の昼のセッションが終わる頃、 各ステーキや地方部に出かけた

神殿礼拝は教会員の皆様が、神殿礼拝の意義、祝福、恵み、代理による死者の儀式の執行が、自分の霊性の向上に掛けがえのない奉仕であることを強調するため、また、「ありがとう」と返事が返ってこない死者の為に奉仕をすることは、それこそが高邁な奉仕の姿であることを語るために日本中のステーキや地方部に出かけました。

また、ジョセフが教えられた「死者の救いなしに、私達の完成はありえない」ことなどの「贖いと神殿礼拝の関係」を理解するために、日本の兄弟姉妹に「神殿礼拝の価値と意義」について説明する必要があると強く感じましたので、全国を訪問しました。半年が過ぎ、一年経つ頃は神殿礼拝のための神殿参入者がふえて、神殿のエンダウメントセッションの数は倍になり、一年半になると2倍に増え始めました。儀式執行者は神殿宣教師に頼っていましたが、儀式執行者の数が2倍になり3倍になっていきました。限定儀式執行者の数を入れると4倍になりました。団体神殿礼拝参入者だけではなく、個人が自主的に神殿礼拝の計画をする方々が大変多くなりました。神殿内の霊性の高さ、靈感の強さ、神殿内で主の声を聞きましようとする皆が努力し始めたときに奇跡が起こり始めました。参入者がただ儀式を受けるだけではなく、限定儀式執行者として儀式を執行する喜びをも強く感じるようになりました。全国的に、神殿礼拝の機運が高揚していきました。

3年の召しの間、毎週土曜日の神殿の昼のエンダウメントのセッションが終わるころ、神殿会長の顧問の人たちに神殿の管理をお願いして、私と家内（メイトロン）は日本中のステーキや地方部に赴き、「神殿礼拝の神聖さ」、「美しさ」、「有難さ」、「尊さ」、「霊界から、ありがとうございますとの死者の声が聞こえなくても、その死者のために、心を込めて、奉仕をすることが、イエス様のように高邁な日の栄光の資質を築きあげる、奉仕の仕方であること」を訴え続けました。

訪問する土曜日の夜は、神殿限定儀式執行者に召されておられる方を、神殿外で出来る訓練をしました。また、新しく召される限定儀式執行者の兄弟姉妹の面接と任命をしました。その夜は、教会員全体に「神殿礼拝の祝福と意義」を説明できるディボーショナル（神殿礼拝の祈り会）を開きました。

日曜日の聖餐式、午後から神殿ディボーションナル

日曜日は、時間がいただければ、聖餐式では、「キリストの贖いと神殿礼拝の関係」について説明しました。「聖餐式の意義と、キリスト様の贖いと神殿礼拝」の祝福と意義と関係についてお話をしました。「神殿礼拝からの祝福と自らの聖め」について説明させていただきました。

午後から、再び神殿のディボーションナルを開き、「贖いにより聖められ、昇栄に到達するため、自分と先祖が救われることが大切である」こと、「神殿礼拝は自分の人生に祝福をもたらす」等の、色々な日本の兄弟姉妹の霊的な経験を例にとり、語りました。

主の栄光が主の宮に満ちた

ソロモンが、主に、神殿を遙つて奉献した時には、彼はまだ、主に対して忠実であり、謙虚であった。そのため、主は天から火を送り、「主の栄光」が主の宮に満ちた。祭司たちが神殿内に入ることができないほど、火が下った。すなわち「主の栄光」が宮に臨んだのを見て、人々は地に伏して、主に感謝しました。このような謙虚な気持ちを、ソロモンが主の御心に反する前に彼はもっていたのであった。主は夜にソロモンに現れて次のように約束された。その約束は、今日、現在でも、私たちが神殿礼拝をする時に現実に実現されるのです。私と家内は、日本中の聖徒の皆さんに、次の主の聖なるお約束を、確信を持って伝えることができました。

1. 私はあなたの祈りを聞き、この所を私の為にえらんた。
2. 犠牲をささげる家とした。
3. 私が天を閉じて雨をなくし、また私がいなごに命じて地の物を食わせ、また疫病を民の中に送るとき、私の名をもってとなえられるわたしの民が、もしへりくだり、祈って、私の顔を求め、その悪い道をはなれるならば、
4. 私は天から聞いて、その罪をゆるし、その地をいやす。
5. いまこの所にささげられる祈りにわたしは目を開き、耳を傾ける。
6. 今私は私の名をながくここにとどめるために、宮を聖別した。
7. 私の目と私の心は常にここにある。

神殿は、主が祈りをお聞きくださるところ。神殿は犠牲をささげるところ。疫病を送るときも、私の民が、へりくだり主の顔を求め、悪い道からはなれるならば、私達の罪を許して、地を癒してくださる。神殿でささげる祈りに、主は目を開き、耳を傾けてくださる。宮を聖別し、主の心は常に、神殿にあると約束をしておられる。

儀式執行者の最大の奉仕は 死者のためにセッションを受ける

儀式執行だけに満足するのが、神殿での奉仕の姿ではなく、一番の神殿での奉仕は、エンダウメントの儀式に自ら入り、死者の名前をもって、「死者の囁く声を静かに聞く」ようにすることが、神殿礼拝により、自分の霊性をどんなにか高めるか悟っていただきました。神殿会長とメイトロンは、一日、数回、エンダウメントセッションに入ることが、私たちの日課でした、既に、数年、儀式執行者（オーディナンスワーカー）として奉仕をしておられても、エンダウメントのセッションに、稀にしか、参加しない方々が沢山いました。イエスキリスト様の、贖いが完成されるためには、清い手と、聖い心と、淨い思いと、潔い肉体をもって、主の代弁者として奉仕することの大切であることを理解していただくように要請しました。自分の時間を犠牲にして、儀式執行者（オーディナンスワーカー）がエンダウメントのセッションに入り、自らの時間を犠牲にして、奉仕することにより、主の、「贖いの意義が理解され自分の霊性が高められる」ことを告げました。神殿内の霊気が変わっていました。東京神殿内の霊性は大きく変わりました。神殿礼拝に参入した方々は、神殿の霊性に気が付き始めました。

菊地 良彦



2021 年、自宅庭にて（日本の八重桜『嵐山』）

菊地登志子 メイトロンの証

主人と私は1994年9月1日、神殿会長とメイトロンとして、東京神殿に着任しました。日本の聖徒の皆さんは、天の父なる神様がお与えなられた東洋で最初の、しかも、日本の国に天父がお与えになられたのが日本東京神殿でした。真に、神様ご自身の聖なる宮でございます。

この神聖な宮に、東京、大阪、名古屋、遠くは九州、北海道、沖縄から大きな犠牲を払って、神殿礼拝に多くの方々が出席でなられていました。それはとても美しい光景でした。

兄弟姉妹の熱心さには感心しました。その上に、東京近郊の方々は、毎週ないしは隔週に一度、神殿の儀式執行者（オーデナンスワーカー）としてご奉仕なさっておられるのは大変感心いたしました。

その上、ご自分の仕事から退職されて、24時間、毎日、毎日、1年半も奉仕されておられる神殿宣教師の方々には、頭が下がりました、私は心から彼らには感謝致しました。

時が半年たち、1年経っていきますと、神殿礼拝参加者がどんどん増えていきました。その為に、エンダウメントの為に儀式のセッションの数が倍になり、団体参加者の参加者は勿論のこと、聖徒の皆さんが自主的に、しかも積極的に神殿礼拝に参加する方々が物凄く増えていきました。特に、神殿宣教師の皆さんには多くの神殿の運営が目まぐるしく大きく変わって行きましたので、エンダウメントが追加されてゆく毎に、大変なご無理をお願いしました。それでも彼らは不平も言わずに、熱心にご奉仕してくださいました。

彼らは日曜日には東京の近くのワードに赴いて、聖餐会で時間を頂いて、神殿礼拝の祝福について証をお伝えさせて頂いておりました。このように神殿宣教師の皆さん、オーデナンスワーカーの皆様の並々ならぬ努力と、祈りと、奉仕があればこそ、神殿は順調に運営されて行きました。そのような神殿宣教師の皆さん、熱心な儀式執行者（オーデナンスワーカー）を見て、次のようにおっしゃて下さる方が沢山おられました。

1. 「何か、神殿宣教師の皆さんから、清い信仰の輝き、信仰の純粋さを感じます。」
2. 「何か、信仰の持ち方を、教えていただいているようです。」
3. 「神殿に来ると、皆さんの目が、とても輝いています。」
4. 「神殿に来ると、神様に奉仕する姿を教えて頂いているようです。」
5. 「神殿に来て、聖なる儀式を受け、神殿の皆さんの生き生きした姿を見るだけでも、心が洗われます。」

また、若い青少年の男女が多く日本中から来られ、亡くなられた死者の為に熱心にバプテスマを受けている姿はとても感動的でした。バプテスマフォントを見ながら、主人は一句を読みました。「ひとやにて、御言葉受けし、同胞の、涙をおもいて、我海に立つ」（青雲）。感謝しました。

私のメイトロン補佐の方々、儀式スーパーバイザー（現コーディネーター）神殿内の姉妹の責任をととても上手にできるようになりました。儀式の運営がオーデナンスワーカーの皆さん、限定儀式執行者の皆さんで、上手に出来るようになりました。私は前に出る必要はありませんので、主人と私は一日2～3回エンダウメントに入りました。私は、静かにエンダウメントを受けることが1番大好きです。「御霊の囁きに耳を傾ける」ことが大好きです。

「囁く」（ささやく）と書く漢字は、口を1回開く間に、「御霊のささやき」に3回以上、心と耳を傾けることを意味しています。囁く状態が、神殿内を包んだ時には、全神殿内が本当の「御霊が満ち溢れた所」へと変化して行きました。

主人が、日本韓国（後にグアムマイクロネシア地域を含む）地域代表役員（現エリア会長）の時も、旅行がない時は東京神殿で神殿礼拝をしました。1978年～1982年、4年半の責任を終えて、1982年7月、教会のソルトレイクの本部に転勤してから旅行がない時には、1982年の後半から1987年の夏ごろまで、毎週月曜日（教会幹部の休みの日）に、主人と私はソルトレイク神殿で毎週神殿礼拝をさせて頂きました。

私も、メイトロンとして召され、皆様の為に熱心に働きたいと心に決めていましたが、1995年1月19日に小脳の腫瘍（良性）の摘出のため、近くの渋谷の日赤病院で手術を受けました。合計8時間の長い手術でした。

病院に入ってから17日目退院して、術後19日目、自分の責任を果たしたために神殿の扉を通過した時、「天の父なる神様の暖かい懷に抱かれている」ような、とても神聖な思いが込み上げてきました。神殿は「神様の聖い御霊」があふれているところでございます。

菊地 登志子



長嶺顕正 神殿会長 長嶺弘子 メイトロン

1997 年 ～ 2000 年

来歴

長嶺顕正神殿会長

1936 年、沖縄県に生まれる。無料英会話がきっかけで 1958 年に改宗した。1962 年に弘子姉妹と結婚し、6 名の子供に恵まれる。1960 年に沖縄銀行に入行。以降支店長代理を始め、文書課長、管財課長、厚生課長、総務部業務役等を歴任した。教会においては 1962 年から 1979 年まで沖縄で最初の日本人地方部会長を務める。次いで 1980 年に組織された沖縄那覇ステークの初代ステーク会長に召される。趣味は音楽と書道で、高校時代は吹奏楽部に在籍。書道は書芸会 7 段（準師範）だった。好きな聖句はコロサイ 3:14「これら小さいのものの上に、愛を加えなさい。愛は、すべてを完全に結ぶ帯である。」

長嶺弘子メイトロン

1939 年南洋ボナベ島に生まれる。会員のリフェローによって改宗した。教会の召しは日曜学校教師、扶助協会会長、若い女性会長、プライマリー教師、カブスカウトデンマザー等の責任を果たしてきた。趣味は料理とウォーキング。好きな聖句は 2 ニーファイ 31:20「したがって、あなたがたはこれからもキリストを確固として信じ、完全な希望の輝きを持ち、神とすべての人を愛して力強く 進まなければならない。そして、キリストの言葉をよく味わいながら力強く進み、最後まで堪え忍ぶならば、見よ、御父は、「あなたがたは永遠の命を受ける」と言われる。」

長嶺顕正 神殿会長の証

1997年8月26日午前7時20分頃、突然、ヒンクレー大管長から「長嶺兄弟お元気ですか。」と親しみと愛情を込めて話しかけてこられた時、懐かしさと畏怖心が入り乱れ、どのようにお話したか分かりませんでした。英語を話せない私がこれまで覚えた全知識を駆使して対応しましたが、私の窮状を察して下さった大管長は「明日通訳を通して話します。」と言われ電話を切られました。

翌日同じ時間に再びお電話をかけてこられました。この度は約束通り通訳を通して、「貴方を東京神殿の神殿会長に召したいと思いますが引き受けて頂けますか。」と言われた時、わが耳を疑いました。「神殿宣教師ではありませんか。」と聞きなおしましたところ、「いいえ、東京神殿の神殿会長です。」と言われました。その時、私の頭の中には日本の素晴らしい指導者の方々の顔が「走馬燈」のように浮かんできました。「大管長、私は信仰も弱く、知識もありません。」とお答えすると、大管長は「貴方はステーキ会長の経験もあり、また主が助けて下さるから大丈夫です。」と言われたので返す言葉もありませんでした。



何故なら私はヒンクレー大管長を心から敬愛し、また大管長が生ける真の預言者であられると言う強い証があります。ですから「いいえ、出来ません。」と答える勇気はなく、「私でよろしければ、謹んでお引き受け致します。」と申し上げました。

他にも優れた指導者が数多くおられるのに「なぜ沖縄から私たち夫婦が召されたのか」よく理解できませんでした。それでもこれまでの経験から、神様は戒めを忠実に守り、全力を尽くして働く時、何時も御手を差し伸べ助けて下さることを知っていたので、ニーファイが語ったように「わたしは行って、主が命じられたことを行います。主が命じられることには、それを成し遂げられるように主によって道が備えられており、それでなくては、主は何の命令も人の子らに下されないことを承知しているからです。」（第1ニーファイ3：7）、という思いで力不足は承知の上、この重大な召しを引き受けさせていただきました。

神殿ではたびたび断食と祈りを通して御霊の導きを受け、また、神殿で奉仕をしてくださった方々の助けを受けて、日毎に神殿会長、メイトロンとしての職務を果たせるようになりました。

ある日、まだ神殿の儀式が終わっていない先祖からの囁きが聞こえてきました。急ぎ記録を調べ身代わりのバプテスマ、洗いの儀式、エンダウメントの儀式が終わっても彼等の喜びを感じることができず不安な気持ちでシーリングルームに入りました。全員の結び固めが終わった瞬間、霊界にいる先祖の方々があたかも万歳三唱でもしているかのような歓喜の声が心に響いてきました。そこで霊界で結び固めの儀式を待っている死者は一日千秋の思いで待っていること改めて強く感じました。

「彼らは、自分を見つけて自由にするために子孫の一人が聖約を交わすのを見て喜ぶまで、何世紀もかかったのかもしれない。再会したときに先祖の目に浮かぶのは、『感謝か大きな失望』のどちらかです。彼らの心は皆さんと結ばれています。彼らの望みは皆さんの手にあります。」（ヘンリー・B・アイリング「結ばれた心」『リアホナ』2005年5月、77）

神殿ではしばしば断食と祈りを通して霊的な経験もし、教えも受けました。聖なる主の宮居にて皆さんに支えられて私たちの召しを無事終えることができたことはこれまでの信仰生活の中で最も祝福された3年間でした。感謝！！

長嶺 顕正

長嶺弘子 メイトロンの証

神殿は聖なる場所です。私たちは亡くなった方々の身代わりの儀式を受けることによって多くのことを学ぶことができます。

ある日エンダウメントを受けているとき、亡くなった方がそばで一緒に儀式を受けているのを御霊によって強く感じました。亡くなった方々が自分の儀式を心待ちにしておられることをはっきりと知ることができました。神殿は私たちの昇栄に欠かせない儀式を執行する宮居です。そこでは生者と死者の救いの為の神聖な儀式が行われます。先祖の救いの業に貢献することこそ、末日に生を受けた私たちに託された最大の責任の一つであると思います。

最初この召しを受けたときは責任の重さに圧倒され、押しつぶされそうでした。ある日神殿で心の底から主に助けを求め祈った時、主の御声を心に強く感じました。「すべて重荷を負って苦勞している者はわたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」(マタイ 11:28,30)

主はこの聖句を通して慰めと励ましを与えてくださいました。一生懸命頑張る時、主が重荷を軽くしてくださると信じて頑張ることができました。

「またわたしの天使たちはあなたがたの周囲にいてあなたがたを支えるであろう。」(教義と聖約 84:88) 主は神殿の御業を進める為に、多くの天使たちを送ってくださいました。その方々は副神殿会長、アシスタントメイトロン、神殿宣教師、またオーディナンスワーカーとして多くの犠牲を払って熱心に奉仕してくださいました。

神殿の中はいつも主の御霊があり、そこで奉仕している方々の顔は光り輝いていました。そのような素晴らしい兄弟姉妹の支えで、また主の助けと導きを受けて無事に召しを果たすことができました。これまでの長い信仰生活の中で最も祝福された3年間を東京神殿で過ごすことができましたことを心から感謝しています。イエス・キリストの御名により証します。

長嶺 弘子





坂井圭 神殿会長 坂井光代 メイトロン

2000 年 ～ 2003 年

来歴

坂井圭 神殿会長

1939 年、岡山県岡山市に生まれる。17 歳のとき宣教師に
出会いバプテスマを受ける。1967 年光代姉妹と結婚し、ハ
ワイ神殿にて結び固めを受ける。その後 3 人の息子に恵ま
れる。最初商社に就職したが、数年後、創設された教会翻
訳事業部に転職し、教会図書の出版、配送などに携わった。
1978 年仙台伝道部に召され、会長として働いた。東北に、
最初のステーキ設立の準備をし、1980 年ヒンクレイ長老の
訪問により、「仙台ステーキ」が創設された。伝道部帰還後、
管理本部で働き、その後、東京神殿の記録部長を務めた。

坂井光代 メイトロン

1943 年兵庫県神戸市に生まれる。20 歳の時、西宮支部の
教会英会話を通して宣教師と知り合い、福音のレッスンを
受け、改宗した。1967 年坂井圭兄弟と結婚。同年ハワイ
神殿において結び固めを受けた。1978 年～81 年仙台伝道
にて、2000～2003 年東京神殿にて奉仕した。

坂井圭 神殿会長の証

2000年の8月、突然我が家へ国際電話がかかってきました。使徒ヒンクレー長老からでした。用件は、「11月から東京神殿へ引越し、神殿会長として3年間奉仕しなさい。」でした。また「この召しが、”CHURCH NEWS”に掲載されるまで、公表しないでください。」でした。この突然のご指示にとっても驚きましたが、“主のお召し”ですので、さっそく準備を始めました。

空き家になる我が家は、息子家族にお願いし、住んでもらうことにしました。10月初旬ソルトレイクへ行き、訓練セミナーを受けました。下旬には神殿宿舎へ引越し、11月から奉仕が始まりました。

神殿別館には、数組の神殿宣教師ご夫妻が生活されていきました。彼らは、北は北海道、南は沖縄など、全国各地から来られていました。アメリカからのご夫婦もおられました。

奉仕活動は、火曜日から土曜日までで、神殿の儀式執行や、参入者のご案内などです。神殿宣教師のほとんどは、定年後の奉仕活動なので高齢者たちです。祭日や土曜日は参入者も多く、肉体的にも厳しい割り当てを担当しましたが、皆さん黙々と責任を果たしてくださいました。感謝、感謝、感謝です。

月曜日は神殿宣教師の準備の日です。年に1、2回、皆でレクリエーション活動（バス旅行など）にも出かけました。3年はあっという間に過ぎ、任務を終えて帰宅しましたが、貴重な経験をさせていただき、深く感謝しています。全国の信仰深い兄弟姉妹たちと交流でき、感謝しています。

坂井 圭

坂井光代 メイトロンの証

神殿の儀式を通して神様のみもとへ帰るための準備をすることができます。神殿で働くときに、死者と共に私たち自身も、大きな祝福を受けることができます。神殿をお与え下さった神様に感謝します。皆様の献身的なご奉仕に感謝します。

坂井 光代



福田眞 神殿会長 福田康子 メイトロン

2003 年 ～ 2006 年

来歴

福田眞神殿会長

1935 年、宮城県仙台市に生まれる。3 歳年上の兄が改宗したことに影響を受けて自身も改宗する。1956 年から 2 年間北部極東伝道部で宣教師として伝道した。1968 年に結婚。仕事においては株式会社ゼンシンの会長を務めた。教会の召しではビショップ、ステーク会長、伝道会長、祝福師等の責任を果たす。趣味は読書、演劇、音楽鑑賞で好きな聖句は使徒行伝 23:1「兄弟たちよ、わたしは今日まで、神の前に、ひたすら 明らかな良心にしたがって行動してきた」

福田康子メイトロン

1943 年東京都北区赤羽に生まれる。ある年のクリスマスに本当のクリスマスを知りたいと思っていたところ、この教会のチラシを見つけて支部を訪問。宣教師に会いパンフレットに書いてあった讃美歌「高きに榮えて」から前世で御父とともにいたことを知り、その後改宗する。1990 年から 1993 年まで仙台伝道部で宣教師として奉仕したほか、ステーク初等協会会長、ステーク扶助協会会長、ステーク若い女性会長等の責任を果たしてきた。趣味は絵画、音楽鑑賞。好きな聖句はマタイ 6:33「まず、神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。」

福田眞 神殿会長の証

若き友へ

私は1952年8月17歳のときに宮城県仙台市にあった末日聖徒イエス・キリスト教会仙台支部でバプテスマを受け、神の真の教会員になりました。

その頃は、教会堂はなく宣教師が借りていたお宅で集会が開かれていました。私が教会員となって1年後に日本家屋の大きな家（現在上杉ワードがある所）を教会は購入しました。購入後1階の2間を礼拝堂として改造されて、日曜日の礼拝行事を始め、MIA（相互発達協会）、扶助協会、などの集会が開かれていました。

私が教会員となって2年目のとき一人の宣教師が私に「あなたを系図委員会の委員長」に召しますと言ってきました。私はその時、この召しは何なのかが分かりませんでした。その宣教師は1枚の名刺の大きさのカラー写真を見せてくれました。それはライエハワイ神殿の写真でした。

彼は私に「この世で真のイエス・キリストの教えを聞かなかった人は今霊界で私たちと同じ神によって召された宣教師が真のイエス・キリストの教えを宣べ伝えています。それを受け入れた私たちの先祖は今この地上にいる真のイエス・キリストの教会員となったその子孫が、神殿に行って先祖の身代わりの儀式を受けることによって先祖は救われるのです」と話されました。

そのためにまずは先祖の名前を調べる必要があると言われました。私はそれを聞いてこれは、とても大切なことだと感じて早速戸籍謄本を集めました。後で考えるとその時にしかとれない除籍謄本も取れました。これも神様のお導きだとわかりました。その後私は専任宣教師として召され、2年間を主に捧げる機会に恵まれました。

その後私は仕事の都合で東京へ出て来ました。1960年代になって教会員が急激に増え始めました。当時のアンドラス伝道会長は東京や大阪、名古屋、札幌など大都市にステーキが出来るように支部を多く作り、日本人の指導者を多く召し、忠実な男性にメルキゼデク神権を与えシオンのステーキが出来るように準備されました。そして、指導者の訓練も始めましたが、この時のアンダーセン伝道会長は日本人の教会員で誰も神殿に入った人がいないことに気づきました。神殿に参入し天の父なる神と聖約を交わして清められていなければ、シオンの民とはなれません。日本に1番近い神殿はライエにあるハワイ神殿でした。

そこでアンダーセン伝道会長は日本の会員をハワイ神殿へ連れて行くための資金づくりとして、聖歌隊を組織し、讃美歌を歌いそれをレコードにし、主にアメリカの会員に買って頂いたり、また真珠を販売している教会員の協力で真珠をこれも主にアメリカの会員に買って頂いたりしました。なぜなら、飛行機をチャーターしていくと当時のお金で一人12万円位掛かりました。その時の若い人の給料は1ヶ月3万円～5万円です。夫婦二人でいくと24万円ですから、

これらのお金を用意するのは本当に大変でした。ある家族は朝食代を削るために近所のパン屋さんからパンの耳をただでいただき、朝食替わりにしたり、生命保険を解約したり、毎日使っているバイクを売ったり、お金を借りたり、様々な方法でハワイ神殿へいく準備がされました。

また、神殿に行くための霊的準備として神殿とは何か、神殿で行われている儀式について学びました。多くのことを学びましたが、今でも覚えていることは、神殿に参入し、そこで主と聖約を交わさなければ、末日聖徒として半人前であるといわれたことです。確かにこの言葉は意味ある言葉です。なぜなら神殿に参入するたびに私達は主と交わした聖約を思い起こし、さらに自らを高めるために、毎日の中で悔い改めることが大切だからです。

この様な多くの犠牲を払って、200人近くの末日聖徒が10回にわたってハワイ神殿に参入したことは、教会の歴史でも他に例のないことです。また、忘れてならないことはこの日本からの参入者を暖かく迎え、日本人が日本語で儀式を受けられるように日系2世の兄弟姉妹たちが仕事を休んで奉仕して下さったことです。主なる神はこの様な物質的霊的な犠牲を払って、参入した私達と、それと同様に多くの犠牲を払って、私達を暖かく迎えてくださったハワイの日系2世の兄弟姉妹とによって行われたハワイ神殿団体参入を本当にお喜び下さったと思います。何故なら私達がハワイ神殿に3度の団体参入した翌年（1970年）アジアで初めてのシオンのステーキが東京に誕生いたしました。この後大阪、横浜、名古屋、札幌、福岡等日本全国にシオンのステーキが誕生しました。

また、シオンの東京ステーキ誕生後5年目に日本で最初の日本地域総大会が日本武道館でスポンサー・W・キンボール大管長の管理のもとに開かれ、大会の中でかの歴史的発表が行われました。キンボール大管長が東京に神殿が建てられると発表されたその時に御霊が会場一杯に溢れて、通常大会では決して起こらない会場を揺るがすような歓びの拍手が起こり、キンボール大管長は話を止めて歓びの御霊を感じておられました。

このようにして、聖きを主に捧げる神殿が東京に建てられました。

1980年9月15日東京神殿の一般公開が行われ、各国大使をはじめ、名士を含む約5万人が参観しました。また、新聞にも白亜の神殿として紹介されました。奉献式は10月27日に行われました。スポンサー・W・キンボール大管長をはじめとする夫人同伴の中央幹部、各ステーキ会長、伝道部会長、神殿宣教師が出席する中、東京神殿の定礎式が行われ、引き続き4階の日の栄えの部屋で奉献式が行われました。日の栄の部屋に入りきれない兄弟姉妹は結び固めの部屋で参加しました。日本全国から集まった教会員のために、吉祥寺の東京ステーキセンターで10月28日、29日

の2日間にわたって1日3回計6回にわたって、神殿内で行われたと同じ奉献式が行われました。

初代の神殿会長はドゥエイン・N・アンダーセン会長（かつて伝道会長）が召されました。また、神殿宣教師とかつてハワイ神殿でお世話になった日系2世の兄弟姉妹もおいでくださり、助けてくださいました。私も最初の頃からワーカーとして奉仕させて頂きました。

後に10代目の神殿会長・メイトロンとして2003年から2006年の3年間奉仕させて頂きました。この3年間は正しく日の栄の王国で奉仕させて頂いたと感じています。神殿においでになる方も、奉仕をされる方も皆「聖きを主に捧げるため」においでなられるので日の栄えの王国のように聖さに溢れているところです。

天の父なる神は私達神の子のために、救いの計画を定められました。この計画の中心をなすものはイエス・キリストの贖い、無限の贖罪であります。神殿はこのキリストの無限の贖罪に対する信仰を深め、私たちも天の御父に全てを捧げることを聖約するところです。また、ラッセル・M・ネルソン大管長が言われているように、末日におけるイスラエルの集合のためでもあります。この世のイスラエルの集合は伝道であります。

「そして、この御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである。」（マタイ24：14）

次の世界における伝道も激しく行われています。次の世界で福音を学んで改宗した方々はこの世でのバプテスマを受けなければ救いを得ることは出来ません。次の世界の方々のための救いの儀式は聖なる神殿で行われます。若い兄弟姉妹たちはこの次の世界に行かれた方の名前を調べ、その方のために神殿で死者の為のバプテスマを受けることが出来ます。

神殿の儀式の最も重要なものは結び固めの儀式であります。夫婦が家族がまた先祖と私たちが永遠に結ばれて大いなる神の永遠の家族となることです。

若い兄弟姉妹の皆さんは神殿で永遠の夫婦、家族となるための儀式を受けられるように、聖典を毎日読み、常に熱心に祈り、戒めを守り、常に清さを保ち主の宮居で儀式を受けられるように生活をされるよう願っています。そして、天のお父様が神の子にお与え下さるすべての祝福を受けられるように祈っています。より聖められ、昇栄に到達するため、自分と先祖が救われることが大切である」こと。「神殿礼拝は自分の人生に祝福をもたらす。」等の、色々な日本の兄弟姉妹の霊的な経験を例にとり、語りました。

主の栄光が主の宮に満ちた

ソロモンが、主に、神殿を遡って奉献した時には、彼はまだ、主に対して忠実であり、謙虚であった。そのため、主は、天から火を送り、「主の栄光」が主の宮に満ちた。祭司たちが神殿内に入ることができないほど、火が下った。すなわ

ち「主の栄光」が宮に臨んだのを見て、人々は地に伏して、主に感謝しました。このような謙虚な気持ちを、ソロモンが主の御心に反する前に彼はもっていたのであった。主は、夜にソロモンに現れて次のように約束された。その約束は、今日、現在でも、私たちが神殿礼拝をする時に、現実実現されるのです。私と家内は、日本中の聖徒の皆さんに、次の主の聖なるお約束を、確信を持って伝えることができました。

私はあなたの祈りを聞き、この所を私の為にえらんだ。

犠牲をささげる家とした。

私が天を閉じて雨をなくし、また私がいなごに命じて地の物を食わせ、また疫病を民の中に送るとき、私の名をもってとなえられるわたしの民が、もしへりくだり、祈って、私の顔を求め、その悪い道をはなれるならば、私は天から聞いて、その罪をゆるし、その地をいやす。

いまこの所にささげられる祈りにわたしは目を開き、耳を傾ける。

今私は私の名をながくここにとどめるために、宮を聖別した。

私の目と私の心は常にここにある。

神殿は、主が祈りをお聞きくださるところ。神殿は犠牲をささげるところ。疫病を送るときも、私の民が、へりくだり主の顔を求め、悪い道からはなれるならば、私達の罪を許して、地を癒してください。神殿でささげる祈りに、主は目を開き、耳を傾けてくださる。宮を聖別し、主の心は常に、神殿にあると約束をしておられる。

儀式執行者の最大の奉仕は死者のためにセッションを受ける

儀式執行だけに満足するのが、神殿での奉仕の姿ではなく、一番の神殿での奉仕は、エンダウメントの儀式に自ら入り、死者の名前をもって、「死者の囁く声を静かに聞く」ようにすることが、神殿礼拝により、自分の霊性をどんなにか高めるか悟っていただきました。神殿会長とメイトロンは、一日、数回、エンダウメントセッションに入ることが、私たちの日課でした、既に、数年、儀式執行者（オーディナンスワーカー）として奉仕をしておられても、エンダウメントのセッションに、稀にしか、参加しない方々が沢山いました。イエスキリスト様の、贖いが完成されるためには、清い手と、聖い心と、淨い思いと、潔い肉体をもって、主の代弁者として奉仕することの大切であることを理解していただくように要請しました。自分の時間を犠牲にして、儀式執行者（オーディナンスワーカー）が、エンダウメントのセッションに入り、自らの時間を犠牲にして、奉仕することにより、主の、「贖いの意義が理解され自分の霊性が高められる」ことを告げました。神殿内の霊気が変わっていました。東京神殿内の霊性は大きく変わりました。神殿礼拝に参入した方々は、神殿の霊性に気が付き始めました。

福田 眞

福田康子 メイトロンの証

東京神殿で奉仕させていただいた日々を振り返り、その豊かな祝福を感謝致します。思いがけないコロナ禍の中で、教会に神殿に集えることがどれ程すばらしい祝福であるかを改めて知る毎日です。

私の神殿奉仕の原点はハワイ神殿訪問です。1965年に第1回ハワイ神殿訪問が、アンダーセン伝道会長によって計画されました。私達は第3回（1969年）に参加することが出来ました。ハワイ神殿の兄弟姉妹の皆様は何もわからない私達を暖かく迎えてくださり、朝早くから夜遅くまで優しく助けてくださいました。ハワイ神殿で暖かな笑顔で心を込めて奉仕なさる方々の模範に感動いたしました。私達はもし万が一にでも日本に神殿が建立された時ハワイの方々のようなご奉仕が出来るかしらと思い、また、憧れました。

東京神殿が開かれた時にもハワイ神殿の奉仕者の方々が来日され、ご指導くださいました。ハワイ神殿の兄弟姉妹の篤い信仰と愛のご奉仕の尊い模範を改めて心より感謝申し上げます。

私達は日本国中の兄弟姉妹の熱心な愛と信仰のご奉仕のお姿に接し、沢山の学びと気づきをいただきました。儀式をお受けになられる度に「ありがとうございます」とおっしゃる年輩の姉妹がいらっしゃいました。私はそのお言葉が身代わりをされていらっしゃる亡くなられた方のお声のように思いました。その事をたずねますと「はい、亡くなられた方のお気持ちでありがとうと言っております。」とお言葉でした。姉妹の愛と信仰に心を打たれました。

神殿の儀式は身代わりをされる方（参入者）と亡くなられた方、儀式を執行される方の3者で行われます。一つ一つの儀式を愛を込めてさせていただく時、御霊が下ります。すばらしい救いの儀式に携わらせていただいた機会を心から感謝いたします。

東京神殿が再奉献され、参入させていただく時が近づいてきています。一日も早くコロナ禍が収束されおだやかで平安な日々を迎え参入出来ますように願い祈っております。

福田 康子



中野正之 神殿会長 中野道子 メイトロン

2006 年 ～ 2009 年

来歴

中野正之神殿会長

1943 年、北海道札幌市に生まれる。1959 年に高校 1 年でバプテスマを受け、その後、日本大学理工学部に学ぶ。大阪にある製菓会社のエンジニアから製菓会社に転じ、様々な管理部門で働いた後、医療用医薬品製造業公正取引協議会（業界団体）に籍を置く。定年 2 年前の 2002 年に地域七十人に召され、2006 年秋の総大会で解任されるまでおもに関西を足場に教会の発展に尽くす。モットーは「常に主に仕えるように聖徒に仕える」。これまで支部会長、ビショップ、伝道部会長会顧問、ステーク会長、祝福師、結び固め執行者、大阪重点都市広報評議会チェアマンなどとして奉仕する。神殿会長としての召しの解任後、滋賀県大津市に帰り、2019 年 12 月まで、地域神殿家族歴史アドバイザー（相談員）として夫婦共々奉仕をする。2017 年 9 月には、第 4 回「信仰の遺産」講座において 教会と社会との交わりー 関西における広報活動の足跡ーを講演する。

中野道子メイトロン

1943 年、島根県松江市に生まれる。1967 年に大阪で改宗。ステーク扶助協会会長、ステーク初等協会会長などに召される。責任を果たす中で限界を感じ、小さな子供をかかえながら佛教大学福祉学部の通信制に 30 代後半で入学、その学びを召しの中に生かしてきた。現在、福祉士の資格を持ち、またいのちの電話のテレフォンカウンセラーなどとしても活躍した。

引用元：

— ローカルページ（2006）「東京神殿・福岡神殿の神殿会長会が再組織される — 2006 年 11 月 1 日に着任」
『リアホナ 2006 年 12 月号』L8 頁 末日聖徒イエス・キリスト教会

中野正之 神殿会長の証

主の宮居から受け継がれる主への信仰

私は 24 歳の時に初めてハワイ神殿を訪問する機会に恵まれ、末日聖徒イエス・キリスト教会の主の宮居での儀式を受けました。先祖の身代りの儀式にも預かり、その後、特別な祝福により、1969 年 7 月にハワイ神殿にて神殿結婚を執行していただきました。それ以来、ハワイ神殿団体訪問、ソルトレイクや開拓者の旅などの機会を通じて、神殿儀式に多く預かり、主の宮居における聖なる儀式と聖約がもたらされる祝福を更新してきました。

去る 2006 年には、ゴードン・B・ヒンクレー大管長から日本東京神殿会長としてエリヤの鍵(シーリング)を授かり、奉献の律法を遵守して、最善を尽くすことを約束しました。神殿に着任する 1 週間前には、大管長からソルトレイク神殿においてプレゼンテーションを受けるために招かれました。

まず、大管長が新任 38 組の神殿会長・メイトロンたちに対して、主の宮居である神殿に関する啓示など、その鍵の神聖さ、重要性に関して説かれ、その神権の力を委任されました。(しかし、妻(メイトロン)は術後の安静療養中のために渡航が許可されなかったため、残念でしたが 2 人分受けさせてもらいました。)大管長会や十二使徒定員会の長老たちからも指導があり、神殿での儀式手順、管理運営に関して詳細に亘ってソルトレイク神殿の内部を案内されながら、敬虔さ、神聖さ、そしてペイトロン〔注―参入者〕に対するもてなし方、ワーカーに対する訓練、シーラーの重要な立場などを指導されました。

ソルトレイクの最後の夜に、初代ドゥエイン・N・アンダーセン会長が重荷に堪えている私の背中を押してくださり、励ましの言葉を頂いた主の慈愛は忘れられません。11 月 1 日から着任して、すべての儀式に精通するべく努めながら、ご奉仕されるワーカーに神権者としての奉仕に加えて、姉妹たちにもその祝福を受けられる機会を増やし、可能なかぎり夫婦で共に奉仕の機会を設けられるように試算し、家族の絆を高める機会ともなるよう努めました。

また、ペイトロンがすべての儀式から主の祝福を受ける機会を得られ、幕の向こう側の方々の救いに寄与できるように心掛けました。即ち、エンダウメントの儀式を受けられて帰られるペイトロンにシーリングの儀式での奉仕ができるように配慮しました。その結果、ペイトロンが栄光と不死不滅と永遠の命を受け、アブラハム・イサク・ヤコブの祝福を受け継ぐことが約束される祝福に感銘を受けられたと確信しています。

また、毎年必ず、日本に来られた十二使徒たちが神殿を視察され、アドバイスや評価を受ける機会があり、主の軍勢の兵卒として歓迎しました。

毎年のクリスマス・ディナーでは、神殿が敬虔な礼拝の場として保たれるようにテーマを決めていました。

1 年目：主の宮居にはイエスがおられ、永遠の命に至る水が与えられる(ヨハネ 4：5～15)

2 年目：イエスはレプタ二つ(神殿推薦状・家族ネームカード)を見ている(マルコ 12：41-44, ルカ 21：1-4)

3 年目：イエスの心をもって、弱っているペイトロンを迎えるワーカー

(ルカ 8：43～48, マタイ 9：20-22, マルコ 5：25-34)

神殿の美しさの中でわたしがこよなく愛することの一つは、ペイトロンの間にいかなる形であれ、貧富の差、階級、地位の差がないこと、神の前では皆が平等であることです。そのため清く義にかなった民であることを表す白い衣に身を包みます。愛にあふれた天の御父のふさわしい息子、娘になりたいという心の望みを持って、皆隣り合って座ります。

主の宮居で執行される諸儀式は、主イエス・キリストの贖いの力であり、清めの力によるメルキゼデク神権の尊い力であることを証します。エンダウメントで取り交わす聖約を、ただ単に儀式として受け止めるだけでなく、主からの召しを果たしながら奉仕を続け、証を述べるのが求められていると確信しています。特に、末日聖徒として昇栄への道へ進むためにも、教義と聖約 42 章の啓示で示されている奉献の律法を受け入れ、イニシャトリーそしてエンダウメントの儀式の後に、シーリングの儀式に参加することにより、神のもとに戻った時の祝福や約束を経験します。

私たち夫婦も 52 年前に神殿の聖壇の前にひざまずき、永遠の夫婦として聖約を交わして結び固められた祝福・約束は、今も代理人の儀式に与る時にも思い返され、更なる絆が強くなります。

わたしたちがシオンのステーキに集合するためには、神殿の御業が不可欠です。そこは、祈りの家、断食の家、信仰の家、学びの家、栄光の家、秩序の家、神の家であり、聖きを主に捧ぐ場所でもあります。

イスラエルの集合に携わっている者として、イスラエルの集合の律法に従っており、この末日における聖徒たちに約束された祝福のすべてを受け継ぐ者になるのです。そして尊い 3 年間、主の弟子として共に奉仕をされたシーラー、ワーカー、ペイトロン、神殿宣教師、職員、そしてメイトロンの献身的な模範と信仰から学ばせて頂き、感謝します。

聖なる神殿で奉仕し、礼拝する機会を通してモルモン書の教義が真実であること、イエスはキリストであり、この教会が主の教会であること、ラッセル・M・ネルソン大管長が今日の神の預言者であることを証します。これらのことをイエス・キリストの御名により、アーメン。

中野 正之

中野道子 メイトロンの証

メイトロンとして奉仕の機会を与えられた東京神殿

私たちは関西から初めて神殿会長に召されました。神殿会長は学生時代を東京で過ごしましたので、教会員の方々には結構知ってる人が多く、あまり不自由は感じないようでしたが、私は関西から離れたことがなく、着任したその日から周りは知らない方々ばかりです。シフト表を見ながら、毎日名前を15人位書き出して、ポケットに忍ばせて覚えていくことから始めました。

ワーカーさんの人数は名簿によれば活発に奉仕される方だけでも1千人以上おられます。毎日こっそり、そしてじっとみて、名前と顔が一致するように努めました。

さらに午前中の神殿宣教師のシフト表の作成です。そして、特別に予約されている自分自身のエンダウメントとシーリングの儀式の神殿宣教師の割り当てを決めながら、夕方までの時間に追われる作業も初めての経験でした。

神聖な儀式を執り行うという大切さは、理解しているつもりでしたが、最初の作業は目まぐるしいものでした。しかし、参入者からはたくさんの霊的な励ましをいただきました。

いろいろな事情、試練を受けながら、金銭的に工夫して毎月地方から参入される方、一日中エンダウメントを受け続ける方、物忘れが進んでいるのに、大切な言葉だけはしっかり覚えている方、毎日人々と接していると、毎日毎日に霊が震えるほどの経験が与えられます。

私は日々出来るだけ時間を作って、どれかの儀式に参入する決心をしました。参入者となって儀式を受けていると、その儀式を執行している方の気持、受けている参入者の気持、そして家族ネームカードにある亡くなった方の気持、もちろん儀式で語られる大切な誓約など、心を引き締めて時間をすごしていました。

神殿は主の宮居です。永遠の命を受けるためには神殿の儀式が必要です。教会はどんな状況にあっても、神殿建設を第一に計画して下さいます。

カートランド神殿、ノーブ神殿、ソルトレイク神殿、そして東京神殿。それぞれの神殿の歴史を読むとき、神殿は真実の教会の旗印であることを心から証します。そして最も大切なその東京神殿で奉仕する機会を与えられたことに心から感謝いたします。

中野 道子





堀田徹 神殿会長 堀田幸子 メイトロン

2009 年 ～ 2012 年

来歴

堀田徹神殿会長

1938 年、福井県遠敷郡に生まれる。街頭伝道で英会話のちらしを受け取ったことから、1964 年に名古屋支部（現在の御器所ワード）にて改宗。1967 年に田川幸子姉妹と結婚、同年ハワイ神殿で結び固められ、2 女 2 男に恵まれる。自動制御の電気技術者を経て、1972 年から教会教育 システム（現、宗教教育セミナー・インスティテュート）の指導主事を務める。1998 年に定年退職。教会ではこれまで、限定神殿儀式執行者、伝道主任、地方部高等評議員、伝道部会長顧問、ビショップ、などの召しを果たしてきた。また名古屋西ステークのステーク会長に召されたほか、1979 年から 1982 年まで日本札幌伝道部会長、2004 年から 2009 年まで地域七十人を務めた。趣味は魚釣り、好きな聖句は「あなたがたがわたしの言うことを行うとき、主なるわたしはそれに対して義務を負う。」（教義と聖約 82:10）、「主の訓練を軽んじてはいけない。」（ヘブル 12:5-12）

堀田幸子メイトロン

1939 年、神奈川県川崎市に生まれる。1957 年に戸別訪問を通して横浜支部にて改宗する。薬剤師、塾の指導者として働く。教会においてはワード扶助協会会長、早朝セミナー教師、ステーク扶助協会会長、日曜学校教師などを務めてきた。趣味は読書、好きな言葉は、「平凡なことの積み重ねが非凡を生む」。

引用元：

- ローカルページ（2009）「新たに召された神殿会長会の紹介 — 2009 年 11 月 1 日着任」
『リアホナ 2009 年 12 月号』L12 頁 末日聖徒イエス・キリスト教会

堀田徹 神殿会長の証

私と妻は2009年11月から、日本東京神殿の神殿会長とメイトロンとして召されました。その頃の記録から記します。

「東京神殿会長として着任して、2ヶ月半が過ぎました。そして神殿の中での、奉仕の業の実態が少しずつ分かってきました。

神殿の業、つまり、生者と死者の救いの業は素晴らしい儀式執行者と、神殿宣教師と、忠実に奉仕に参加する参入者と、真夜中に神殿の屋内の掃除をして整えてくださる人々によって推し進められています。

この世を去った人々のバプテスマ、生者と死者のエンダウメント、大切な家族の結び固めの儀式等、神様の神聖な業が行われます。参入してくださる方々の犠牲も大きなものですが、曜日を決めて奉仕を続ける儀式執行者や、1年半とか2年と期間を決めて、この世の業を全て捨てて神殿の業に奉仕して下さる神殿宣教師さん達や、陰で働く多くの人々のお陰で、神殿の儀式は執行されています。

先日、北陸から60名が、木金土と三日間泊りがけで参入されました。名古屋と大阪から、北海道の函館、釧路、帯広、根室からもいらっしゃいました。又、沖縄から30名が来ら

れました。札幌のあるワードのビショップは、30名の成人参入者と一緒に来られました。また、関東地区や近隣の県から、毎週奉仕に来てくださる方々の犠牲も生易しいものではありません。ででも不思議なことは、毎回奉仕にきてくださる兄弟姉妹が苦しそうではなく、にこやかで、喜んで奉仕をしてくださることです。

水戸から毎週土曜日に来て下さる兄弟は、朝4時に起きてこられ、夜は最後のセッションが終わって6時半頃、元気なお姿でお帰りになります。家に着くのは、おそらく、夜11時半頃になったことでしょう。彼は、それを7年間も続けてこられたそうです。今、北海道の会員達は、札幌に神殿をいただく準備として儀式を習得しようと燃えています。遠く沖縄からも多くの兄弟姉妹が忠実に東京神殿に参入されています。」(2010年1月18日の日記より)

今は札幌に主の神殿が奉献され、儀式が行われています。やがて沖縄にも神殿が建てられます。主の御業が発展することを嬉しく思っています。

堀田 徹

堀田幸子 メイトロンの証

神様が私たちの成長のために備えていてくださる方法は、本当に素晴らしいと思います。宣教師となって伝道に出るのは、福音を伝えるためなのですが、それだけではなく、実は神様はそのような方法によって、教会の若者を、将来の良い夫や妻、良い父親や母親、よい指導者になれるように育ててくださっています。親と子供の関係は、子供が何才になっても、与えるばかりのような関係ですが、それによって、私たちは成長し、天のお父様のことが少しわかるようになります。親も育てられています。

神殿の業も同じです。生者と死者の救いのために奉仕しているのですが、その奉仕によって、私たちは主に似た者になるように育てられているのです。清められ、高められているのです。与える者にも受ける者にも祝福がもたらされる主の方法は素晴らしいと思います。

神殿におりますと、神殿儀式執行者の行動から、多くを学びます。一日一日、一回一回と責任を果たされる姿から、従順、忠実、責任感、愛と奉仕、犠牲、そして継続する努力と忍耐を学びます。とても鼓舞されます。

2009年10月の総大会でのデビッド・A・ベトナー長老のお話の中に好きな言葉があります。

「わたしのオフィスには、麦畑の絵があります。一本一本描かれた無数の線が集まって一枚の絵になっています。どの線も一本ずつでは、おもしろくも、心を打つわけでもありません。実際キャンパスに近づくと目に入るのは、何の関係も何の魅力もないような無数の線が、黄色や、金色、茶色の絵の具で描かれているだけです。けれども、少しずつキャンパスから離れると、先ほどの線、一本一本がすべて合わさって、麦畑の壮大な風景が現れるのです。一本一本の目立たない線が重なり合って、目を見張るような美しい絵を作り上げるのです。」

一日一日、一回一回の神殿でのご奉仕によって、儀式執行者や参入者の皆様が、そのような美しい絵を描いていらっしゃると感じます。清められ、高められて、主に近づいていける姿を目にすることができました。

神殿参入のご奉仕により、皆様の上に祝福が注がれますようにと願っています。

堀田 幸子





井上龍一 神殿会長 井上禮子 メイトロン

2012 年 ～ 2015 年

来歴

井上龍一神殿会長

1943 年、東京都墨田区に生まれる。大学 4 年のとき、大学を訪れた宣教師と出会って改宗した。1967 年、菊地良彦支部会長の司式により吉祥寺の教会で禮子姉妹と結婚、同年、ハワイ神殿で結び固められる。1972 年から 2003 年まで教会教育システムで働き、後年、地域ディレクターを務める。教会の召しとしては、ビショップ、ステーク高等評議員、伝道部会長、日本宣教師訓練センター所長、地区代表、地域広報ディレクター、夫婦宣教師、セミナー教師、神殿会長会顧問などの責任を果たしてきた。趣味は旅行、絵画鑑賞、聖典研究。好きな聖句は 2 ニーフアイ 25：23、「わたしたちが自分の行えることをすべて行った後に、神の恵みによって救われる〔。〕」

井上禮子メイトロン

1940 年に東京都豊島区に生まれる。婚約者の龍一兄弟から福音を紹介され、兄弟の 2 か月後にバプテスマを受ける。教会においては、ワード若い女性会長、扶助協会会長、ステーク扶助協会会長、初等協会会長、セミナー教師、夫婦宣教師、神殿メイトロン補佐などの召しを果たしてきた。趣味は音楽鑑賞、絵画鑑賞、旅行。好きな聖句は詩篇 24：3－4、「主の山に登るべき者はだれか。……手が清く、心のいさぎよい者、……こそ、その人である。」井上ご夫妻は二人の娘と、7 人の孫に恵まれている。2022 年 2 月 28 日に 81 歳で逝去。

井上龍一 神殿会長の証

以前、地域幹部の松田長老と旅行した時、松田長老が「毎日5人の姉妹のために結婚できるようにと祈っています。一人が結婚すると次の姉妹の名前を入れています。」とお聞きして、当時31歳の娘のことを結婚できるように祈ってくださるようお願いしました。娘はそれから、1年もしないうちに結婚が決まりました。最初に松田長老に連絡して感謝の気持ちをお伝えしました。そして、神殿でシーラーの方々にこの経験を紹介し「皆さんの周りにおられる結婚の祝福を受けていない兄弟姉妹のために祈ってほしい、そして、何かを感じたら、行動して下さい」とお願いしました。

2011年5月20日に、一つのカップルの結び固めを執行しました。彼女は40歳、彼は47歳でした。その半年くらい前に、沖縄のその姉妹のことが気になり電話をしました。40歳を超えてまだ独身でした。結婚のことを尋ねると、交際中の兄弟がいるとの返事で喜びました。でも、彼は「まだ結婚は3年先でいい」と言っていると言います。彼女は、もう子供を産める限界の年齢です。結婚は1日でも早い方がいいと思いました。彼の住所を聞いて長い手紙を書きました。それから、何度か彼と手紙のやり取りがあり、やっと決心して下さったのです。2012年3月22日に、彼女からこんなメールが来ました。

「お久しぶりです。去年の集会でお会い出来て嬉しかったです。その時に『子供はまだで、難しいですね〜』と答えたんですが、今年1月の中頃に妊娠が分かりびっくりしま

した。年齢が40歳(今は41歳)というもあり、やはり無理かなあと思っていた矢先でした。本当に奇跡の妊娠だと思っていて、神様からの授かりものだなあと実感しています。今は4ヶ月で今月末に5ヶ月になり、『安定期』に入ります。まずは一安心です。つわりもあって苦しい時もありますが、生きている証拠と思いながら過ごしています。神様がこの時期にこの大きな祝福を用意して下さいたことに感謝しています。」

2011年8月25日に、一人の姉妹の亡くなった御両親への結び固めの儀式を行いました。数日後、彼女をある兄弟に紹介するよう導きを受けました。というより、彼女の母親の祈りの声を聞きました。「娘がこの世にいる間に結婚するように」という母親の強い祈りの声でした。彼女にメールを送ると「もう、私は60歳で定年になっています。今更、結婚なんて考えられません」との返事でした。「でも、彼を知っているの、会ってもいい」と言いますので、デートをしていただくことになりました。最初のデートで彼女は結婚することを決めたようでした。6月7日、2人の結び固めは、2人を昔から知っている兄弟姉妹が集まり、とても心温まる霊的なものでした。彼女は61歳、彼は62歳の2人とも初婚のカップルです。結婚後2人に電話をすると、彼女は「本当に幸せです。ありがとうございました。彼は、私よりかなり義人です」と言っておりました。

神様が、生きておられ、子供たちに幸せになってほしいと願っておられることを証します。

井上 龍一

井上禮子メイトロンの証

教義と聖約 18 章にこのようにあります。「人が悔い改めるとき、主の喜びはいかに大きいことか。…あなたがたはこの民に悔い改めを叫ぶことに生涯力を尽くし、一人でもわたしのもとに導くならば、わたしの父の王国で彼とともに受けるあなたがたの喜びはいかに大きいことか。」（教義と聖約 18:13,15）

私が神殿の奉仕を始めてすぐ、2009 年のことでした。60 代の貴婦人ですが、毎週、多いときには週に 2 回参入しておられました。いつも、きちんとした服装でした。来られた時には「お世話になります」と言われ、帰るときには「ありがとうございました」と深々とお礼をして帰っていかれました。どこからいらっしゃったのか会話もなくお見送りしておりました。

ある日曜日、少し遠くのワードからご招待をいただき訪問すると、その姉妹がいらっしゃいました。「こんな遠い所から毎週神殿に」というのが私の正直な気持ちでした。神殿を愛する方々にとって、距離はあまり関係がないようです。その後、2012 年 7 月 31 日から、彼女は神殿のオーディナンスワーカーとして奉仕を始められました。そして、2014 年 4 月 27 日、私達は再びそのワードからご招待をいただき訪問致しました。その時、彼女が井上兄弟の所に来られて「会長、最近私は主人にプロポーズしました。」と言います。そして、「私、主人に『私は、次の世でもあなたと夫婦でいたいので神殿で結婚したいのです』と言いました。すると、主人はとても嬉しそうな顔をして、約束して

くれました。」と説明してくださいました。

ご主人は 40 年間も教会をお休みされていたようです。それから、ご主人は毎週奥様を車で教会に送ってくれるようになり、毎日聖典と一緒に学ぶようになり、ついに毎週、教会に出席されるようになりました。そして、ついに彼の誕生日の 2014 年 4 月 8 日に初めてエンダウメントを受け、その後、夫婦の結び固めが行なわれました。私は、ご主人の目に喜びの涙を見ました。このワードの方々の大きな助けがあったことにも感謝致します。

イエス様は、たくさんの奇跡を行なわれましたが、それは、ほとんど奇跡を必要としている一人への奇跡です。その姉妹の信仰を通して奇跡が行われました。以下は、ハンター大管長のお言葉です。

「救い主が私達一人一人に個人的に働きかけてくださっていることにいつも感動を覚えます。教会内ではグループ単位で多くのことを行います。しかし、最も重要な事柄の多くは個人単位で行われます。子供の祝福は双子や三つ子に祝福を授ける場合でも一人一人に施します。聖餐を取るときでも神権に聖任する時でも、神殿のさまざまな儀式を受ける時も個人が御父との関係を築いていくように一人一人に対して行なわれます。天で重んじられるのは一人一人です。」（「22 福音を教える」『歴代大管長の教え——ハワード・W・ハンター』2015 年, p.258）

神様が、いつでも忠実な人を導かれ祝福されることを証します。アーメン。

井上 禮子



2020 年、近所を散歩した時に撮影



新山靖雄 神殿会長 新山登美子 メイトロン

2015 年 ～ 2017 年

来歴

新山靖雄神殿会長

1944 年、兵庫県神戸市に生まれる。クリスチャンであった二人の姉から影響を受け、16 歳のとき自ら宣教師に会い改宗した。1963 年から 1965 年に北部極東伝道部で専任宣教師として奉仕する。

1970 年に登美子姉妹とユタ州プロボで結婚、翌年ソルトレイク神殿で結び固めを受け、7 女を授かる。セルネート・インタラックグループ会長や入管協会評議員を歴任。教会の召しとしては、支部会長、ステーク会長、伝道部会長、地区代表、地域七十人、ガバメントリレーションズディレクターなどの責任を果たしてきた。趣味は孫の世話。好きな聖句は箴言 3:5。「心を尽くして主に信頼せよ。自分の知識に頼ってはならない」。

2017 年 4 月 28 日、調布の自宅にて 73 歳で逝去。

新山（畠山）登美子メイトロン

1951 年に宮城県仙台市に生まれる。夫となる新山兄弟から福音を紹介され 1969 年に新山兄弟からバプテスマを受ける。教会においては、ワード扶助協会会長会顧問、ワード若い女性会長、ワード初等協会会長、ステーク若い女性会長会顧問、ステーク初等協会会長などの召しを果たしてきた。趣味はペーパークラフト（カード作り、スクラップブッキング）。好きな聖句はアルマ 5:18。モットーは、「決してあきらめずに信じて待つ」。

引用元：

ローカルページ（2016）「東京神殿会長、福岡神殿会長会を再組織 2015 年 11 月 1 日着任」『リアホナ 2016 年 1 月号』L2 頁 末日聖徒イエス・キリスト教会

新山登美子メイトロンの証

神殿は主の宮居です。神殿は私たちの聖さを主に捧げる特別な所です。神殿では主の聖なる儀式が執り行われ、わたしたちはそこで主と聖約を交わし主から力を受け、永遠にわたって幸せになる方法を学びます。神殿では世の煩いから離れて主を近くに感じ主の愛に触れることができます。神殿は先祖の方々ととても近くに感じることができる特別な場所です。

これらが18か月にわたるメイトロンとしての日々の中で得た証です。

夫婦として神殿で奉仕する祝福をいただいたのは2015年11月でした。夫は喜んでその召しを心から熱心に果たしていました。

2016年9月に胸膜中皮腫という悪性の癌とわかり余命は3か月といわれました。それでも夫は何事もなかったかのように神殿での奉仕を続けましたがしばらくすると脳梗塞を発症し体の左半分がマヒしました。リハビリすることにより何とか歩けるようになった夫は神殿に戻りました。青木会長や田口会長の助けを受けながら神殿で奉仕する夫の姿は輝いていました。

特に神殿参入する兄弟姉妹の手を両手で包み込むようにしてあふれるような満面の笑顔で挨拶する姿が私はとても好きでした。

2017年になり確実に夫の病は進み神殿アパートの階段を上り下りすることさえできなくなり、車の中で横になりながら自宅から神殿に通いました。神殿には車いすで入りますが神殿の中に入ると自分で立ち笑顔で奉仕する姿は主から特別な力を受けていることを感じました。

4月になり桜を見たいと車いすで散歩した時、夫は私に「神殿が11月に閉館になること。もう神殿で奉仕することはできないと思う。」と話した後「自分は今まで精一杯やってきたので何の後悔もしていない。」と言いました。

それから間もなく夫は神殿で神殿会長が持つ神殿の鍵を事務所に返し、神殿職員、神殿宣教師を集めて証をのべ、一人一人に感謝し神殿を後にしました。

そしてそれから2週間後に天へと旅立ちました。

この18か月間の日々は、わたしたち夫婦が現世で夫婦として過ごす最後の時間でした。その時間を神殿の中で主のために奉仕して過ごすことができたことは、神様からの最高のプレゼントだと思っています。

この日々の中では多くの素晴らしい兄弟姉妹との出会いがありました。青木会長ご夫妻、田口会長ご夫妻、神殿職員、神殿宣教師、神殿奉仕者の方々と共に、主の業に携わることができたことは大きな祝福でした。心から感謝しています。

また、日本中からの多くの神殿参入者の方々の信仰の模範を目にしてきました。それは夫亡き後のわたしの信仰生活の支えとなっています。

神殿で私たち夫婦はホールに立ち参入者の方々をお迎えし、また、儀式を済ませた方々をお見送りする時間を大切にしていました。それはとても素晴らしい時間でした。その時、その方々と共に立っている先祖の霊が喜んでいる気配を感じることがありました。青少年の兄弟姉妹が列を作ってバプテスマを受けている時にも同じように感じたこともありました。それはとても神聖で特別な経験でした。

神殿は生者と死者が共に集う特別な所です。先祖のお陰でわたしたちは何度も儀式を受けることができ、わたしたちが儀式を受けることによって先祖の方々が永遠にわたって主の祝福を受けることができます。それを思う時に主の偉大な計画の一部として奉仕できる祝福に喜びを感じます。

そして近くに神殿があることに心から感謝すると共に、これからも主の宮居でご奉仕できるようふさわしくありたいと願っています。

新山 登美子



2015年神殿会長会の写真



2016年4月4日桜の木の下での写真



青木秀樹 神殿会長 青木節子 メイトロン

2020 年 ～

来歴

青木秀樹神殿会長

1949 年に島根県松江市に生まれる。30 歳の時、会社の帰りに宣教師と出会ったのがきっかけで改宗する。1975 年に節子姉妹と島根県で結婚、1981 年に東京神殿で結び固めを受ける。息子 2 人、娘 2 人を授かる。外資系石油会社で営業、商品開発部門、マネジメントを担当。その後、石油エネルギー関連企業数社の取締役、副社長、監査役を歴任。教会の召しとしては長老定員会会長、高等評議員、ビショップ、ステーク会長、伝道部会長会顧問などの責任を果たしてきた。趣味は旅行。好きな聖句はアルマ 30:44「まことに、万物は神がましますことを示している。」

青木（橋本）節子メイトロン

1951 年に熊本県阿蘇郡に生まれる。28 歳のときに夫の青木兄弟がバプテスマを受け、子供とともに教会に行くようになり、2 か月後にバプテスマを受けた。長年にわたり民生児童委員を歴任。教会においてはワード扶助協会会長、ステーク扶助協会会長会顧問、ワード初等協会会長、ステーク初等協会会長会顧問などの召しを果たしてきた。趣味は映画、旅行。好きな聖句は、アルマ 19:9「あなたの言葉…のほかに何の証拠もありませんが、…信じます。」

東京神殿会長、メイトロンが新たに召される

(2020年5月 教会ニュースルームより改編)

末日聖徒イエス・キリスト教会は、青木秀樹と妻、青木節子(旧姓：橋本)が、東京神殿会長、メイトロンとして召されたことを発表しました。東京神殿は、2022年7月3日にアイリング管長によって再奉献されました。

青木会長と姉妹が東京神殿会長、メイトロンを務めるのは今回が2回目です。東京神殿が大規模なリノベーションのため閉館される前も同じ召しに就いていました。武蔵野ステーク国立ワードに所属していて、青木会長は松江市出身で、青木姉妹は熊本県出身です。教会で青木会長はステーク会長等や青木姉妹はワード扶助協会会長等の奉仕をしてきました。

青木会長と姉妹は、召しを受けた際、心から感謝の念に満たされました。「主の驚くべき愛と優しさ、再奉献される東京神殿での奉仕の召しに大きな喜びを感じました」と、青木会長は言う。「前回の東京神殿での召しの時、多くの兄弟や姉妹、青少年や高齢者が神殿参入される姿に主への信仰の尊さを学びました。また人生の逆境のなかでも神殿で熱心に奉仕されている兄弟姉妹の信仰の模範に主の愛と天からの力を感じました。主の御霊が神殿の隅々、敷地の中すべてに行き渡り、すべての人にその光と力を惜しみなく与えられているのを感じることができました。」

再奉献された東京神殿において

「愛する兄弟姉妹が神殿での神聖な儀式と聖約を通して、神様の家族として、この世から永遠に結び固められる喜びを神殿で実感することができます」と、青木神殿会長は続ける。「また亡くなった家族や先祖の身代わりの儀式を通して神殿で生者と死者の救いと霊界にいる兄弟姉妹に主の深い愛を伝える機会に預かることができるからです。神殿は主の宮居であり、とても神聖な場所です。その神殿が日本にあるという喜びは何にも変えがたいことです。」

青木会長は、引用されました。

「ネルソン大管長が前回の総大会で神殿に参入するための質問を発表されましたが、その一つ一つの質問に対して定期的に自問して神殿の神聖さにふさわしくなるように主を信じ悔い改め祈りと聖文を通して啓示を受け、備えることができます。スティーブンソン長老は言われました。『神殿は主の計り知れない愛と思いやりを思い出すところです。』主が示された計り知れない愛に感謝します。」

青木会長はまた、天の父の計画における永遠の家族の重要性を実際の経験から分かち合いました。

「主の驚くべき愛に心から感謝しています。1980年3月にわたしは神戸ワードでバプテスマを受けました。その時、アメリカから来た宣教師からわたしだけが福音を学び、わたしだけがバプテスマを受けました。妻と2人の幼い娘はその日家にいました。」

バプテスマ会の時に当時十二使徒のデビット・B・ヘイト長老が来られていましてバプテスマの後、このように尋ねられました。『あなたの家族はどこにいますか?』わたしは『家にいます』と答えました。総大会でアイリング管長がヘイト長老のお祈りについてお話しをされました。ヘイト長老のお祈りは、あたかもそこに主がおられるようだったと。ヘイト長老が『あなたの家族はどこにいますか?』と聞かれ『家にいます』と答えた後、ヘイト長老がわたしたち家族のために祈ってくださったのだと悟りました。

わたしのバプテスマの2か月後にわたしは妻にバプテスマを施し、1981年12月に東京神殿で家族の結び固めの儀式を受けました。天父の驚くべき愛と主の贖いと復活と聖霊の導きと多くの兄弟姉妹の助けに心から感謝しています」。

東京神殿はスペンサー・W・キンボール大管長により1980年10月27日奉献されました。

引用元：ニュースルーム「東京神殿会長、メイトロンが新たに召さる」、2020年5月8日 - 東京 ニュースリリースより引用、青木会長ご本人により、本文追加修正有り。



3

改修前の東京神殿



「光を浴びて闇の中にそびえ立つ主の宮は、
霊の暗闇に深く沈んでいくこの世に立てられた
イエス・キリストの福音の力と靈感の象徴です。」

（ボイド・K・パッカー「聖なる神殿」

『リアホナ』2010年10月号、32）

再奉献前の神殿と私達の歴史。



神殿結婚



神殿のある生活



3. 改修前の東京神殿



2017年8月、私が松戸ワードでバプテスマを受けた1ヶ月後、
当時教えてくれていた姉妹宣教師たちと東京神殿に行き
曾祖母のバプテスマを受けました。

大石 藍



東京神殿にまつわるエピソード

菊地良彦長老からの寄稿

年配の姉妹の経験談

東京の近くのステーキの聖餐会に招待されました。聖餐式が終わってから、前もってステーキ会長が訪問予約を取っておられたお休み会員の家を訪問しました。ステーキ会長とビショップと共に3軒訪問しました。将来、神殿で家族が結ばれるようにお誘いしました。最後の家は、その姉妹のお名前は伏せさせていただきます。その姉妹は、相当お年を召しておられました。玄関先で、「わたくしはもう死ぬ身ですので、高い値段で仏壇を買いました。毎日拝んでいます。だから教会をやめさせてもらいます。お引き取りください。」と訪問するなり断られました。

私は彼女に「おじいちゃんが亡くなられてから、何年位になりましたか。」と尋ねました。彼女は「…何年です。」と答えました。「姉妹、お爺ちゃんは霊界でまだ生きておられますよ。」と申し上げて、「おばあちゃん、貴方のご主人さん、おじいちゃんは霊界で神様のお仕事をなさっておられて、お仕事が終わると…姉妹と一緒に永遠の妻として、恋人として、夫婦として、永遠に結ばれたいと、毎日、毎日、お祈りしておられます。彼は『神様、どうか、誰かを私の妻の所に送ってください。そして私の妻が私の名前と彼女の記録を神殿に持って行って、二人が永遠の夫婦として結ばれるように。』と熱心にお祈りをしているのをご存じですか。」

彼女は「自分を改宗に導いてくれた姉妹宣教師はそうに勧めてくれました。でも、今はその希望も叶わないと思い始めました。」私は、再び「おじいちゃんは、毎日毎日、おばあちゃんが、おじいちゃんのお名前を神殿に持って行って、必要な儀式を兄弟として姉妹として受けて、それからおじいちゃんと永遠の夫婦として、イエス様の贖いの力と神権によって永遠に結ばれるようにと、おじいちゃんが熱心に、毎日、毎日、心からお祈りしていますことを忘れないで下さい。」おばあちゃんは「わたくしもそのような願いがありました。でも、もう年を取りすぎてあきらめてしまいました。」私は「おばあちゃん、その希望がかなえたいと心の底で、いまでも、思っておられますでしょ。」と申し上げると「はい、その願いが叶えられるのなら、そのようにしたいです。私を助けてください、そのわたくしの希望がかなえられるように。」と涙を流されました。

ステーキ会長とビショップと奥様達は、おばあちゃんの望みが叶えられるように、熱心に助けしてくださいました。1996年7月の20日頃、ステーキ会長夫妻とビショップ夫妻とおばあちゃんは、神殿に参入されました。彼女のすべての儀式を終え、神殿の白い衣に着替えられたおばあちゃんの姿は、それはそれはとても美しい花嫁の姿でした。私は儀式執行者として、流れ出る涙をとめることができませんでした。美しい花嫁になられた姉妹は、「夫婦の永遠の

結び固め」が終わるまで、美しい涙をとどめることができずに泣き続けていました。人間はどんなに年を重ねようと、愛する者と一緒に永遠に共にいたいと望む気持ちには変わりありません。私も父なる神様の深淵な愛と憐れみの御計画に感動して泣きました。それから1年半あと教会の本部に帰還する前に、彼女が入院しておられる病院を家内と訪問する機会がありました。彼女の信仰はその時も強く固く燃えていました。彼女の平安な笑顔を見て、天父が行われた大きな奇跡に感動しました。数年あと、彼女は静かにこの世を去られました。愛する夫と永遠に一緒におれる安堵感と安心と強い信仰を持ち続け、永遠の旅路に旅立たれました。今、霊界でご主人と共に再会して喜び、共に伝道に励んでおられることでしょう。復活の輝かしい朝に、ご主人と二人で出てこられるのです。

福島地方部の斎藤雄二地方部会長のお母様の話

福島地方部の当時の斎藤地方部会長は、ご自分の仕事関係で神殿礼拝には頻繁に参加できませんでした。彼の地方部からも数人しか神殿礼拝に参加しませんでした。ある時、地方部長さんと個人的にお話をしました。地方部の会員が神殿礼拝に参加されることは、地方部の会員の霊性の高揚にどれだけためになるか説明しました。福島地方部から少しずつ、多くの会員が神殿に参入することになりました。その内に斎藤地方会長ご夫妻は、毎月、お二人で神殿礼拝に参入するようになりました。多くのお子さんがおられる地方部会長夫妻が神殿に参入されるとき、地方部会長のお母さんが子供たちの面倒を見てくれました。その回数が毎月になると、お母さんが少し立腹し「どうしてそんなに東京に頻繁に行くのかい。」と尋ねたのです。斎藤姉妹はお母さんに「子供たちの面倒を見てくださりすみません。ありがとうございます。私たちはおじいちゃんとおばあちゃん先祖の供養を東京神殿でしています。そしておばあちゃんとおじいちゃんが、いつの日か、永遠の結婚ができるように、神殿で、一生懸命お祈りしています。」

それを聞いたお母さんは、日本のある有名な宗教の福島地方の役員をしていましたが、夫と自分が永遠に結ばれたいがためにそれをお断わりをして、宣教師と勉強して教会のバプテスマを受けました。一年あと、神殿に来てエンダウメントを受け、自分の最大の念願であったご主人との「永遠の結びの儀式」をすることが出来ました。私はお母さんの最大の願望であった、最愛の夫と永遠の夫婦の結び固めの儀式を執行することが出来ました。自分の心から愛する夫と「永遠に夫婦の結び固め」を終えられた、お母さんの美しい花嫁姿と彼女の美しい喜びの涙を決して忘れることはできません。天の父なる神様はイエスキリスト様を救い

主としてお送りになられ、神様の子供たちが衷心から喜びをもって、神様に感謝し、涙を流すほどの永遠の喜びをくださる、最大のご慈悲とお恵みをくださる為に、神の独り子、イエスキリスト様をお送りくださいました。何と愛深い父でしょうか。

三重県のある兄弟の話

ある時三重県から来られた素晴らしい兄弟に神殿で会うことが出来ました。その兄弟は自分の父親と兄が経営していた会社がものすごい借金を抱えて倒産寸前でした。大変な借金を抱えていたその会社を今後どのように経営して行くべきか、その兄弟は神殿に行き、神様にお祈りしようと決心して来ました。そのお話を聞いた私は、「兄弟が大変な状況の中で、神様のお導きと助けによって解決しようと決心するなら、神様が奇跡をお与えになられるでしょう。」と申し上げました。

彼は新幹線の費用を節約して、東海道線の「鈍こう電車」を乗り継いで、神殿礼拝に1週おきに来られました。私は「貴方の先祖も霊界から貴方のそのような状況の中でも、神殿礼拝をするので、先祖の方々も霊界から特別にお祈りしてくれます。そして天の父なる神様は、そのように貴方が全て神様にお任せして頑張ってくで、特別に助けてくれるでしょう。」と申し上げました。それから数か月たって、彼は「神殿会長、神様は奇跡を与えてくださいました。長い間父と兄の為に働いていた社員の皆さんが『給料は我慢します、でも仕事が入るように頑張ってください』と言ってくれました。そして景気が悪いのにもかかわらず、大きな会社から自分たちの工場で高額な商品を大量に生産する注文がありました。残って犠牲を払ってくれた社員と一生懸命工作機械を制作し納品しました。そうすると新しい注文がどんどん同じ会社に発注されました。停滞していた未払いの社員のお給料を払い、ボーナスも払い、彼らに感謝しました。彼らは自分のことのように熱心に働いてくださいました。この2年間で、父と兄の何億円の大借金を全額返済することが出来ました。」そのような状況の中で神様に信頼し、神殿礼拝に参加したこの兄弟の信仰と行いに天の父なる神様は奇跡をお与えになられたのです。彼は、「神様は本当に生きておられます」と言いました。彼の純粋で純朴な神様を愛する心、その目の輝きを忘れることはありません。彼のこのようなお話を聞くと、ご利益宗教のように聞こえるかもしれませんが、実際に現実に起こった奇跡なのです。

徳沢清地方部会長と奥様の愛子姉妹

北陸の金沢に地方部会長、徳沢清会長がおられました。自分が働いていた会社から勇退して、その退職金で富山県、石川県、福井県3県のキャンピングカーを販売する権利を取得しました。しかし、キャンピングカーの売れ行きは芳

しくありませんでした。流行の時期が未だ、早すぎたのかもしれないこともあって、販売は思うように進みませんでした。彼と神殿でお話をさせて頂いた時に「神殿礼拝が金沢地方部の聖徒の霊性にどんなに大切であり、影響は測り知れないと…」私は力説しました。「地方部からの神殿参入者が多ければ多いほど、霊界からの働きと神様からの祝福が如実に現れるので、貴方のお仕事を息子さんにお任せして、月一回は奥さんの愛子姉妹と神殿礼拝に参加してください。」と申し上げました。その時からお二人は毎月金沢からおいでになり、神殿礼拝と同時に限定儀式執行者としても熱心に儀式に参加なさいました。

数か月が過ぎたある日のこと、それは神戸全体に大きな地震が起こった同じ朝のことでした（1995年＝平成7年1月17日）。徳沢会長は「神殿会長、奇跡が起こりました。自分の仕事のキャンピングカーが、今月予約も含め沢山売れたんです。今まで売れなかったのに、信じられません。」私は、「徳沢会長、貴方が奥様と二人が熱心に神殿礼拝をされていますので、神様は貴方の心が今どこに向いているかを見抜いて、祝福を与えられたのです。それはそれは神様の祝福が天の窓を開き、限りない祝福を奇跡として貴方にお与えになられたのです。」と申し上げました。徳沢地方部会長さんは奥様の愛子姉妹と一緒に熱心に神殿礼拝に来られました。地方部からも沢山の聖徒の皆さんが熱心に神殿礼拝においでになりました。北陸にシオンのステークが設立する基礎が築かれました。

徳沢清地方部会長は後に金沢地方部会長の責任を名誉の解任を受けましたが、数年あと、日本福岡神殿の神殿会長として、奥様の愛子姉妹は神殿のメイトロンとして、大管長会から召され、3年間の聖なる召しをご立派に果たされました。

池田正幸兄弟の話

池田正幸兄弟は家族で宣教師から福音を聞きました時には、福井県の鯖江市に住んでいました。日本料理の割烹店を大きく経営していました。彼自身、料理長としてその店は大変繁盛していました。しかし「知恵の言葉」を守りたい一心で、成功していた割烹店を閉じました。改宗後間もなく、神殿礼拝と家族歴史探求に大変興味を持ち始めました。先祖探求の為に、自分の先祖の探求を沢山され、沢山の会員を助けていました。神殿の推薦状を受けていたお二人は、池田姉妹と一緒に福井県の鯖井から東海道の高速に乗って、月に2回は神殿においでになっておられました。一日、何回も儀式をうけ、儀式執行者としても、儀式にも参加されておられました。神殿に来るたびに、何回も、何回も、死者の救いの為に儀式を受けておられました。お二人は、ジョセフ・スミスがおっしゃられた「死者の救いなしに、私たちは完成はされない。」との言葉をよく知っておられ、それはそれは熱心に死者の救いの為に、こんなにも努力なさった方は知りません。彼には「エライジャの霊」が誰よ



りも強く、聖く、働いていました。彼から、何時も「霊気」と強い「靈感」を感じていました。家族歴史の探求も普通の人が考えられる以上の靈感が働いていた人でした。私達夫婦は彼らのバンに乗せて頂いて、鯖井から彼らが神殿まで通う道と一緒に神殿まで乗せて頂きました。

私の家内の結婚前の名前は「越谷」と言います。先祖の言い伝えで、父親が自分の手で作った米の粉を作る碾き臼を3人の息子たちに持たせ、福井県から北前船で、石屋の息子達（越前屋）が北に向かいました、次男は新潟に降り、三男は秋田に降り、四男は青森へ降りました。「越前屋の屋号」を取り、「越谷」と名乗ったことも池田兄弟は詳しく調べてくれました。大変靈感の強い不思議な方でした。私の家内の故郷は青森県の西側の日本海側です。このように先祖が移動したことも突き止めたくれました。特別な「エライジャの霊」に祝福された兄弟は、私たちがアメリカの教会の本部に戻ってから数年のち、突然、霊界に召されました。天父は日本の神権者にも偉大な賜物をお与えになられておられました。池田正幸兄弟は日本の霊界で、改宗した沢山の神様の子供たちが、神殿で儀式を受けることの準備のお仕事をなさっておられることなのでしょう。池田姉妹と池田兄弟は、永遠に結ばれているので、素晴らしい再会ができるのです。

沖村一夫長老再改宗とチエコ姉妹の改宗 神殿宣教師

沖村一夫長老は、30代前半に宣教師に会い改宗しました。教会に熱心に通っていましたが、仕事の関係や忙しさに負け、お休み会員になってしまいました。大型、中型、小型の建築物の為に地質調査（ボーリングをする）会社を経

営するようになり、全国を走り回っていました、仕事は大変成功していて、経済的にも豊かな状態でした。年に似合わず、真っ赤なスポーツカーを乗り回し、仕事であちこち駆けずり回っていたある時のこと、自動車事故を起こしてしまいました。気が付いた時には、自分のスポーツカーがガードレールを超え、崖っけぶちに、ふらふら宙に浮いてました。下を見ると断崖絶壁で、下を見ながら自動車のドアをゆっくり開け、素早く車から飛び降りました。その瞬間、彼のスポーツカーは深い谷底に何回も回転して落ちてしまいました。その時に彼ははっきりとした声を聞きました。「一夫、教会に戻りなさい。」しばらくして自分の町にある山口の支部の教会に出席するようになりました。

事業と家の会計を握っている「周子」奥さんから、毎月の沖村兄弟の営業費と本人のおこづかいを貰っているのに、毎月それが直ぐに無くなってしまうのを奥さんが気が付きました。教会に「十分の一」を収めていることがわかりました。教会に通い始めてから沖村兄弟は、言葉使い、態度が一変して、毎晩奥さん「周子さん」にマッサージをしてあげるようになりました。始めは奥様は「気持ちが悪い」と思いましたが、それが一年たち2年たち3年目になると、奥様もこれは大変な教会だと思い、求道者となり教会の教えを勉強して改宗しました。月二回は、沖村姉妹が神殿推薦状を受けてから神殿礼拝に来ていました。

それから暫くして、仕事を会社員に預けて営業も頼んで、二人で神殿宣教師になりたいと、兄弟が言い出した時には、沖村周子姉妹は一夫兄弟を完全に信頼していました。そして二人は東京神殿の神殿宣教師になりました。私たちが日本に到着した時には、既に宣教師として奉仕されておられました。沖村周子姉妹は熱心に宣教師としてご奉仕されて

おられ、沖村一夫長老も熱心にご奉仕をされておられました。沖村チエコ姉妹は後に菊地登志子メイトロンの補佐として召され、素晴らしい働きをなさいました。沖村一夫長老は神殿会長補佐として召されました。私の家内が小脳にできたがん（良性）の除去の手術をしたときには、登志子は長い旅行が出来ないので、私の旅行の同僚として、日本中を一緒に旅行しました。その費用は沖村長老自身が自己負担をされました。

次に記す記事は、私と彼が旅行していたある朝の出来事でした。彼に許可を受けていますので、ここに書かせてもらいます。

札幌での神殿のディボーションに出席した時の朝の出来事でした。ホテルのロビーで打ち合わせの時間がたっても、沖村長老は降りてきませんので、彼の部屋に電話をしてから15分位して降りてきました。目を真っ赤に膨れ上がらせていたので、どうかしましたかと尋ねると「昨晚、一睡もできなかったんです。昨晚、お風呂に入ってから一生懸命お祈りしているとき、自分の人生を克明に振り返り、神様に沢山の悔い改めをしました。自分の犯してきた罪を悔い改め、ひとつ、ひとつ、お許しを心からお願ひしました。殺人と窃盗はしませんでした。沢山の過ち、不信仰、不徳とするところ、一つ一つ思い出し、このままだと神様の御許に迎えてもらえないと思うと、神様にひとつずつ、神様、私のこの罪を、また、あの罪もお許しくださいとお願いしたら、一晩中かかってしまいました。涙がとどめなく流れ出ました。」と言いました。

私は沖村長老に教義と聖約19章に記されている主の御言葉の説明しました。

「この聖句は、マーティンハリスがモルモン書を印刷するのに、その印刷代を出す計画でした。ジョセフは少なくとも翻訳のコピーだけでも見せようと思ったのが、マーティンハリスはその原稿、リーハイ書を失くしてしまいました。主は、何回も、警告したのにも拘わらず、ジョセフは人間

の人情に負け、印刷代を出してくれるハリス氏に見せなければならないと思い、大切な父リーハイが記した翻訳の原稿、116ページ失ってしまいました。ジョセフは死ぬほど苦しみました。マーティン・ハリスも同じ苦しみを味わっていました。その時に、イエス様がゲッセマネの園で、ご自分が人類の贖いの為にお苦しみになられたことを、再び、彼らにご説明なさいました。この啓示はジョセフを通して、マーティン・ハリスに与えられた啓示でした。」

私は沖村一夫長老にイエスさまが「…私はすべての人をそのなした行いと業に応じて裁き、世に住む者に宣告を下すであろう。人は皆必ず悔い改めなければならない。そうしなければ苦しみを受ける」と。（教義と聖約19章3-4節）イエス・キリスト様は、ご自身が永遠で無窮であるので、永遠の罰と無窮の罰はイエスの罰であるとのこと説明しています。（参照10-12節）イエスの「…口の鞭によって、怒りによって打たれ、つらい苦しみを被ることのないように…」（15節）悔い改めることは、主がお勧めしていることですと沖村長老に言いました。続けて、悔い改めることは、つらい苦しみを被らないように、イエス様が進めていることですと説明しました。主は「…悔い改めなさい。これらの苦しみがいかにつらいか、あなたは知らない。いかに激しいか、あなたは知らない。まことに、いかに耐え難いか、あなたは知らない。…神であるわたしは、すべての人に代わってこれらの苦しみを負い、人々が悔い改めるならば苦しみを受けることのないようにした。…もし悔い改めなければ、…わたしが苦しんだように必ず苦しむであろう。その苦しみは、神であって、しかもすべての中で最も大なる者であるわたし自身が、苦痛のためにおののき、あらゆる毛穴から血を流し、体と霊の両方に苦しみを受けたほどのものであった。…その苦き杯を飲まずに身を引くことができればそうしたいと思った。」（15－18節）イエス様は沖村長老の罪をすべて背負って下さったのです。





現在の山口支部の写真

貴方が一晩中流した涙は、イエス様の犠牲と赦しと聖めの子羊の血の「聖めの涙」だったのです。イエス様がゲッセマネの園で流された「聖めの涙」でした。だから、イエス様の「聖めの血」がとどめなくながれでて「聖めの涙」が貴方を聖めて下さったのです。贖いは、イエス・キリスト様と沖村一夫が、一体となることを意味しています。贖いは、ATONEMENT と言って、ONE はイエス様ご自身であり、イエス・キリスト様と沖村一夫が、MENT＝一体となること、一つとなること、すなわち、イエス様と沖村一夫が一つとなることを意味し、イエス様により贖いの聖い御力により聖められることを意味しています。イエス様ご自身、「…父に栄光があるように、わたしは杯を飲み、人の子らのためにわたしの備えを終えたのである。…あなたの罪を告白しなさい。そうしなければ、…わたしが語ったこれらの罰を受けて苦しむであろう」（19－20 節）あなたの限りない、贖いの涙は主がゲッセマネの園で流された、贖いの聖い涙なのです。イエス・キリスト様は「一夫よ、私は貴方のためにあの園で貴方を聖めました。これからこの世にいる間、安らかに行きなさい。」とイエス・キリスト様がおっしゃって下さった、聖めの涙だったのです。勿論、沖村一夫兄弟はご自分の罪を神権者に告白していましたが、神様の前に完璧に告白したかったのです。

沖村一夫長老、周子姉妹はご立派に東京神殿宣教師として、ご奉仕なさいました。天の父なる神様は、かれらの奉仕を心から喜んでおられます。沖村一夫長老は私達がアメリカの教会の本部の責任に帰ってから、7年後にこの世を静かに去られました。ご自分の人生を主の御前にきれいに精算されて旅立たれました。沖村周子姉妹は、兄弟の死後、ご自分の身辺をきれいに精算され養老院に入られました。私と家内は、アメリカから夏休みに日本にいる子供たちと孫たちに会うために日本に帰った時に、山口の沖村周子姉妹を訪問しました。私達を見るなり、「あらー、神殿会長、

メイトロン、遠方から良くお出で下さいました。」と迎えてくださり、とても懐かしい時を過ごしました。私は彼女が望んでおられた神権の祝福を受けることが出来ました。そして涙の別れをしました。今は霊界で、二人は忙しく神様のお仕事をなさっておられることでしょう。

彼らが神殿宣教師からの名誉の解任を受けてから、一年ぐらいて、お二人のご意思で、山口支部の教会堂建築の為に土地を教会に寄付をなさいました。総額1億円弱の献金でした。それは県と国に払う税金の分まで払ってくださったのです。主な道路から教会堂までの道は車が一台通れる道だけでしたが、消防法では車が2台が自由に通れる道が必要です。もう一台車が通過できる分の土地も買い、教会に寄付なさいました。今はそこに美しい山口支部の礼拝堂がその場所に建っています。彼らの美しい聖らかな信仰の輝きは、沢山の人の心をふるい動かししました。彼らの信仰の輝きは、これからも燦然と輝き続けることでしょう。

私の日記の中から、二人で経験した札幌の春の朝の出来事を原稿を提出する時に記した言葉を載せて頂きました。「父なる神捧ぐ」－沖村一夫、周子の改宗と献身の日々…菊地登志子著に、2006年10月10日に、投稿を依頼されたとき、次のように記しました。

「人は、罪のある状態で、命の実を食べ、命の水を飲むことはできない、神の栄光の光は、暗黒の雲を取り去り、悔い改めをする心を照らし生かして下さる。あの札幌での朝は、特別な贖いの愛と、天父の深い深い、御慈悲を感じることができた忘れられない、人生のひと時であった。天父よ、あなた様の贖いのご計画は何と美しいことか。」

菊地 良彦



私が初めて東京神殿を訪れたのは、私がまだ小学校2年生の頃でした。

仙台から当時家族5人で父の運転するワンボックスカーで、
小学校の下校時に車に飛び乗ってワクワクしながら神殿で
永遠の家族の結び固めを受けるために、東京への長距離ドライブが
スタートしたあの日のことを今でも鮮明に覚えています。

私の両親が宣教師と出合って福音を受け入れ、バプテスマを受けたのは
私が7歳だった時です。

当時の両親を教えた宣教師が、結び固めの為にアメリカからご両親と一緒に
来日をしてくれて、一緒に結び固めの儀式に参列してくれました。

その時に感じた特別な御霊による影響がとても強く、
まだ幼かった私の心に「家族は永遠なんだ」と言う喜びと、
神様の計画の完全さと真理を神殿の儀式を通して知ることができました。

千葉ステーキ会長
狩野 元滋



神殿のプレートは、グレース夫妻から贈られたもの。
グレース兄弟は、東京神殿の建設に携わった弁護士だった。

広尾に住んでいる多くの海外の方達にもこの東京神殿の名
前が伝わってほしいという願いが込められている。





4

オープンハウス



「多くの民は来て言う、
『さあ、われわれは主の山に登り、
ヤコブの神の家へ行こう。
彼はその道をわれわれに教えられる、
われわれはその道に歩もう』と。」
(イザヤ書 2 章 3 節)

オープンハウストアーの記録と証。

建設関係・近隣住民・委員会や教会職員向けの オープンハウス



5月28日（土）快晴。前日は大雨で天候が心配されていたが、当日は嘘のように晴れ、少し汗ばむくらいの陽気だった。閑静な広尾の一角にある神殿には朝早くから人が集まっている。神殿前の広場や別館で忙しそうに準備をする会員は、皆一様に神殿で奉仕する喜びと興奮を顔に浮かべている。シューズカバーをつけるためのテントは旧約の時代の幕屋を感じさせる。会場設営委員会の兄玉兄弟が「できるだけ白く見えるように設営をして欲しい」と業者に頼んだところ、「どうして白さを大事にするのですか？」と聞かれた。そこで兄玉兄弟は神殿での白さを大切にしている理由から、いかにこの教会が神殿を聖い場所として尊んでいるかを伝える機会が得られた。主が様々な角度から伝道する



手段を備えられていることがわかる。

午前10時を少し過ぎてから到着した最初の集団を皮切りに、多くの建設関係者が続々と神殿を訪れた。訪問者は家族や夫婦で訪れる人が多く、神殿や神殿別館では訪問者自身が建設に携わった部分について家族に説明し、家族はそれを興味深そうに聞いていた。子どもを連れた方は、別館



に飾ってあるイエス様の絵を指差して、子どもに「イエス様だよ」と伝えているようだった。

「ある男性が日の栄えの部屋やエレベーターの建設を担当したことについてその家族に誇らしげに奥様と子どもたちに説明していたのがとても印象的でした」とツアーガイドをしていた受付・案内委員会の高堀兄弟は語った。また、家族だけではなくツアーガイドをしていた会員にも、各所に使われた貴重な建築資材や制作に時間がかかった部分などのエピソードを話す訪問者の姿が多くみられた。日の栄えの部屋では一枚岩の高価なものを使っているということ、同部屋への大きな荷物搬入の時にスタンドグラスを一旦外し入れたということ、床にイスラエルの石を使っていることなど、建設関係者ならではの話を聞くことができ、会員たちにとっても特別な経験となった。

訪問者の一人は「このような特別な建物の建築に携わることができてとてもうれしい。（オープンハウスの期間が終わった後は）神殿の建物の中には自由に入れなくなると聞いていたので、中に入れる間に家族に自分の仕事を見せることができてうれしい。」と語った。また別の方は「通常施



工主は上から目線ですが、教会は違いました。一緒に作り上げていきたいと思います」と何度も話され、今までの仕事の中で一番楽しい仕事でした。」と会員へ伝えてくれた。

ボランティアリーダーの村上亜紀姉妹はこのような経験について語ってくれた。メインのツアーガイドの後ろにフォロワーとして付いて行った時、その参加者の中に2歳の子どもを連れた若い夫婦がいた。日の栄えの部屋に行った際、子どもが少し泣き出してしまい、家族は廊下に出ることに。村上姉妹が話しかけたところ、奥さんが「すごく興味があるのでゆっくり見たいんですけど、すみません」と言われた時、「ご家族を一足先に次に回る予定の結び固めの部屋にご案内した方がいい」と村上姉妹は感じた。もう1人のフォロワーにそのことを伝えて、その家族だけを連れて感じた通りに結び固めの部屋に入ると、ご主人が「この部屋、知ってます!」と少し興奮気味に話した。村上姉妹は合わせ鏡を紹介して、「先祖から続いてきて今自分がいること、そして子孫へと続いていく、永遠の意味があるお部屋なんです。」ということ話をすると、「そういう意味だったんですね!この部屋に携わったのでこの部屋の存在は知っていましたが、意味を知ってとても感動しました!今日知ることが出来て、本当に良かったです!」と、とても感激されていたという。村上姉妹は経験を振り返りこのように話している。「神様のそのご家族への愛を強く感じましたし、全ての人を主の宮に招いていることやオープンハウスの意義を、とても早い時期からよく知ることができたので、その後のオープンハウス期間中もずっと神聖な気持ちで奉仕出来ました。」

神殿別館前の広場ではオープンハウスのツアーを終えた建設関係の方々が集まり互いに歓談していた。その中には楽しそうに言葉を交わす建設業者の担当者と神殿施設管理のシェパード兄弟の姿もある。シェパード兄弟によれば、

今回の神殿建設のプロジェクトの期間を通して教会と建築業者は非常に良い関係を築いてきたという。

また、14時から近隣の住民向けのオープンハウスが行われた。建設関係者向けのオープンハウスと比べると訪問者は少なく、落ち着いた雰囲気の中進められた。

16時から18時の間には、東京神殿職員、委員会メンバーとその家族向けにオープンハウスが開かれた。参加者のほとんどが教会員ということもあり、久々に再会することを喜ぶ人々が多く見られた。その様子は日の栄えで義になかった人々が集うようだった。

オープンハウスの初日ということもあり、東京神殿閉館後、神殿に初めて足を運ぶ会員も多かったと考えられる。委員会のメンバーの一人は、期待で心が躍っているのが周りにも伝わってくるほどで、神殿内を見ている時には目を輝かせていたという。

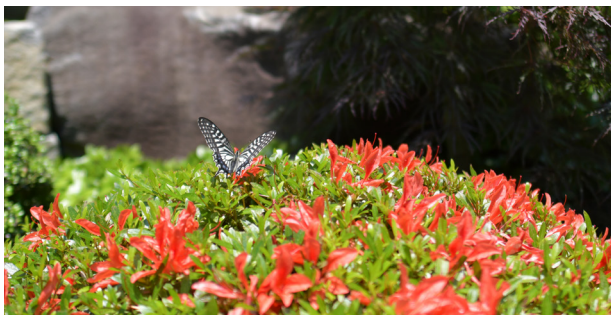
数年の間、全く教会に行っていなかった大学生の青年が、神殿職員の父の仕事場を見れる機会ということで遠方から参加していた。再奉献される神殿に来た感想を尋ねると、「昔と全然違う」と、青少年の頃に神殿に訪問した当時のことを思い出しているようだった。

ある兄弟は、今回のオープンハウスで神殿のことだけでなく、そこで奉仕をする方々の顔も印象に残ったと話していた。当日のボランティアの中には、わざわざ札幌からボランティアに来られた人もいたという。今回の再奉献を通して聖徒の信仰が様々な形で行動に現れていた。

村上 悠平
慶久 花梨

参加者集計

日付	対象者	参加者数	ボランティア数
5月28日(土) } 6月2日(木)	建設関係者 近隣住民 委員会関係者 メディア 招待客向け	1,702人	618人
6月3日(金) } 6月18日(土)	一般 青少年向け	17,472人	3,540人
計		19,174人	4,158人



招待客向けのオープンハウス



5月30日から6月2日まで外交、宗教、実業、政治、教育などさまざまな分野で活躍する招待客向けのオープンハウスがあった。約1000人もの人々が東京神殿へと足を運んだ。



まず、5月30日にはメディアデーとして、朝日新聞、毎日新聞、宗教新聞、中外日報、夕刊フジ、ニューヨークタイムズ、サンケイ出版、NHK国際部、またフリージャーナリストなど多くの報道関係者が参加した。ツアーが始まる前に一同は神殿別館の礼拝堂に集まった。十二使徒定員会のゲリー・E・スティープンソン長老夫妻、アジア北地域会長会の和田長老夫妻、ラズバンド長老夫妻、マイクロソフト米国本社副社長の平野拓也兄弟らが出席し、招待客を歓迎し、神殿の意味、教会の価値観を分かち合った。

その後、スティープンソン長老を始め、神殿会長会やステーク会長会など、教会指導者を経験してきたツアーガイドを中心に招待客たちを案内した。

インターフェイス（異なる宗教間協力の集まり）ツアーには、プロテスタント各派、カトリック、ユダヤ教、イスラム教、仏教、神道、立正佼成会、大本、創価学会、など様々な宗教の代表者が出席した。明治神宮の木下龍輝権宮司（きのしたたつゆきごんぐうじ）は、神社と神殿とで共通の清らかさを感じたと話した。



大使ツアーでは、ルワンダ、エチオピア、ウガンダ、ナイジェリアなどのアフリカ諸国、レバノン、ハイチ、ハンガリー、スイス等の大使館関係者が神殿へ訪問した。

政界からは、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会会長を務めた参議院の橋本聖子議員をはじめ、多くの国会議員、県議会、市議会、区議会議員、自治体の首長、政府関係者などが訪れた。橋本議員は1988年カルガリーオリンピック出場のためスピードスケートのトレーニングをしていたときに教会員の家庭にホームステイした経験があると話したという。そのほか、大学教授や大学院生、教育者や企業経営者など、多数の指導的地位にある人々が神殿を巡った。



明治神宮の木下龍輝権宮司



ナイジェリア大使館の Nnamdi 氏



元オリンピックアスリートの橋本聖子議員を迎えた
スティーブソン長老と和田夫妻

招待客の中には、教会との繋がりを公にできない方もおり、その方には、神殿別館ではなく、神殿の青少年の部屋で神殿についての紹介ビデオを視聴していただき、そのまま神殿内ツアーを行った。

神殿ツアー後は、礼拝堂裏のレセプションルームにて、教会指導者や姉妹宣教師が招待客たちと話をしたり、インタビューを受ける時間があつた。ホスティング委員会による食事でもそこで彼らに振る舞われた。

アジア北地域教会コミュニケーションの奉仕宣教師をしているドーフ長老は、麻布に住んでいる元部下を招待したが、彼はそもそも宗教にあまり興味がなく、オープンハウスへ行くつもりはなかった。ある時、散歩をしていると彼の妻が「あの建物は何？」と尋ねた。それは、ちょうどオープンハウスを準備している東京神殿だった。妻が綺麗な建物に興味を示し、彼はちょうど招待状をもらったことを思い出し、オープンハウスへ行くことにした。実際、オープンハウスに参加したところ、感動し、とても良い時間を過ごせたという。

ドーフ姉妹は、ラズバンド長老がガイドをするツアーに同行していた。ある新聞社の方が政治的に異なった意見をもたれた著名な方を神殿の中で見掛けてから表情が難しくなり、「もしかしたら、教会の政治的な立場について批判的な質問があるかもしれない…」と不安になった。ツアーが終わり、シューズカバーを外す場で、ラズバンド長老が座って、招待客のシューズカバーを外した。招待客は、教

会のことは詳しくは知らないものの、アジア地域の会員を指導する立場にあるほどの人物が、自分たちのシューズカバーを外してくれたことやラズバンド長老の謙虚な人柄に強く感激した。その後、新聞社からの質問にラズバンド長老は「何でも聞いてください！」と話したが、特に教会に対して批判的な質問はなく、穏やかに時間が終わった。言葉だけでなく親切な行いによって人々の心が和らげられたのをドーフ姉妹は感じた。

ある宗教関連団体のツアーの間、「黒人に神権はあるのか」「全ての人が救われるのか？」などの深い質問があつた。その時、13代目神殿会長であつた井上龍一兄弟がツアーガイドをしていた。井上兄弟はそれらの質問に正直に答え、また笑顔とユーモアで対応した。その中の1人の神社の神主である男性は、自分が子ども時代に参加したことのあるボーイスカウトがこの末日聖徒イエス・キリスト教会であつたこと、そしてその時のビショップがまさに井上龍一兄弟であつた事を思い出した。その男性は子供の時に教会で感じた温かい気持ちがまた湧いて来たと話していた。

ある方は最初は一人で来たが、とても良いツアーだと感じたため、後日妻子を連れてもう一度ツアーに参加したという。大きな影響力を持つ招待客たちが、神殿で感じた喜びを他の人にも分かち合いたいと思ったのだった。

神殿で光を感じた人々は、さらに多くの人々に光をもたらす。新約聖書にはこうある。「あなたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることができない。…あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」(マタイ 5:15、16 抜粋) オープンハウスが終わった今、神殿の光を輝かすには、儀式に参入した聖徒一人一人が「世の光」となっていく必要があるだろう。

慶久 花梨

参考元：ローカルページ（2022）「日本東京神殿 2022.5.28-6.18 オープンハウスレポート」『リアホナ 2022 年 8 月号』
L1-L4 頁 末日聖徒イエス・キリスト教会



世界仏教徒連盟のダンバジャブ副会長からモンゴルの仏画を贈られるラズバンド長老

4. オープンハウス





4. オープンハウス





ユース向けのオープンハウス



6月5日と6月12日の日曜日に、ユース向けのオープンハウスが開かれた。当初、日曜日にオープンハウスをする予定はなかった。元々計画にあった「ユースディボーション」のプログラムが開催されないこととなったため、ユースが特別な経験ができるようにこのオープンハウスを実施することになった。

やや蒸し暑い風が吹く中、東京神殿および東京神殿別館の前に指導者達と青少年が集まっていた。他のオープンハウスと違い、ボランティアもユースのみで構成されていた。東京神殿別館前では、二人のユースのボランティアがドアキーパーとして立っていた。白いテントの下では、靴をビニールで覆うシューズカバーのボランティアのために7人のユースが人々を待っていた。

数多くのユースが神殿に入るために神殿別館へと歩いていった。彼らの表情を見ると、真剣な眼差しと同時に心地良さが滲み出ている。

礼拝堂前はユースとその指導者で混雑しており、礼拝堂内が最も多いときで200人以上の満席だった。ここで待機した後、グループでビデオルームに案内された。



神殿前では、二人の若い女性が神殿の扉を開けていた。彼女らは参加者たちに丁寧にお辞儀をしていた。神殿の入り口近くでは流れる水の音が迎いにこだまっていた。その音はこれから神殿に入る人々の心を備えるだけでなく、神殿ツアーが終わって霊的に満たされた心に静けさと安らぎとを再三再四思い起こさせるものになっていた。神殿ツアーの終わりに滝を見つめるユースも何名かいた。

ツアーが終わったユースたちは東京神殿オープンハウスを記念して、写真を撮るスポットへ集まっていた。

今回のオープンハウスは、基本的には教会員のユース向けのものだったが、一般の方にも特別な機会となった。「6時過ぎに1人のご近所のおばあちゃんがシューズカバーのところにやってきたので彼女と少し話をしました。『敷地の中に沢山の若い人がいてみんなが幸せそうな顔をしていて、それを見ると自分も嬉しい気持ちになる。こんなに人を幸せにする素晴らしい建物が近くにできたことが嬉しい。時間をつくって友達と一緒に来たい』とおっしゃっていました。」と、青柳明弘兄弟は語る。若い世代が持つ光は、彼らの想像もしない方法で人々を照らしたのだった。

今回のオープンハウスでの経験は、ユースたちの記憶と心に刻まれる経験となったことを心から祈っている。再奉献式の時、アイリング管長は特別に若い世代に向けてこのように祈った。「天のお父様、これから先の試練の時に、末日聖徒の若人を祝福し、彼らの信仰を強めてください。永遠の命に至る細くて狭い道の中で彼らを導いてください。彼らの心に、神の神殿で永遠に結婚する願いを湧きたたせてください。その偉大な祝福にふさわしくあるという希望と決意を彼らに与えてください。」

泉谷 輝
慶久 花梨



4. オープンハウス





一般向けのオープンハウス



6月3日から18日まで、一般ツアーが行われた。その期間の東京の平均最高気温は24℃前後で多少暑さを感じる時もあるれば涼しい時もあり、活動しやすい気候だった。新型コロナウイルス感染者数も、冬に比べると減少傾向にあった。7月下旬から日本での感染者数は国別で世界最多となってしまうため、この6月から7月初めにかけての開催がまさに一番良いタイミングであったことが後にわかる。

神殿へ足を運んだ聖徒たちは喜びの表情を浮かべていた。久しぶりに会う友人たちとの再会で明るい声もたくさん聞こえた。ボランティアとして参加した浦和ワードの渡邊和代姉妹はこうに語る。「一番印象的だったことはボランティアの方、参加者の方、皆さんが笑顔であったり、目が輝いていたり、あたたかい雰囲気を感じました。そこには確かに御霊がありました。」



参加者は一度神殿別館の礼拝堂へ集まり、時間となったら神殿についてのビデオを視聴するため各部屋へ案内された。そこでは姉妹宣教師が進行を務め、簡単な説明をした。輝く笑顔と優しい声で、まるで天使が歓迎してくれるようだった。ビデオは教会に来るのが初めての人にとってもわかりやすい内容だった。天父とキリストと自分たちとの関係、神殿は家族を永遠にし、平安をもたらしてくれること



が理解できた。ビデオ視聴後、ツアーガイドも挨拶をし、教会に初めて来られた方がいる場合は、「説明を簡単に変えますので安心してください」と伝えてくれた。

神殿別館を出ると、テントがあり、シューズカバーを付ける。そこにはボランティアの方達が待機しており、シューズカバーを付けてくれた。

神殿内でのツアーが始まった。一人一人が熱心に神殿の中を見ていた。最初に向かった部屋はバプテスマフォントだった。教会員の友人に誘われて来たある女性はこの部屋で「エネルギー」を感じ、ツアーガイドの説明にもあったように「自分も清くなりたい」と思ったそう。その後彼女は実際にバプテスマを受け、8月には彼女の娘もバプテスマを受けたという。

受付の後ろ付近に飾ってあるイエス様の絵があった。それは、稲穂の前にいるイエス様の絵であり、日本がお米の国であることから麦などではなく、稲穂の背景にしたとい



う。そこで、イエス様が日本人のことも気にかけておられるという愛を感じた。

次に、花嫁の部屋を見学した。部屋に入った瞬間「綺麗！」と多くの人が声をあげた。美しい照明と大きな鏡が輝いていた。教会員であっても男性は本来入ることはできないので、貴重な場所だった。その後、更衣室、礼拝堂、教えの部屋なども案内された。

他の部屋ではツアーガイドが説明をしていたが、日の栄えの部屋では、説明はしないので静かな時間を過ごしてください、ということだった。日の栄えの部屋に入ると、各々が好きな場所へと座った。ある方は日の栄えの部屋に入った時に「明らかに空気が違う」と感じた。とても静かな時間で、個人的に神様を感じる機会となった。参加者はこのように語っている。

「神様は“光”だと感じました。普通、光はまぶしいけれど、その（日の栄えでの）光はかえって落ち着きを与えてくれた」

「無の世界を久しぶりに味わいました。しかし、洞窟のような嫌な感じではありませんでした。」



「赦しを求めています。先ほど赦しを受けられました。」

「（日の栄えの）部屋は掃除が行き届いていて、きっとお祈りしながらされていらっしゃるのだろなあと感じました」

「瞑想の場所は他の寺院では暗いところが多い。しかし、ここはとても明るい。明るいのに瞑想ができる」

上記の感想は、いずれも教会員ではない方からの言葉である。

最後に、結び固めの部屋へと移動した。一人ひとりが日の栄えでどんな気持ちを感じたか聞いたり、向かい合った鏡を見て、自分たちの先祖、子孫のことに思いを馳せた。そして、神殿ツアーは終わった。

ツアーガイドなどのボランティアを経験した人々の多くが、参加者たちの喜びを直接感じ、「楽しかった！」「もっとやりたかった！」と話していた。ある姉妹はボランティアからこのようなことを学んだ。「最初、立ってるだけのボランティアをしているとき、自分は役に立っていないんじゃないか、と思ったが、自分がツアーガイドをしてみると、その立っているだけの案内係の人がいるだけでとても心強いことがわかった。ツアーガイドも全てをわかって行っているわけではなく、永遠の人生と似ていると思った。神様は全ての人をご存知であると感じた。」

教会員であるかどうかに関わらず、全ての人が神殿から喜びを感じたことは、神様が全ての人を愛しておられ、働きかけておられる証だと感じた。

「主は、御自分のもとに来て主の慈しみにあずかるように、すべての人を招かれる。したがって主は、黒人も白人も、束縛された者も自由な者も、男も女も、主のもとに来る者を決して拒まれない。主は異教徒さえも心にかけられる。…すべての人が神にとって等しい存在なのである。」（ニファイ第二書 26:33）

慶久花梨

参考元：

ローカルページ（2022）「日本東京神殿 2022.5.28-6.18 オープンハウスレポート」『リアホナ 2022 年 8 月号』L1-L4 頁 末日聖徒イエス・キリスト教会

4. オープンハウス





4. オープンハウス





4. オープンハウス





4. オープンハウス





4. オープンハウス







5

再奉献式



「神の聖なる神権の権能により、
わたしたちはこの建物と付随するすべてのものを、
祈りの家、礼拝の家、永遠の聖約の場所として、
あなたに再奉献します。」
(ヘンリー・B・アイリング、日本東京神殿再奉献式にて)

再奉献式の記録と証。



再奉献式

2022年7月3日、初夏の新緑の匂いが有栖川公園から漂う中、東京神殿前の広場には午前8時にもかかわらず再奉献式の第1セッションに参加する人々が列をなしていた。人々の列は神殿入り口から広場を通り神殿別館の2階まで続いている。空には多少雲がかかっているが、じっとしていても少しづつ汗がにじむような陽気の中、人々を誘導するスタッフははつらつとした笑顔で出迎えてくれた。周りでは教会員が友人たちとの再会を喜ぶ姿が多く見うけられた。

朝の時点ではかなり気温が上がる事が予想されていたため、神殿前の広場で長時間待つことによる熱中症の恐れなども当初は心配されたが、再奉献式の第1セッションへの参加者が神殿内に入りしばらくすると雨が降り出しセッションが終わるころになると雨が止んだ。これによって広場の体感温度がかなり下がり、恵みの雨となった。驚いたことに第2セッションでも同様に神殿前の広場から人がいなくなると雨が降り始め、セッションが終わり人々が神殿から出てくると雨脚が弱まった。まさに主が雨を送ってくださったと感じ、みんなこの奇跡に感謝した。

入り口でボランティアからシュエカバーを履かせてもらい神殿内に進むとあらかじめ割り当てられた部屋へと進む。厳かで静かな神殿の中を進み、日の栄えの部屋に着くと、日の栄えの部屋の中央にあった家具類はすべて運び出され、代わりに数十脚の椅子と説教壇とカメラが配置されていた。出席者の中には東京神殿会長の青木秀樹会長、野田雄司第一顧問、鈴木勲第二顧問とメイトロン、メイトロン補佐の姿もあった。

しばらくするとスティーブンソン長老とアイリング管長が日の栄えの部屋に入り、全員が立ち上がって彼らを出迎えた。

再奉献式はスティーブンソン長老が進行を務め、地元の会員の証やネルソン大管長のビデオメッセージ、アイリング管長の話と続いた。再奉献式の出席者はそれぞれの話と証に熱心に聞き入り、部屋は暖かな空気に包まれていた。

アイリング管長は話を終えられると、再奉献の祈りを捧げ始めた。祈り始めてしばらくするとどこからともなく涙をすすめる音が聞こえ始めた。

その時の人々の様子を日の栄えの部屋で案内係をしていたマーティーニ姉妹は次のように語った。「長い間待っていた神殿が奉献される喜びが会員一人一人から伝わり、今まで経験した事がない程強い御霊で部屋が満たされた事を感じました。」

2017年9月に東京神殿が改修のため閉鎖された後、コロナの大流行の影響で再奉献の日程は当初の予定である2020年から延期となったため、東京神殿が稼働していなかった期間は約5年にも及んだ。この期間は会員たちにとって試練の期間であったと同時に人々の心をさらに神殿へ向けさせる準備の時間であったように感じられた。

再奉献の祈りが終わるとスティーブンソン長老の説明に続き出席者全員でホサナ斉唱を行った。神殿の神聖な空間の中で白いハンカチが三度振られ、ホサナと叫ぶ声が鳴り響く。続いて聖歌隊が「ホサナ讃歌」を歌い、出席者全員で「主のみたまは火のごと燃え」を歌った。歌声は一つとなり御霊が部屋を満たすと共に主の宮に帰ってきたこと、主がその群れと近くにおられることを感じ、心が震えた。

閉会の祈りが捧げられ、再奉献式が終わるとアイリング管長は出席者に笑顔で手を振り、日の栄えの部屋から退出した。再奉献式の第3セッションが終わった後も神殿前の広場には多くの聖徒達が集まっていた。談笑しながら神殿を見つめる彼らの表情は主への感謝と決意に溢れていた。

村上 悠平

参考元：

ローカルページ（2022）「日本東京神殿 2022.7.3 奉献式レポート DEDICATION REPORT」『リアホナ 2022年9月号』L1-L3 頁 末日聖徒イエス・キリスト教会





奉献の祈り

大管長会第二顧問
ヘンリー・B・アイリング管長

わたしたちの天のお父様、わたしたちは天と地と万物を創造されたあなたをたたえ、あがめます。わたしたちは、あなたの愛する御子、救い主イエス・キリストの御名により、この聖なる日本東京神殿をわたしたちの生ける神であられるあなたに再奉献するために御前に集いました。

わたしたちは、あなたが、愛する独り子をわたしたちの救い主、贖い主、また模範として、この地に遣わしてくださったことに感謝します。御子のおかげで、家族と一緒にあなたのもとに戻るわたしたちの旅が可能になり、わたしたちは先祖や子孫とともに、幸福と光の中で永遠に生活できるようになりました。

わたしたちは、あなたの教会が聖なる神権の鍵と力とともに、また世界中の神の聖なる神殿で授けられている儀式と祝福とともに、回復されたことに感謝します。

わたしたちは、日本東京神殿のこの美しい改築と改装を実現した何百人もの熟練した有能な設計士やデザイナー、職工、作業員に感謝します。

わたしたちは、この建物の構造、壁、天井、床、窓、照明、物理的なシステム、そして聖なる儀式を執行するために使われるすべての物品を祝福してくださるよう、祈ります。

お父様、この改築で加えられたあらゆる装飾や美術品、見事な造りがその美しさを保つように祝福してください。また、この神殿の敷地が安らぎの地として保たれるように祝福し、聖別してください。

この神殿に危害を及ぼす恐れのあるものからお守りください。末日に預言されている大変動からこの神殿を保護してください。

わたしたちは今、あなたの祝福がこの民のうえにあるように祈ります。また、救い主のもとに来て神の御前に戻る唯一の道を選ぶよう、あなたの子供たちを招く忠実な宣教師たちのうえにあなたの祝福があるように祈ります。日本とアジア全体の宣教師たちが導かれ、聖なる神権の儀式を通して交わされる、あなたとの聖約を通してのみもたらされる幸福を求めている人たちを見つけることができますように、深い信仰をもって願い求めます。



天のお父様、これから先の試練の時において、末日聖徒の若人を祝福し、彼らの信仰を強めてください。永遠の命に至る細くて狭い道の中で彼らを導いてください。彼らの心に、神の神殿で永遠に結婚する願いを湧きたたせてください。その偉大な祝福にふさわしくあるという希望と決意を彼らに与えてください。

お父様、この神殿に参入するあなたの教会の会員を祝福してください。彼らが出会うすべての人にイエス・キリストの福音を分かち合いたいという望みを持つことができるように祝福してください。また、バプテスマを受けたときの約束を守るという決意を与えてください。それはすなわち、「神に贖われ、第一の復活の朝にあずかる人々とともに数えられて永遠の命を得られるように、いつでも、どのようなことについても、どのような所にいても、死に至るまでも神の証人になること」（モーサヤ 18：9）です。

この神殿で奉仕するすべての人が、これが神の聖なる宮であるという確かな証を育むことができるように、祝福をお願い求めます。主が導きと繁栄を与えてくださるという確

信を彼らに与えてください。神殿会長とその顧問、神殿メイトロンとその補佐に、知恵と識別の賜物を授けてください。しかし、何にもまして、この聖なる場所を訪れるすべての人に対する慈愛、キリストの純粋な愛があるよう彼らを祝福してください。

イエス・キリストを信じる信仰に確固として立つことができる民となれるように、わたしたちを強めてください。主をいつも覚える聖約を守ることができるように、わたしたちをお助けください。

エリヤの霊が授けられるように願い求めます。わたしたちはそれに応えて、亡くなった愛する先祖の名前を神殿に持参し、永遠の命と昇栄の機会を彼らに提供することを約束します。

神の聖なる神権の権能により、わたしたちはこの建物と付随するすべてのものを、祈りの家、礼拝の家、永遠の聖約の場所として、あなたに再奉献します。あなたの栄光がこのうえにとどまりますよう、わたしたちの贖い主、イエス・キリストの聖なる御名により祈ります、アーメン。



6

東京神殿再奉献委員会



「わたしは行って、主が命じられたことを行います。

主が命じられることには、
それを成し遂げられるように
主によって道が備えられており、
それではなくては、
主は何の命令も人の子らに下されないことを
承知しているからです。」

(ニーファイ第一書 3 章 7 節抜粋)

東京神殿再奉献委員会の働きとエピソード。

大管長会

エグゼクティブディレクター

ケビン R ダンカン長老
七十人定員会

神殿部

ディレクターオブイベント

マーク ロビンズ



コーディネーター

常真健一・るり
東京 S ひばりが丘 W

エグゼクティブアシスタント

上野 誠
東京西 S 八王子 W長沼 美鈴
神奈川 S 川崎 W八木 哲也
東京 S 渋谷 YSAG市川 春菜
東京 S 渋谷 YSAG

各委員会



案内・受付

高堀 伸二・暢子
千葉 S 浦安 W

ユースディボーションナル

青柳 明弘・美樹
千葉 S 千葉 W

ホスティング

マーティーニ和子
東京南 S 東京第2 W
*ホスティング委員長前任岡野 久子
東京 S 浦和 W

音楽

高久 夏美
桐生 S 古河 W

コミュニケーション

池田 直哉 (広報) 水野 祐司
神奈川 S 川崎 W 神戸 S 神戸 W

通訳

瓜生 英里香
神奈川 S 大和 W

映像・音響

折戸 篤
松戸 S 松戸第2 W

会計

浅香 理佳
東京西 S 吉祥寺 W

再奉献歴史記録

慶久 花梨 村上 悠平
千葉 S 東金 W 松戸 S 松戸第2 W

会場設営

児玉 光治
松戸 S 越谷 W

保安・警備・救護

辻 和明
神奈川 S 川崎 W

交通・誘導

大谷 宏三
東京西 S 多摩 W

東京神殿再奉献委員会

2020年6月から2022年7月10日までの記録



2020年6月27日 初の全体ミーティング

2020年6月18日、「あなたの任務は歴史記録委員会の委員長です。」というメールが届いた。急な連絡だったため、驚いた。同様の連絡を受けた他の委員会メンバーの多くも、「どうして私が？」という疑問を抱いた。

世界中の神殿が奉献、再奉献される際には、大管長会の管理のもと、ユタ州ソルトレイクに拠点を置く神殿部がリードし、地元の教会員を中心にオープンハウス・再奉献委員会を組織する。東京神殿オープンハウス・再奉献委員会はコーディネーター、エグゼクティブアシスタント、そして十二の専門委員会によって構成されていた。歴史記録委員会もその委員会の一つだった。

そして6月27日早朝に、初の全体ミーティングがZoomを通して行われた。各委員長を始め、ソルトレイク神殿部の職員も参加した。当時は、再奉献は約8ヶ月後くらいだと想定していたが、コロナ禍の事情で柔軟な対応が必要だということをコーディネーターの當真夫妻は話していた。

しばらく、いつ再奉献か定まらないまま、できる準備を各委員会が行っていた。全体的な調整はLINEのグループ機能を使い、事務的な連絡だけでなく、ともに励ましの言葉を掛け合った。あるときは、バーチャルでオープンハウスをする可能性もあるということで、カーセージとモルモン大隊についてのオンラインツアーに委員会メンバーが参加することもあった。他にも、教会歴史家であるターリー兄弟や東京神殿建設において弁護士をしていたグレース兄弟を招き、オンラインの座談会も開かれた。当時の東京神殿建設では、日照権の問題などがあり、神殿そのものが建てられない可能性もあった。グレース兄弟はその困難な

状況の中で祈っていた時、神殿が「主の宮居」であり、主が望まれることは何の妨げになることもないことを感じた。その後、奇跡的に大きな問題になることはなく、東京神殿は無事に建設された。その状況が、コロナ禍で不安を抱えている委員会メンバーにも重なる部分があり、鼓舞される時間となった。2021年5月15日、神殿別館の改築も終わり、下見ができることになり、委員長や委員会メンバーが集まることになった。コロナ対策もあり、グループごとに時間を分けてそれぞれ下見を行った。今まで、オンラインのみでのミーティングをしていたため、初めて直接会う人がほとんどだった。実際に顔と顔を合わせて、同じ空間にいることの素晴らしさを感じた。





2021年7月1日、「ワシントンDCのオープンハウスと再奉献式が決まった」と当真り姉妹がグループLINEに投稿した。その時に、ワシントンDCのオープンハウスは来年の4月28日～6月4日で、再奉献式は6月19日とのことだった。（注：実際はオープンハウスは4月28日からだったが、再奉献は2022年8月14日に実施）「日程が決まってから準備に余裕があるスケジュールになるかもしれない」、「微かに光が見えてきた」と希望を与えてくれる知らせだった。ちょうど、7月23日からは東京オリンピックが開催され、海外からの入国も見通しが立ってきた時だった。

12月5日、この日は神殿別館にて、初の対面のミーティングが行われた。（一部のメンバーはZoomでの参加）「やっと対面のミーティングが実現し、以前でしたら当たり前の事なのかもしれませんが、とても嬉しく感じました。」と当真姉妹

は話していた。ボカテロ神殿やメサ神殿などのオープンハウスの内容を当真兄弟から聞くことができ、具体的な準備を想像できる助けとなった。神殿別館の前には、クリスマスの季節に相応しいキリスト降誕のネイティビティー像が設置されており、天のお父様が贈ってくださった愛を思い起こす時間となった。

しかしその後も、まだ再奉献の日にちが定まらないまま、時が過ぎ、2022年を迎えた。

2022年3月4日、LINEグループにアシスタントの長沼美鈴姉妹より「急ですが、21:00からミーティングをお願いします。」という連絡が届いた。そこでオープンハウスと奉献式の日程が発表された。やっとこの瞬間を迎えることができたという嬉しさと共に、現実的なスケジュールも迫っていることを感じた。音楽担当の高久夏美姉妹は「歩みを早めなくてはいけないという気持ちがあります。喜びと同時に緊張も走ります。」と話していた。7月3日が奉献式、メディアデーは5月30日。つまり本番まで3ヶ月を切っている状態だった。今まで、不定期だったミーティングは、毎週日曜日の朝7時からに変更された。

3月26日と4月2日には、各委員長とその伴侶が特別に神殿内の見学ができることになった。奉献前の神殿ではあったが、主の平安と神殿の祝福を伴侶と共に味わう時間となり、オープンハウスと奉献式の準備への気持ちを新たにした。



2021年12月5日 初の対面ミーティング

5月22日、各委員会の委員長とアサインメントカードを受け取っている委員会メンバーを対象としたオープンハウス・再奉献式事前合同ミーティングをZoomで行った。今まで、各委員会でのミーティングは持っていたが、このように合同で行うことは初めてだった。ランダムに各グループに分かれ、神殿の証や今回のアサインを受けて得た祝福を分かち合った。また、當真コーディネーターのお話から、「オープンハウスに来た人々が、個人的に神様と繋がる時間を作れるように手助けをする」ということを再確認した。

5月28日、建設関係者、近隣住民向けのオープンハウスがスタートした。夕方には、委員会メンバーとその家族向けのオープンハウスも開かれた。2年前までは日程もわからず、動けない状況だったのを思い起こすと、こうして無事にオープンハウスがスタートしたことは奇跡のように感じた。委員会メンバーもその家族も、喜びに満ちた笑顔で神殿を仰ぎ見ていた。

オープンハウスが始まってからも、LINEグループのやりとりが止まることはなく、夜遅くまで調整が続いた。各委員会のミーティングや準備なども夜中まで続いていたという。一人一人が力の限りのことを行い、迅速に、祈りながら、オープンハウスの運営、そして奉献式の準備を進めた。

7月3日、奉献式では、スティーブソン長老が会場にいる聖徒たちを歓迎し、再奉献委員会にも感謝とねぎらいの言葉を述べた。奉献式が終わった後、片付けなどの時間

もあり忙しい中ではあったが、集合写真を撮ることができた。長い間、共に働いてきた仲間たちの一致を感じるとともに、終わってしまう寂しさもあった。高堀伸二兄弟は「一つの青春を卒業した気持ちになります。駆け抜けました。」と話した。

奉献式も無事に終わった1週間後の7月10日、神殿別館では、打ち上げプログラムを行った。これには、各委員長やボランティアリーダーなどのメインで働いたメンバーが参加した。お菓子を持ち寄り、オープンハウスと奉献式の写真のスライドショーの鑑賞、証会を行った。証会では、多くのメンバーが「自分にはこのような大きなことはできないと思った。しかし、主の力があつたので成し遂げることができた。」と語っていた。誰もが、自分の力の弱さを感じるほどの大変なアサインメントだった。それゆえに、自分の力ではなく主の力に頼ったことで奇跡を見た。今後も、東京神殿へ訪れる度に、今回の得た証が思い起こされることだろう。

「もし人がわたしのもとに来るならば、わたしは彼らに各々の弱さを示そう。…わたしの前にへりくだるすべての者に対して、わたしの恵みは十分である。」(エテル書12:27)

慶久 花梨



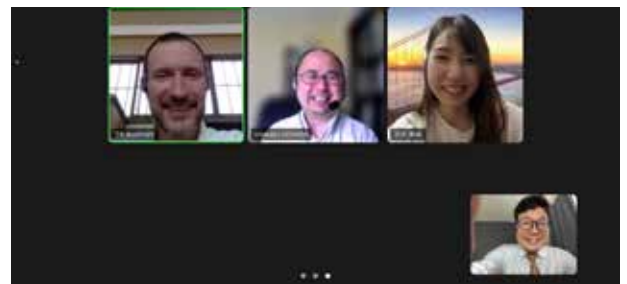
2022年4月2日 神殿見学に参加したコーディネーター夫妻、各委員長と伴侶



2022年7月3日 再奉献式での集合写真



2022年5月22日
各委員長と委員会メンバー向けのオープンハウス・
再奉献式事前合同ミーティング



コーディネーター



概要

オープンハウス&再奉献委員会の管理、神殿部・エリアオフィス・地域指導者との連携

メンバー

コーディネーター：

當真 健一・るり（東京ステーキひばりが丘ワード）

エグゼクティブアシスタント：

上野 誠（東京西ステーキ八王子ワード）

市川 美鈴（神奈川ステーキ川崎ワード）

八木 哲也（東京ステーキ渋谷 YSA グループ）

市川 春菜（東京ステーキ渋谷 YSA グループ）

私たちは2020年5月に、東京神殿再奉献・オープンハウス実行委員会のコーディネーターとして夫婦でアサイメントを受けました。

実行委員会の発足以来、定期的にミーティングは行っていましたが、世の中はパンデミックの影響を大きく受けており、オープンハウスを行うことが出来るような状況ではなく、またいつ頃それが出来るのか、その見通しすら立てることが出来ませんでした。

東京神殿の再開を待っているこの期間、引っ越しや別の召しのために泣く泣く委員会のアサイメントを解かれた方や、新型コロナウイルスに感染し重症になられ集中治療室に運ばれた委員の方、あるいは神殿の再開を待ち焦がれながら天に召された方もいらっしゃいました。この記録を読まれている方の中にも、同じような経験をされ、生活に大きな変化があった方がいらっしゃるのではないかと思います。主の御心がどこにあるのか、いつも探しているような心境でした。

そんなある時、名古屋のあるワードの青少年たちが、せめて神殿の壁にでも触れたい、と日帰りで新幹線に乗って東京まで来た、という話を聞きました。長血を患った女性がせめて救い主の衣に触ることで奇跡を待ち望んだ、という新約聖書の話が思い出され、青少年の純粋な信仰に心を打たれました。

モルモン書の最初の登場人物であるリーハイ一家は、長い間、約束の地まで旅をするなかで、時には食べ物もなくなり、死の淵をさまよひ、子供たちが長く帰ってこない日々もあり、肉体的、精神的、霊的に多くの試練がありました。しかしながら、様々な苦難を経験したリーハイは人生の最後の証の中で、「神はあなたの苦難を聖別して、あなたの益としてくださる」と語っています。

世界的にも非常に大きな混乱をもたらしたこのパンデミックによる経験が、東京神殿の再奉献を待ち続けている会員にとって、また地域の方にとって益になることを祈り続け、私たちは準備を進めました。

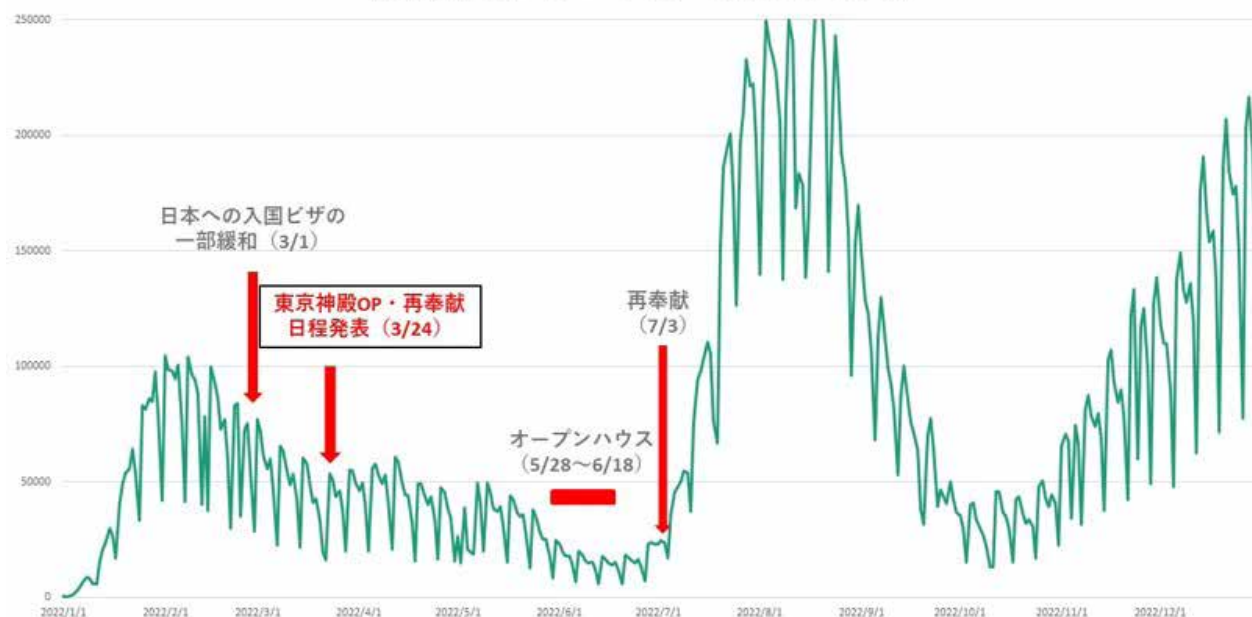
青少年たちの純粋な模範、リーハイの言葉、その他多くの経験を通じ、私たちが神殿の再奉献を待っているのではない、主が私たちが準備が出来ることを待っていらっしゃるのだ、と強く感じました。

結果的に2023年5月27日（土）にスタートした東京神殿オープンハウスでしたが、私たちに再奉献やオープンハウスの日程が伝えられたのは、2022年3月初旬のことでした。ですので、日程が決まってからオープンハウス初日まで、3か月弱の準備期間しかありませんでした。夏休みであればもっと多くの青少年が参加できるのではないか、ちょうど梅雨の時期に当たる東京は雨の対策が大変ではないか、準備期間がもう少しあればオピニオンリーダーや一般の方々も沢山招待出来るのではないか、様々な思いが交錯し、決定から開催まで時間がないことに焦りを感じていました。

しかしながら、後から考えると、このタイミングも非常に絶妙でした。改めて振り返ってみると、東京神殿オープンハウス、そして再奉献の日程も、本当に多くの奇跡が重なっていたと思います。

2020年、2021年は緊急事態宣言、もしくはまん延防止等重点措置が発令されており、外国人に対するビザの発給が停止されていました。プロジェクトスタートから約2年間、アメリカの神殿部の職員は一度も来日することが出来ませんでしたし、教会幹部の方々が来日することも出来ず、オープンハウス、再奉献を行うことは現実的ではありませんでした。

日本における新型コロナウイルス新規感染者数2022年1月～12月
(厚生労働省ホームページのデータを基にグラフ化)



日本における新型コロナウイルス新規感染者数2020年2月～2023年1月
(厚生労働省ホームページのデータを基にグラフ化)



2022年3月1日になってようやく入国ビザが一部緩和され、そして、2022年で新規感染者数が最も低くなっていた期間にオープンハウス・再奉献が開催されることになりました。加えて再奉献からほどなく、感染者数が爆発的に上がったこと、また日本では過去にないような大きな事件があり、宗教に対する社会の目が非常に厳しくなったことを考えると、オープンハウス・再奉献はまさにこの時期に行うことがベストであったことが分かります。

オープンハウスに関する神殿部からの指示は、非常にシンプルでした。オープンハウスは主と訪問者個人との特別な交わりを持つ時間である、というものです。

私たちは時々、良かれと思い、訪問者に沢山のおもてなしをしたい、と考えるときがあります。しかしながら、人々が神殿を訪問し、神殿内での経験を最も優先するために、例えばプライマリーの子供たちの神殿の絵を飾ることはしないこと、会員が作った神殿にまつわる装飾品、美術品などは置かないこと、伝道のちらしやモルモン書などを配布することもなく、案内看板なども最小限にすること、などの指針が与えられました。

主の方法と人の方法が異なる、ということを感じることが何度もありました。

短い準備期間に、本当に沢山の委員会メンバー、そして会員の皆様のサポートのおかげで無事にオープンハウス初日を迎えることが出来ました。今の時代、日本でメディア関係者が宗教の取材をして記事にすることは非常にまれで、当初は2社程度のメディアがオープンハウスに参加する予定でした。しかしながら、全国の教会コミュニケーションの皆さまの尽力のおかげで、なんと約30社ものメディア関係者がオープンハウスに参加されました。

また、パンデミックの影響で、オピニオンリーダーがどの程度訪問されるのか、ということも全く予想が付きませんでした。当初は多くの方からお断りがあったと伺い、500名のオピニオンリーダーが訪問下されば、と思っておりましたが、実際にはメディア関連、オピニオンリーダー関連を合わせて1,000人を超える方々が参加下さりました。全国コミュニケーションの皆さま、各ステークのコミュニケーションの皆さま、そして会員の皆さまの熱意と行動に心からの感謝の気持ちが湧いてきました。先ほども記載させていただきましたが、ちょうどパンデミックの狭間であったことや、宗教に対して社会的に非常に厳しい視線が向けられる前にオープンハウスや再奉献が行われたことも大きな意味があったように感じます。

結果的に、オープンハウス期間中の19日間のボランティア総数は延べ4,000人以上となり、当初は12,000人～15,000人を想定していた訪問者は、なんと19,000人を超えました！

オープンハウスに訪れて下さる多くの方々の笑顔を見て、沢山の奇跡の話を聞くことが出来ましたが、実はこのオープンハウスの真っ最中に、私達家族は大きな試練を受けることになりました。

2022年3月に高校を卒業したばかりの私たちの娘に、再奉献式の日程が発表された直後、そして彼女自身が留学のためにアメリカに向けて出発する予定だった日の3日前に、治る事がない難病指定されている脳血管の病気が見つかり、留学を延期し、オープンハウスの真っ最中に脳内血管のバイパス開頭手術を受ける事になりました。両親の不安をよそに、娘は、「日本にいるなら、オープンハウスや再奉献に参加できるね」と非常に前向きで、主治医

からも「あなたは怖くないの？普通、手術の説明すると皆さん泣くのだけど、どうしてニコニコしているの？」と言われるほどでした。

しかしながら、実際に頭蓋骨に穴をあけて、皮膚の血管と脳の血管を繋げる大きな手術は、8時間に及び、頭には40針以上もの縫い跡が残りました。しかも、コロナ禍で、見舞いに行くことすら許されませんでした。

術後、主治医からは、「術後の痛みが非常に強いために、麻酔で眠らせている、あんなに前向きで強かった娘さんが集中治療室で苦しそうに涙を流して耐えています。」と電話で伝えられるのみで、私たちの不安はつのるばかりでした。さらには手術の際に娘を担当してくださった看護師さんが新型コロナウイルス陽性反応であったことが判明し、娘に感染すると大きなリスクになるということで、ただただ祈ることしか出来ない日々が続いていました。オープンハウスの奉仕のために神殿に向かう途中にある病院の前を通るたびに、外から「頑張れ！」と声をかけることしかできず、胸が苦しくなりました。

オープンハウスに訪れて下さった方々が、多くの奇跡の体験を分かち合ってくださいましたが、私達には奇跡は起こらないのであろうか、オープンハウスの真最中にこのようなことが起こるのは何故だろうか、と主にすがるような思いでした。

しかしながら、いま考えてみると、私達夫婦は参加くださった多くの方々や、ボランティアとして奉仕下さった方々から、チャレンジを乗り越える力を与えられていたのだと思います。皆さんの喜びにあふれる笑顔にふれたり、沢山の方が東京神殿の再奉献への喜びを分かち合ってくださいたり、毎日のように神殿にいられること、それこそが試練の中であって、私達にとっての一番の強さとなり、また励ましを受け、喜びや平安を感じる時でもありました。なぜオープンハウスの真最中に娘の手術があったのか、という視点は、オープンハウスの間だからこそ、私たちは困難を乗り越えることが出来るのだ、という感謝と喜びの気持ちに徐々に変わっていきました。



ですから、私たちは訪問して下さったすべての方に、そしてボランティアをして下さったお一人お一人に心から、本当に心から感謝しています。

手術から一週間ほどたったある日、病院から突然、娘が退院できると連絡があり、なんとその翌日に退院してきました。当面は動くことができないかと思われていましたが、1週間後に行われた再奉献式に自分の足で歩いて参加する姿を見て、もし、あのまま留学して異国の地で脳血管が破裂するようなことがあったら、どうなっていたのか、オープンハウス期間でなかったらどうやって耐える力を受けられたであろうか、全てのタイミング、事柄が主の御手の中の守りがあった事を確信しました。

2023年7月3日に行われた再奉献式は、1日に3セッションで再奉献の祈りが捧げられました。この再奉献の時にも数々の奇跡や守りがありました。

再奉献式は手話による配信を行っていましたが、手話の配信はすべてある通信会社のWiFiを使用する必要がありました。当日、当該通信会社の通信障害が発生し、多くの方々の携帯電話などに問題が発生しましたが、再奉献の手話通訳の配信には一切の影響がなく、3セッションすべて無事に配信することが出来ました。



当日は新型コロナウイルスの影響で参加者の変更が重なり、プログラムも何通りものパターンで準備し、直前まで様々な事柄に対応する必要がありました。来場者に対する検温、消毒などの関係で、セッション間の短い時間に入れ替えや準備をする必要がありましたが、多くの方々の協力のおかげで滞りなく進めることが出来ました。

若いころに日本で伝道し、名古屋伝道会長も務められたスティーブンソン長老が来場者の多くの方々に長時間に渡って挨拶をされ、個人的に接しておられる姿に感銘を受けました。

アイリング管長は3つのセッションすべてにおいて再奉献の祈りを捧げられましたが、ご自身の年齢や体調のことを考慮し、長時間に渡って再奉献の祈りをささげることが出来るよう、ご自身の体力をコントロールし、持てる全てを捧げられる姿勢に多くの学びと気付きをいただきました。

今回の再奉献の経験を通じて、改めて、今でも主は奇跡の神でおられる、ということをはっきりと感じました。す

べての事柄が、主の時期に、主の方法で進められ、私たちは常に守られていたように感じます。

しかしながら、オープンハウス・再奉献は単なるイベントにすぎません。本当に大切なのは、神殿が地上におけるもっとも聖い場所であり、死者と生者が、また個人と主がつながりをもてる特別な聖い建物であることを認識し、それにふさわしくあり続けることだと思います。

最後になりましたが、準備の期間から数年にわたって共に歩んでくださった再奉献委員会のお一人お一人、管理本部の兄弟姉妹、そして神殿部のマーク・ロビンズ兄弟に心からの感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

私たちは、主が生きておられ、今も奇跡の神であられること、そして私達一人一人を愛しておられ、見守っておられることを心から証します。イエスキリストの御名によって証します。

當真 健一・るり



エグゼクティブアシスタント 長沼美鈴姉妹の証

未だ東京神殿が改修工事中だったころ、當真コーディネーターご夫妻から連絡をいただきアシスタントコーディネーターとして東京神殿再奉献に携わる機会についてお話を聞きました。当時はすでに新型コロナウイルスが猛威を振っていたため、パソコンの画面越しでお二人と話しました。當真ご夫妻とはこれまでほとんど面識がありませんでしたが、私の部屋はお二人の愛と優しさで満たされていました。最初は當真コーディネーターご夫妻とアシスタントコーディネーターとして召された上野会長と私を含めた4人からスタートした小さな実行委員会でした。しかしながら、私の思いはすでにこの大きな責任に押しつぶされてしまいそうでした。自分には東京神殿再奉献に関わるふさわしさがあるだろうか、実行委員会を支える能力があるだろうか、仕事と実行委員会の両立は可能だろうかと次々に不安な思いが湧き上がり恐れを抱きました。あるとき伝道中に書き留めていたトーマス・S・モンソン大管長の言葉を思い出しました。「主から召される人は、主によって適格な者とされます。」私は全てを主に委ねて取り組まなければならないと感じました。

4人だけの小さな実行委員会でまず始めに取り組んだことは、各委員会の委員長を推薦することでした。事前に聞いていた情報を元に評議して、その方々が委員長として活躍してくださっている姿を思い描きながら主の御心はどこにあるだろうか、主と一致した選択ができるようにと祈りながら決めていきました。こうして召された実行委員長たちは確かに主によって備えられていた方々だと感じられました。委員長の皆様は時間と才能と信仰を惜しみなく使って再奉献のために力を尽くしてくださいました。

新型コロナウイルスにより再奉献の日程がなかなか決まらなかったためもどかしい気持ちを感じながら過ごしていましたが、當真コーディネーターご夫妻の明るいリーダーシップのおかげで再奉献を待ち望む日々は私たち自身が霊的に備えるために主が与えてくださった特別な期間として捉えることができました。

再奉献の日程が公表された時はこれから本腰を入れて準備に取り掛かれると思っていましたが、私は体調を崩してしまい残念ながら召しを果たすことができなくなってしまいました。体調が良くなるように毎日真剣に祈りましたが回復はせず、療養中に神殿は再奉献されました。私は十二使徒定員会のロナルド・A・ラズバンド長老がおっしゃった「信仰によって奇跡は起こりますが、必ずしも、わたしたちの予定表通りであったり、望む方法によってではありません。」というメッセージに慰めを得て、元気になって東京神殿に行く日を楽しみにしていました。そして体調が回復したので愛する家族と東京神殿に通える現在は、途中までしか再奉献の業に携われなかったという思いよりも、少しでも神殿の業に私が携わる機会を与えてくださった神様に心から感謝しています。

東京神殿が与えられていることに感謝します。神殿が神様から力を受ける特別な場所であることを証します。イエス・キリストの御名により、アーメン。

長沼 美鈴



エグゼクティブアシスタント 上野誠兄弟の証

私が長沼美鈴姉妹と共に東京神殿の再奉献コミッティーのエグゼクティブアシスタントのアサインメントをいただいたのは、2020年6月初頭のことでした。旧武蔵野ステーキ会長であった當真コーディネーターとともに奉仕する機会が与えられ、大変嬉しく思うと同時に、神聖な東京神殿の再奉献に携わることは身が引き締まる思いがしました。

時間の経過とともにプロジェクトの打ち合わせと神殿の改装は徐々に進んでいたものの、新型コロナウイルスの感染拡大のために、社会生活も教会の集会もすべてストップした中で東京神殿の再奉献がいつになるのかは誰にもわかりませんでした。その一方で、私は2020年3月に職を失い、それから約半年間仕事が見つからずにいました。先の見えない中でしたが、それでも不思議と悲壮感はありませんでした。

その後関東マスタープランに従って旧武蔵野ステーキと旧町田ステーキが東京西ステーキとして再編されたため、當真会長がステーキ会長を解任となり、私がステーキ会長として引き継ぐことになったのです。これで、當真コーディネーターご夫妻は神殿再奉献に専念できることになった一方で、私は10のワードを持つステーキの管理と神殿再奉献のアサインメントをどうやってやり遂げることができるのだろうかと思いました。

しかしながら、主は私の心配をご存知で、道を用意しておられました。まずはアシスタントの八木兄弟と市川姉妹が新たに加わり、彼らが目を見張るような働きをしてくださったのです。その後2021年の11月に私は教会職員として採用されましたが、オフィスが神殿の別館にありますので、神殿再奉献のアサインメントを果たす上ではこれ以上ない環境でした。

再奉献式の日程が翌年の7月3日に決まり、それまで停滞感のあったプロジェクトが一気に動き出しました。再奉献の日が迫る中、私は神殿での再奉献セッション当日の入館証を兼ねた1,600枚の特別推薦状の配布を担当することになりました。刻一刻と変わるリクエストを反映させながら、細心の注意を払いましたが、上手にできなかったこともたくさんありました。それでも當真コーディネーターご夫妻や浅井兄弟の助けを得ながらなんとかやり遂げることができました。支えてくださった方々に感謝しています。

主イエス・キリストがそれとは気づかぬような奇跡を起こして私たちを導き、東京神殿の再奉献をなされました。この業が主ご自身の業であることを証します。

上野 誠



エグゼクティブアシスタント 市川春菜姉妹の証

私のアサイメントは3年前に頂いたある友達の本の電話から始まりました。

「誰と一緒に働きたいかを考えた時に、春菜ちゃんとなら楽しく働けると思って」と。

彼女のその言葉を聞いてアサイメントを引き受けることに決めました。

コーディネーターである当真ご夫婦を始め、エグゼクティブアシスタントの同僚たち、コミッティーの委員長とその委員会メンバーの方々と共に働くことができたこの2年間は素晴らしい霊的な機会となりました。振り返ってみるとコロナ禍もあり、通常は数ヶ月ほどのアサイメントを2年間も担当させて頂けたことは、神殿に対する愛を増し加え、参入するための霊的な備えをする大切な時間であったように思います。

当真ご夫婦は、コロナ禍でプロジェクトが進行し難い中にあっても、どのような時にも神殿に目を向け、「自分の行えることを全て行う」（ニーファイ第2書25：23）ことの大切さを教えてくれました。どのような時もチャンスに変えることができる、その知識は今でも私の人生の大切な教訓となっています。

オープンハウス・再奉献式当日はこの上ない特別な機会となりました。オープンハウス・再奉献式の期間中に、シューズカバーを付ける人、消毒をする人など、人目に触れず奉仕されている一人ひとりの姿を見た時に、教義と聖約109章の中のある聖句が心に浮かびました。

「...わたしたちがあなたの御名のために建て、わたしたちの手で創ったこの宮をあなたに奉献することを受け入れてください。」（教義と聖約109：78）

この聖句を思った時に、主がこの瞬間を確かに見てくださっていて、私たちの奉仕を喜んで受け入れてくださっていると心に感じることができました。「聖きを主に捧ぐ」人々の姿はとても美しく、一人ひとりの神殿へ奉献する思いが「主の宮」を祝福している光景でした。

神殿への愛は次の世代にもきっと引き継がれていくことでしょう。

神殿が確かに主の宮であり、家族を永遠に結ぶ場所であることを証します。

最後に、共に働いて下さった1人ひとりの兄弟姉妹との出会いと働きに心からの感謝を申し上げます。

「あなたの僕たちがこの宮からあなたの力を帯びて行けますように。あなたの栄光が彼らのうえにあり、あなたの栄光が彼らの周りにあり、あなたの天使たちが彼らに対する務めを果たしますように。」ジョセフスミスが捧げたこの奉献の祈りを心から願い、証の結びといたします。

市川 春菜



エグゼクティブアシスタント 八木哲也兄弟の証

今回、東京神殿再奉献・オープンハウス委員会でのアサインメントを頂き、その後、多くの兄弟姉妹たちと奉仕をさせて頂く機会を頂けたことに心から感謝しています。

私たちの役割は、コーディネーターと各委員会の委員長との連携やコーディネーターが様々な事柄を進めやすいようにサポートすることでした。ですので、神殿の再奉献式・オープンハウスがどのように主の導きによって進められているのかを感じさせて頂くことが多くありました。パンデミックの影響による過去に例のない状況になり、いつその時が来るのかわからない中で、準備を進めるのは、とても難しい状況でした。そのような中でも、いつその時が来ても良いように十分に備えることをコーディネーターがいつも私達を励まし、導いてくださっていました。結果的に奉献式の日程が決まってからオープンハウス初日までに3ヶ月というタイミングでしたが、各委員会のそれまでの準備と日程が決まってからの一致と多くの兄弟姉妹の献身によって、それまでの多くの準備が形になり当日を迎えることができました。

その準備は委員会のメンバーだけでなく、東京神殿地域内のステーク、地方部の指導者の皆様とも連携して一人でも多くの兄弟姉妹がオープンハウスに参加できるように、再奉献式に備えることができるように奉仕されているのを目にすることができました。コーディネーターと共に、各ステーク、地方部の指導者の皆様とミーティングをさせて頂き、ファイヤサイドを企画させて頂くなどを通して、各地域の指導者の皆様がどれほど、神殿を愛されているか、神殿を通して主からの恵みを一人でも多くの人に味わってもらいたいと思っているのかを感じ、そこには常に主の御霊が共にありました。

再奉献式当日、多くの兄弟姉妹が神殿、そして神殿別館で再奉献式に参加するために、広尾まで来られていました。そこでは久しぶりの再会や主の宮が再度奉献されることへの喜びによって、笑顔があふれる1日でした。ネルソン大管長は「神殿にいる時間を増やすと、ほかの何をするよりも生活が祝福されると約束します。」と語ってくださっていますが、まさに祝福されている人たちがそこにいました。

この神殿で与えられる聖約の中で生活をするときに、平安と喜びが与えられるという証をさらに強めることになった、この奉仕の機会に感謝しています。この東京神殿の改築と改装に関わって下さった方、またオープンハウス・再奉献式の奉仕、お越し下さった方々に、そして私達を導き、愛してくださっている主に感謝しています。神殿はたしかに主の宮であり、そこで学べる事柄、行われていることが主の導きによって行われていることを証します。

八木 哲也



映像・音響委員会



概要

オープンハウス&再奉献委員会の管理、神殿部・エリアオフィス・地域指導者との連携ツアー前のビデオルームを用意。モニターやその他必要機器の購入、セッティング（配線）、ビデオデータ準備、操作マニュアル作成など。上映するビデオは日本語、英語、中国語、スペイン語、ポルトガル語の5か国語。ボランティアの訓練会では、当日の注意事項、機器の操作方法、簡単なトラブル対応方法の説明を実施。オープンハウス期間中はオーディオサポートの他に、プロジェクターを利用してのビデオ放映、SVIPのために神殿内でのビデオ上映なども行った。奉献式ではソルトレイクより持ち込みのあった機材の設置と撤収を実施。

メンバー

委員長 全体管理：

折戸 篤（松戸ステーキ松戸第二ワード）

会計担当：

内村 芳春（東京西ステーキ国立ワード）

神殿部との連携：

大久保 健二（松戸ステーキ松戸第二ワード）

神殿部との連携、機器購入：

長登 悠平（東京ステーキふじみ川越ワード）

奉献式 機器設置：

大塚 敬（神奈川ステーキ川崎ワード）

久保田 賢一（松戸ステーキ松戸第一ワード）

記録：

大塚 光男（神奈川ステーキ神奈川ワード）

ボランティアシフト管理者：

下宮 賢治（東京西ステーキ府中ワード）

高塚 正和（東京西ステーキ相模原ワード）

ボランティア訓練、マニュアル作成：

仲本 親司（神奈川ステーキ神奈川ワード）

世界的な半導体不足もあり、テレビモニタの調達に時間がかかった。最初の注文から商品到着までは、2週間弱かかり、5/9（月）に届いた。5/15（日）に委員会メンバーで集まり開梱及びセッティングを実施した。初期動作確認を行ったところ、1台電源を入れても映らない不具合があった。またテレビモニタ台も1台配送時に、扱い方が良くなかったようで破損していた。オープンハウスまでに再納入が間に合うか心配したが、無事その週のうちに交換を行うことができた。

5/22（日）ボランティアの訓練会を実施し、当日の注意事項と機器の操作方法、簡単なトラブル対応方法の説明を行った。訓練中、5分程度するとモニタが真っ暗になり、何も映らない状態となった。再度電源を入れなおすと利用できたが、また5分程度すると同じ状況となった。ほかのテレビモニタで確認を行ったが、他では5分で映らなくなるということにはなかった。操作説明書を確認したが、5分で画面が消えるような設定方法はなかった。そのため、こちらのテレビモニタも初期不良ということで、交換することとなった。こちらの交換も、驚くことに2日で行うことができ、無事すべての機器をオープンハウス前に準備することができた。

購入した5台テレビモニタのうち2台が初期不良という事態に見舞われたが、無事にオープンハウス前までに交換をすることができた。またボランティア訓練で初期不良のあるテレビモニタをたまたま利用したが、もし正常なテレビモニタを利用していたら、初期不良に気づくことができないままオープンハウスを迎えることになっていた。私たちが最善を尽くしてオープンハウスの準備を行ったときに、主が助けてくださり無事に準備を整えてオープンハウスを迎えられることとなった。

アサイメントをいただいた時には、自分自身が映像音響スペシャリストではなかったため、何もわからず、不安だった。しかし、コーディネーターの当真ご夫妻、実行委員会のメンバー、映像音響委員会メンバー、ボランティアの皆さんの奉仕と協力により無事に終えることができた。機器調達においては小さな奇跡を見ることもできた。

大変なこともあったが、奉献式に参加し、アイリング管長の奉献の祈りを聞き、賛美歌を歌ったときに強く御霊を感じ、心に喜びを得た。それは今までの苦労など、無きに等しいと感じさせられるほど大きな祝福だった。

折戸 篤



使用されたテレビモニター。



実際に使用された様子。上映するビデオは日本語、英語、中国語、スペイン語、ポルトガル語の5か国語があった。

コミュニケーション委員会



概要

コミュニケーション委員会では、下記3チームに分かれる。

・アウェアネス

ステークやワードの神権指導者たちが、友人や家族に神殿のオープンハウス活動に参加するよう励ます最善の方法を支援する。ハッシュタグキャンペーン & リアホナローカルページ（ハッシュタグの告知・活動募集）、ポスター制作、WEB サイト・Facebook ページ・YouTube チャンネルの運用とコンテンツ制作。

・パブリックアフェアーズ

神殿活動に関する適切な情報を、ニュースメディアと神殿地区の特別ゲストに提供する。メディアイベントや他の招待客のためのツアーを企画する。オープンハウス前の準備事項としては、プレス配布用のエバーグリーン（一般向けに教会の信条や神殿の説明が書かれたもの）の編集、特別内覧会出席者への贈り物「命の木」を青葉太一兄弟に依頼、クリスマスカードの作成と配布、招待客リストの作成と送付、案内受付委員会と共に予約システムの構築、会食の調整など。

招待客のオープンハウス当日の実施事項は、映像視聴の部屋の確認、姉妹宣教師の手配、受付、レセプションの進行状況の確認、お見送りサポート、特別VIPへのお土産、ガイドボランティアの調整など全体的な役割。お越しくださった方には後日、お礼状を送付する。

・メディア

オープンハウスのメディアデーを担当し、メディアを招待する。教会内外向けのWEBサイトの作成、インタビュー動画と記事の作成（Orangestar & 夏背夫妻、岸夫妻、奥村夫妻、Opeti 兄弟）、YouTube 運用、広告掲載依頼、当日ゲストの招聘、レセプションホールの装飾準備など。

メンバー

・アウェアネス

アウェアネス委員長：

池田 直哉

チーム①会員参画企画

リーダー：

谷亀 康人・愛蘭（千葉ステーキ / 千葉ワード）

ハルヴォーソン和貴・舞（桐生ステーキ / 古河ワード）

栗田 伸一（東京ステーキ / 所沢ワード）

石田 智通（千葉ステーキ / 東金ワード）

竹内 敏夫（神奈川ステーキ / 川崎ワード）

池田 直哉（神奈川ステーキ / 川崎ワード）

チーム②会員参画・SNS

リーダー：

ブライアンスキナー 梨那

（東京南ステーキ / 東京第二ワード）

丸山 幹夫・恵子（東京西ステーキ / 相模原ワード）

福田 順子（神奈川ステーキ / 川崎ワード）

松岡 真弓（松戸ステーキ / 牛久ワード）

河南 順一（京都ステーキ / 下鴨ワード）

ジョー プリントン（東京南ステーキ / 東京第二ワード）

・パブリックアフェアーズ

パブリックアフェアーズ委員長：

水野 祐司

チーム③オピニオンリーダーおもてなし

小笠原 拓也・さやか（静岡ステーキ / 富士ワード）

芥 敦美（東京ステーキ / 浦和ワード）

池田 ひとみ（神奈川ステーキ / 川崎ワード）

熊野 妙子（京都ステーキ / 茨木ワード）

田口 実康（神奈川ステーキ / 神奈川ワード）

平間 頼子（桐生ステーキ / 古河ワード）

工藤 啓二（神奈川ステーキ / 山手ワード）

七條 公美（東京ステーキ / 麻布ワード）

チーム④オープンハウス企画運営

小山 聖真（神奈川ステーキ / 大和ワード）

和田 彩子（東京ステーキ / 麻布ワード）

水野 祐司（神戸ステーキ / 神戸ワード）

相浦 誠子（福岡ステーキ / 福岡ワード）

ドーフジョン ひろ子（東京ステーキ / 浦和ワード）

鈴木 賢治（東京西ステーキ / 町田ワード）

杉本 恵洋・美智子（大阪ステーキ / 堺ワード）

・メディア

戸部 浩美（松戸ステーキ / 牛久ワード）

杉本 拓也（千葉ステーキ / 小岩ワード）

折戸 亜希子（松戸ステーキ / 松戸第二ワード）

桐林 千和（広島ステーキ / 光ワード）

河南 順一（SNS チーム兼任）

コーディネーターの眞眞兄弟姉妹から東京神殿のオープンハウス/再奉獻のコミュニケーション専門委員会のアウェアネスの責任を頂き、何もかもが初めての経験で、また、コロナ禍という未曾有の社会不安があり、私たちは全てが見えない中で準備をする必要がありました。コミュニケーション専門委員会のアウェアネスには2つのチームに分かれており、若い世代のグループリーダー/サブリーダーである①谷亀兄弟姉妹/ハルヴォーソン兄弟姉妹の会員参画チーム、②スキナー兄弟姉妹/松岡姉妹のSNSチームが神権指針によりアサインされました。若い世代のリーダーシップのもとでメンバーが支え合いながら活動を進めていきました。準備をする中、何度も乗り越えられそうにない問題がありましたが、その都度、様々な方法で道が開かれたように思います。そんな中、コナン・グレース兄弟が40数年前に経験されたお話しの動画を①、②チームで制作することが出来ました。その動画の中で、彼自身、何度も何度も大きな問題に直面しましたが、次のような祈りに対する答えを受けられたようです。“これは主の宮居であり、主

が対処されることであって、私の問題ではなかったのです。主が望まれることには何も妨げるものはありません。あらゆることは主の時宜になんて行われ、私達が主の目的を達成できないことはないと知っていました。問題は残っていましたが、いずれ解決することが分かりました。” グレース兄弟のこの証は私たちの心に大きな平安を与えてくれました。また、前後するかもしれませんが、そのような時に総大会でネルソン大管長の“神に勝利を！”というメッセージが更に私たちの気持ちを前向きにしてくれましたし、心の支えとなりました。この聖なる主の御業に携わってくださったコミュニケーション専門委員会の全てのチームメンバーが見えるところ、見えないところで、献身的に働いて下さったことに心から感謝いたします。また、この経験を通して改めて主が生きておられ、私たちの祈りや願いが主の時に聞き届けられ、御心になった必要な助けや導きが与えられることをへりくだり心から証いたします。

池田 直哉

コミュニケーション アウェアネス委員長



パブリックアフェアーズチーム集合写真

この責任をいただいて、神殿のオープンハウスをこれまで経験したことがなかった私にとって、まったく先の見えない中、手さぐりでスタートとなりました。それだけでなく若いメンバーにとってこれまでの経験は少ないが、次世代を育成するためにも彼らをリーダーとしてオープンハウスの議論を進めるようにという方針が示されました。さらにコロナ禍にあって、オープンハウスの日程が未定な中で議論を進めて行くということ、どれだけの人が参加するか全く予測不能な条件の中でありとあらゆるパターンを想定していくことが求められてるということを考えると困難さを感じました。

未知の状況下で、すべて仮定に基づいて計画していたことが、根底から覆されることや、大管長会、神殿部のより深い考えから承認が降りなかった計画、承認に長い時間を要した事柄など、思うように進んでこなかった日々が長くあったように記憶します。そのような中、私たちが課題の大きさを前に進めなくなっている時には、いつも前に進む力と乗り越えるアイデアをもってすべての課題に答えを持って助けてくれたのが、チーム③の小笠原兄弟姉妹、芥姉妹、チーム④の小山兄弟、和田姉妹という若いメンバーでした。彼らがチームで果たしてくれた働きは非常に大きいだけでなく、この各チームに欠かせないものであり、私たち全メンバーは心からの愛と敬意と感謝を感じています。

一方、経験豊かなベテランメンバーからも多くの模範を見せていただきました。日本ならではのおもてなしをもって招待状の作成に取り組んだチーム③の方々、オープンハウスの企画に対してありとあらゆる事柄を受け入れ対処くださったドーフご夫妻、ガイドボランティアとして奉仕して下さった日本の開拓者と呼ばれる方々の献身と彼らに熱

心に声をかけ続けてくださった杉本ご夫妻に特に感謝します。彼らからは、諦めずに必ず成し遂げられると信じて進む「神の人」となることで、問題が目の前で克服されていく様子を何度も目にすることができました。

この責任には想像以上の多くの苦労やプレッシャーもありましたが、オープンハウス終了の達成感やチーム、委員会の皆さまからの労いの言葉を通じて埋め合わされただけでなく、奉獻式を神殿の中で体験するという祝福をいただくことで、大きな祝福に変えていただいたと感ずることができました。その時にも、自分が今この部屋で皆とともに「主のみたまは火のごと燃え」を歌えているのは、最後まで諦めることなく走り続けるよう励ましてくれた、若きリーダーたち、常に模範を示し続けてくださった経験豊かな先輩方が私をここに連れてきてくださったと改めて感ずることができました。

東京神殿再奉獻、及びオープンハウスを通じて、日本の開拓者たちがもたらしてくださった神殿の祝福は、このようにして若い世代の方々へと確かに引き継がれていったと実感することができました。この特別な機会に委員会の一員として携わることができたことに私たちは皆、心からの感謝を感じており、これからも神殿に参入する度にこの日のことを思い出すことができることを嬉しく思っています。

委員の一員として奉仕して下さった皆さまに、ともに奉仕させていただいたことへの感謝の気持ちをお伝えするとともに、皆さまがこの責任に従事いただき示していただいた神と神の御業に対する犠牲と献身に対して、豊かな祝福がありますようにと心よりお祈りいたします。

水野 祐司

コミュニケーション パブリックアフェアーズ委員長



パブリックアフェアーズチーム集合写真



神廟とは何でしょうか —

HOLINESS TO THE LORD

古来より、神を礼拝するために「神の家」「神の宮」である神廟が建てられてきました。
 東洋聖徒（エヌ・キリス）教会においても、
 神廟は聖潔を一つに結ぶことで神聖な場所です。
 通常の礼拝所とは異なり、
 神廟では経典や先達の教義のための儀式が行われます。
 神前で執り行われる献儀は、「死に二人を分かちあう」、ではなく、
 この世を超えて永遠に続きます。

2022年現在、世界中で1020の神廟が存在し、建築中、改装中、
 建設予定地が発表された神廟を含めると
 全部で約2200あります。

日本では1989年に東京神廟。2000年に福岡神廟。
 2006年に札幌神廟が開かれ、現在、神廟神郷が盛増中です。

OPEN HOUSE

特別一般公開

2022.6.3日 - 6.18日

無料券
6,511円
(税別)

TEL: SAT 9:00-21:00 最終受付 20:00+α
SUN 9:00-18:00 最終受付 17:00+α

入場
無料

※参加費は別途必要

年齢や宗教にかかわらず、どなたでもご自由に神境内観覧をご覧いただけます。当日はビデオ撮影も自由ですがカメラフラッシュの使用はできません。

コロナ対策として事前予約調整のため、下記QRコード「東京神廟オープンハウスReadyサイト」よりご予約の上にご参加ください。

※新型コロナウイルスの影響により、本開催日程への変更がある場合がございます。

[@epn_japan](#)
Twitter

[https://www.facebook.com/epn.japan](#)
Facebook

[https://www.youtube.com/channel/UCBvDQWwUgYtGjZLkzFmTlRQ](#)
YouTube

[https://www.instagram.com/epnjapan/](#)
Instagram

東洋聖徒（エヌ・キリス）教会 日本東京神廟

〒104-0047 東京都港区南青山5丁目5番10号
 東京神郷オーシャンフロント・海客館裏側ビル

● 東京神郷オーシャンフロント・海客館裏側ビル
 ● 東京神郷オーシャンフロント・海客館
 ● 東京神郷オーシャンフロント・海客館裏側ビル
 ● 東京神郷オーシャンフロント・海客館裏側ビル

東京10月10日開催「正統派、12世紀型」より数百年分
 の歴史がここに集結。その中で、まず、4世紀の正統派の
 秘伝書家としての教訓を受けることができます。東京10月10日
 開催「正統派」から初めて、その中に秘伝書があります。

東京神郷オーシャンフロントのウェブページでダウンロードする
 「案内」を受け、フォームを送信してください。

[東京神廟再奉獻公式ニュース](#)
[ホーム](#)
[About](#)
[青少年](#)
[メッセージ](#)
[東京神廟](#)
[インスピレーション](#)
[アルバム](#)
[ENGLISH](#)

東京神廟再奉獻式は
明日！

東京神廟再奉獻まであと1日
7月, 2022

東京神廟再奉獻は、いよいよ明日です。...

最新ニュース

Menu

7月, 2022

東京神廟再奉獻まであと1日

7月, 2022

東京神廟再奉獻まであと2日

6月, 2022

東京神廟再奉獻まであと3日

6月, 2022

東京神廟再奉獻まであと4日

東京神廟アルバム

東京神廟再奉獻ニュース

ユースディポーションナル

教会公式ウェブサイト

東京神宮式年遷宮大会
東京神宮
TOKYO SHINTO SHRINE
OPEN HOUSE 2019 4.18-4.19
4月18日(木)・19日(金) 10:00-16:00
東京都千代田区千代田 1-1-1
東京神宮
www.tokyoshinto.or.jp

会員・一般向けの WEB サイト



社会的にも有名な教会員へのインタビュー特別企画



Facebook ページ



レセプションホールのパネル依頼（ホスティング委員会と協力）



青葉太一兄弟が製作された陶器のお皿「命の木」
（特別内覧会出席者への贈り物）



オピニオンリーダーへの招待状
（デザイン：森下善行 「絆」毛筆：餘目澄美代 文章：熊野妙子）

会計委員会



概要

オープンハウスと再奉献式に関連する予算管理と経費精算をする。オープンハウス前の準備として、見積もりを提出、各委員会に会計担当を選ぶように依頼、経費精算手続きの案内書を作成。再奉献式後、支払い払戻し申請手続きを完了する。

メンバー

委員長：

浅香 理佳（東京西ステーク吉祥寺ワード）

アドバイザー：

榎本 義行（東京ステーク浦和ワード）

この様な特別なプロジェクトにおいての会計という仕事は全く初めてでしたので、戸惑いと不安を感じながらのスタートでした。会計手続きに関するマニュアル作りから始まり、オープンハウス・再奉献式の日程が発表になってからは、各委員会の担当者とのやり取りや、会計記録の作成にと、毎日忙しさに追われていました。そんな中、全体定例ミーティングの時に、聖書にあるマルタとマリヤの話を聞きました。私はマルタの様に忙しく進み続けていました。とてもたくさんの領収書が提出され、ある日その領収書を見た時、このプロジェクトに携わった多くの方々の主への信仰ある働きに、感動と感謝の思いでいっぱいになり、涙が溢れてきました。実務で忙しい中であっても、大切なことを忘れないようにと主が教えてくださり、主の愛を感じる瞬間でもありました。また、共に働き、その時々で助けてくださった方々、導き手となってくださった方々、優しい言葉をかけてくださった方々、信仰の模範を示してくださった方々に感謝の気持ちでいっぱいです。神殿の御業が主の御手によって進められていることを証します。そしてそれは、私たち一人ひとりのための主の愛の御業であることを証します。

浅香 理佳



ホスティング委員会



概要

オープンハウスでは、教会幹部・オピニオンリーダーのためのギフトや食事の準備、レセプションホール・休憩場所の用意（家具・花など）。奉献式では、教会幹部・サポートスタッフに食事の準備など。

メンバー

委員長：

岡野 久子（東京ステーキ浦和ワード）

メンバー：

関口 貴子（東京ステーキ中野ワード）

樋口 徳子（東京ステーキ麻布ワード）

興津 留美（東京ステーキ浦和ワード）

柿木 真人（東京ステーキひばりヶ丘ワード）

櫻澤 枝里香（東京ステーキ麻布ワード）

私は2020の8月26日にホスティング委員長の姉妹から彼女を補佐する割り当てを頂きました。しかしながらコロナ禍にあり計画は一向に進まず2022年を迎えることとなりました。最初は委員長を補佐する役割だったので気軽にこの責任を引き受けていました。ところが再奉献の発表される10日前に新たに私がホスティング委員長になることの変更が知らされました。それからのミーティングの量は膨大なもので人生の中で最も責任の重さに圧倒される日々でした。しかし一つ一つに小さな奇跡が重なり合い乗り越えることができました。まさに第1二一ファイ3章7節です。毎回困難がやってくると周りに最も適切な天使が遣わされます。顔をあげて主を仰ぎ見るために必要な励ましをくださる方々です。そんな経験を数え上げると多すぎてすべてを書くことができません。

岡野 久子

オープンハウスの為の全ての準備が整えられたホールでスティープンソン長老、リサ姉妹を招いての食事会がありました。いよいよこれから、閉ざされていた扉を開けて沢山の方々を神殿の中に招く時が来たのだと強く感じました。その為の特別なランチョンミーティングは、ホスティングスタッフ1人1人がはるばる日本に来て下さった教会幹部や、神殿部で働く方々に心からの感謝を込めて用意しました。オープンハウスの為にいらした使徒の為に働く機会があったことは、私の子孫だけでなく、幕の彼方の先祖にとっても光栄なことの様に感じました。あのホールだけでなく、神殿の敷地の中に使徒達と共に溢れるばかりの御霊が注がれているのを感じました。

興津 留美



東京神殿の内覧を終えた皆様は、ホストの方々とレセプションホールで暫しの歓談の時間を持ちます。その間、神殿で触れた清さと御霊の光と温かさを引き続き感じながら、心地よく過ごしていただけるように、私たち、関口貴子、橋田芳子、室伏弘美、天野美恵の4人はスタンドテーブル用に6個のフラワーアレンジメントと神殿の清さをイメージする1つの花瓶生けの花を用意しました。

6個のアレンジメントは、季節の花を使いました。エレガントなピンク色のサラベルナールというシャクヤクをメインにし、バラやトルコキキョウ、カンパニュラ、馬酔木、利久草を添えて、テーブルの上で交わされる話が和むように小ぶりで可愛いものにしました。

ゲストの皆さんがホストの方々とそれぞれテーブルの上の花を間に挟んで交わされる会話は、神殿や教会のことについての理解や親交を深めるものとなったことでしょう。

花瓶生けのものは、清楚でありながら同時に華やかさがある八重の白百合を使うことを迷わず決めました。白にうっすら緑が見えるこの百合が一番神殿の聖さを表現出来ると感じたからです。使った花瓶は中野ワード所有の瑠璃色のボヘミアングラスでした。教会が大好きで教会にいつも貢献してくださった佐藤松代姉妹が20年ほど前に亡くなったとき、ご家族の皆さんから彼女の記念に何か買って欲しいと言ってくださり、購入したものです。東京神殿で先に亡くなったご主人と結び固めを受けた佐藤姉妹は、この東京神殿オープンハウスでこの花瓶を使ったことをとても喜んでくださったにちがいありません。

このオープンハウス、再奉献を祝い、準備するために私たちは天父からいただいているものを使う機会に恵まれました。そう出来たことにとても感謝しています。開拓者の時代に聖徒たちは先祖から受け継いで大事にしていた食器を碎き、神殿の壁に練り込んで捧げたと聞きました。私たちの捧げたものは、高価な食器ではありませんでしたが、時間や才能、主への愛、奉仕する決意、荷が重くてもやり遂げるための信仰、そのようなものを捧げることが出来ました。その報いは余りある喜びでした。

関口 貴子



5/30(火)「アイロン、ありませんか？必要なのですが」
「昨日まであったのだけれど…持って帰ってしまいました…
ありません…」

一般オープンハウスに先駆けての特別枠オープンハウスの
2日目。シワだらけの撮影用の布にアイロンをかけたいと
のコミュニケーション委員会の方からのお申し出でした。
その時わたしは、心にお顔が浮かんだ麻布ワードの姉妹へ
電話をしました。「もしもし…今、お家にいらっしゃいま
すか？」

無事、親切な姉妹よりアイロンとアイロン台をお借りす
ることが出来ました。約1時間後、アイロンをお返しする
時のことです。その親切な姉妹が「今日はたまたま午前中
家にいたのよ」「あなたから電話をもらった時、アイロン
かけをしようとアイロンとアイロン台を出していたところ
だったのよ！丁度アイロンにスイッチを入れようと思って
いた時でね。」「アイロンにスイッチを入れていたら冷め
るまで待たなくては熱過ぎて…直ぐには貸してあげられな
かったわ」と。そして、帰宅したらアイロンかけをするとおっ
しゃるのです。とてもとても小さなことですが、東京神殿
オープンハウスのために主がひとつひとつのことをご覧に
なり御手を差し伸べてくださっていることを知り、心から
感謝をした瞬間でした。

樋口 徳子

出エジプト記31章1～11節、出エジプト記36章1～2節

1 ベザレルとアホリアブおよびすべて心に知恵ある者、
すなわち主が知恵と悟りとを授けて、聖所の組立の諸種の
工事を、いかになすかを知らされた者は、すべて主が命
じられたようにしなければならない。

2 そこで、モーセはベザレルとアホリアブおよびすべて
心に知恵ある者、すなわち、その心に主が知恵を授けられ
た者、またきて、その工事をなそうと心に望むすべての者
を召し寄せた。

ベサレルとアホリアブはあまり知られていない登場人物
ですが、神殿を作る上で重要な人たちでした。今では私た
ちが神殿で行なっている儀式で使う基礎を用意した人たち
ですが、彼らがしたことは多くの人たちに知られていない
かもしれません。私たちの奉仕も大勢の前に出てすること
ではないかもしれませんが、天父は私たち1人1人をご存
知です。名前でご存知です。彼らが御霊で満たされたように、
私も連日みなさんと一緒に働かせていただいて、神殿に近
づき、主を近くに感じる事ができました。みなさんが奉
仕を通して聖約を守られている模範を見て強められました。

櫻澤 枝里香



ウェルカムバスケットとメッセージカード

2020年9月にアサインを受け、ホスティング委員が開始しましたが、それから延期が継続され、その間も定期的にメールなどで連絡を取り、いつでも動けるように備えていました。そして、2022年3月の夕方に當眞コーディネーターより連絡を受け、6月にオープンハウスが予定され、7月3日に再奉献式が決定したことを告げられました。2020年当時と比べ、ワードで新たな責任も受け様々な環境が変化している中、當眞コーディネーターからは「くれぐれも無理はされないように」とお声もかけて頂きました。

私の中では、このアサインを受けた時点で、最後までやり遂げたいという固い決意をもって、受けていたこともあり、時間の制限がある中でも主が方法を備えてくださるという確固とした信仰を持つことができました。

新たに岡野久子姉妹が委員長を引き受けてくださることになり、関口姉妹、樋口姉妹、興津姉妹、櫻澤姉妹、5名の素晴らしい姉妹たちと奉仕する機会に恵まれました。この3ヶ月も満たない準備期間の中で、1人1人の姉妹の信仰と卓越した経験から多くの事柄が話し合われ、進められてきました。私はミーティングに参加する中で、以前にワークトドルフ長老の説教の「自分の立っている場所で持ち上げる」という言葉が常に頭に浮かんでいました。説教の中で、「あなたにしか達成できない責任」、「すべての人は独自の場

所に立っており自分だけにしか達成できない重要な務めを担っています。」とワークトドルフ長老は言われました。

文字通り、ホスティング委員の一人一人はそれぞれ主から与えられた賜物と特質を持っており、自分たちができることの全てを捧げてくださいました。また、お互いに気を配り助け合い、終始委員の中には愛に満たされ、主の守りと導きがあることを感じることができました。委員の中で行う全てが、「おもてなしの心」を持ち、自分のことではなく、人々のことを考え行う事柄でした。

私たちが自身の才能や時間を主に捧げ行おうとする時に、主の助けと導きが与えられ、私たちの力では成し遂げられないことも、主が叶えてくださることを目の当たりにする機会が多くありました。主の慈しみと、導きに心から感謝しています。私にとって、この神殿再奉献の委員としての奉仕はかけがえのない経験となり、証となりました。何よりも、オープンハウス・再奉献式に参入された方々のお顔が、主の光を受け、輝き、平安に満たされているのを拝見し、私たちが行ったことが主の御心に叶っていたと強く感じました。主に感謝し、共に奉仕をして下さった多くの兄弟姉妹に心より感謝しています。イエス・キリストの御名によりアーメン。

柿木 真人



場が和み会話も弾むように彩りを入れた教会幹部・神殿部のスペシャルディナー



メディアデーの食事 衛生面を配慮し、個包装・調理済みのものを用意



招待客への朝食



奉献式、ボランティアのために軽食を用意



オピニオンリーダーススペシャルゲスト用の食事

音楽委員会



概要

聖歌隊（指揮者、伴奏者も含む）を組織し指導、ホザナ賛歌以外の選曲、歌詞や楽譜の調整、オープンハウスのレセプションにて BGM を生演奏の準備

メンバー

委員長：

高久 夏美（桐生ステーキ古河ワード）

アシスタント：

松本 一恵（桐生ステーキ古河ワード）

酒井 香奈（東京ステーキ麻布ワード）

第1セッション聖歌隊

指揮者：

中村 信行（東京西ステーキ国立ワード）

伴奏者：

高畑 裕子（神奈川ステーキ厚木ワード）

ソプラノ：

スキナー 慶子（東京南ステーキ東京第二ワード）

堀田 ひとみ（東京西ステーキ相模原ワード）

渡辺 もと（神奈川ステーキ湘南ワード）

佐藤 育子（神奈川ステーキ藤沢ワード）

アルト：

大森 佳子（松戸ステーキつくばワード）

田中 安紀子（松戸ステーキつくばワード）

渡邊 由美子（神奈川ステーキ大和ワード）

濱井 潔美（東京南ステーキ東京第一ワード）

テナー：

黒木 豊域（東京西ステーキ八王子ワード）

赤塚 周（神奈川ステーキ大和ワード）

原島 愛一郎（東京西ステーキ国立ワード）

野出 吉広（東京ステーキ浦和ワード）

バス：

柳田 揚啓（東京西ステーキ甲府ワード）

本間 一也（神奈川ステーキ港北ワード）

Aaron Parks（東京南ステーキ横田ワード）

岡川 隆司（東京ステーキ浦和ワード）

第2セッション聖歌隊

指揮者：

白井 美和（千葉ステーキ千葉ワード）

伴奏者：

川口 加寿子（千葉ステーキ千葉ワード）

ソプラノ：

高宮城 留都（松戸ステーキ松戸第一ワード）

丸中 葉子（千葉ステーキ八千代ワード）

稲葉 英実（千葉ステーキ浦安ワード）

藤巻 牧子（松戸ステーキ我孫子ワード）

アルト：

橋本 弓子（東京ステーキ浦和ワード）

戸部 麗実（松戸ステーキ牛久ワード）

今井 利佳（千葉ステーキ千葉ワード）

山口 侑里（松戸ステーキ足立ワード）

テナー：

相根 英俊（桐生ステーキ熊谷ワード）

高久 勇士（松戸ステーキ越谷ワード）

折戸 俊（松戸ステーキ松戸第二ワード）

古川 拓（千葉ステーキ千葉ワード）

バス：

グレン ウィリアムズ（千葉ステーキ千葉ワード）

池田 和政（千葉ステーキ千葉ワード）

川島 晃（千葉ステーキ鎌ヶ谷ワード）

高橋 賢次（東京ステーキ浦和ワード）

第3セッション聖歌隊

指揮者：

荻田 晃宏（松戸ステーキ松戸第二ワード）

伴奏者：

美上 葵（松戸ステーキ松戸第一ワード）

ソプラノ：

高根澤 ルリ（東京西ステーキ吉祥寺ワード）

Gaitau 奈緒子（神奈川ステーキ湘南ワード）

礪波 まどか（東京西ステーキ町田ワード）

竹村 愛佳（東京西ステーキ多摩ワード）

Maurielle Cook（東京南ステーキ東京第一ワード）

アルト：

宮崎 奈津美（東京ステーキ麻布ワード）

柏倉 優衣美（神奈川ステーキ大和ワード）

西 実結（桐生ステーキ古河ワード）

Hollis Cook（東京南ステーキ東京第一ワード）

テナー：

稲葉 亮平（神奈川ステーキ神奈川ワード）

京面 志門（東京西ステーキ府中ワード）

田川 良樹（東京ステーキYSAG）

佐々木 貴良（東京西ステーキ八王子ワード）

バス：

渡辺 真央（神奈川ステーキ大和ワード）

舟木 類佳（東京ステーキYSAG）

菅原 祐嗣（東京ステーキYSAG）

田中 瑛智（東京ステーキ麻布ワード）

委員長エピソード

3つの聖歌隊それぞれに主の特別な御力が加わり、彼らの持つ力以上の素晴らしい歌声を参加されたすべての皆さんに届け、感動を与えることとなりました。聖歌隊の歌声は確かに御霊を招き、そこに集ったすべての方々、そしてズームで参加されたすべての会員の皆さんに感動と喜び、そして主の御霊を分かち合うこととなりました。多くの会員の皆さんが主の深い愛を感じ、感動で涙を止めることができなかったことをお聞きしています。

2年という長い期間の中で、コロナ禍が長引き足踏み状態の時期が長くあり、気持ちのたるみを経験しながらも家族を優先しなければならない時期もあり、音楽委員長としての働きを進めなくてはならない時もあり、気持ちの中に焦りが常に存在する中でこの責任を進めてきましたが、コーディネーターの当真兄弟姉妹の助けをいただきながら、この責任を果たしてこれたこと、また私ができない部分を二人のアシスタントの姉妹たちが手となり足となり助けてくださったこと、この責任を果たすうえで家族の協力と主の助けがあったことに心から感謝しています。

このアサイメントを受けた当時わたしはとても大きな問題を家族の中で抱えており、その問題のあまりの大きさのために心は平安を失いとても超えられそうもないその問題のために前に進むことがとても難しい時期を過ごしていました。ただひたすら主の与えてくださっていた言葉に支えられながらも、主の教えに対する熱い気持ちを持てず、生ぬるい生活を送っているときでした。家族を優先するために安息日は教会に行けないことも多々ありました。そんなことはこれまでの信仰生活の中でありえないことではありましたが、それでもその時はそうせざるを得ない状況に置かれ、やむを得ず安息日は自宅に残り時間を過ごすことが増えていた時期で、教会の責任も優先できずに生活していた時でした。



高久夏美委員長

そんな中でいただいたこのお話を引き受けていいのかという思いもありましたが、それ以上に今の生ぬるい生活を一掃し、前に進みなさいと主はわたしにおっしゃっているように感じました。わたしは音楽を専門的に学んだわけでもなく、ただ音楽が好きで主に対する信仰と貴い主の贖いについて、また家族が永遠であることをテーマにした曲作りを行い、日本の各地の教会に招待されて歌を通して福音を分かち合ってきました。そして子供が小さいころから不定期ではありましたが、音楽の夕べと称した家族のコンサートを企画し、実践して、高久家族としての音楽を通した伝道活動を実践してきた経緯があり、そのような経験があってこの責任に繋がっていったのかかもしれません。このような形で音楽に携わってきた私を主は選んでくださったことはわたしにとって、また私の家族にとって大きな祝福に繋がっていくことを想像もしていませんでした。

ただ、この責任を果たしていく過程の中で私は、この責任が主が下さったのは私のため以上のもっと大きな目的があるのではないかと思うようになりました。大きな問題を抱えるわたしの愛する家族の為なのではないかと思うようになりました。この大きな問題は、家族全員にとっての試練であり、辛い日々のただなかにいました。主がこの再奉献式において預言者を通して息子の一人を癒し祝福して下さることをいつもイメージしていました。私たち家族の前に立ちはだかっている大きな問題を取り除いていただきたいと切に願い、そのために私にできる最善を尽くそうと頑張ってきました。時には私がこの主の御業を進めることを阻止しようとする力も働きましたが、責任を果たすための時間が取れるように主は道を備えてくださいました。

最終的には完全な癒しの奇跡は起きませんでした。それでも息子の一人が預言者であるアイリング管長に少しでも近くいたいと主に頼る姿を見ることができたことは私たち家族にとっての奇跡でした。また、そんな息子に再奉献式で神殿の中に入るための推薦状をいただくための面接を

受けてみることを勧めたことで、それが現実となるための行動を起こす機会になり、最終的にブルーチケットをいただき神殿に参入するという奇跡を見せていただくことができました。息子にとってこれは簡単なことではありませんでした。私たち家族にとって奇跡としか言いようのない出来事でした。わたしの長男は、聖歌隊員として歌い、長男がいただいたゲスト用チケットによって末の息子がブルーチケットをいただき、娘は娘の集うワードからの推薦でブルーチケットをいただく機会があり、無理だと思っていたもう一人の息子が祝福によってブルーチケットをいただくことができ、ビショップのサインをいただき当日難しい状況の中で何とか頑張って神殿内で再奉献式に参加し、家族に支えられて最後まで部屋にとどまることができました。

わたしが望むような大きな奇跡はありませんでしたが、それでも神様は私の家族全員を、特に一人の息子を神殿に招いてくださり、いつの日か家族全員が神様の御許に帰ることができるということを教えてくださっていると強く感じることができ、再奉献の日に家族の全員が神殿内にいることが将来の家族の姿を象徴しているようにとても強く感じることができました。家族にとって大きな祝福の日となりました。

この2年を振り返って自分が感じたこと、それによって前に進んでくれたことを思うときに、そして再奉献式に家族がみな参加し祝福をいただいたことを思うときに、わたしにこの責任がなければ我が家に奇跡は訪れなかったとはっきりと感じることができました。

また、オープンハウスが開催される約ひと月前に強皮症という難病で苦しんでいた母が天に召されることになり、再奉献式に向けての準備のために、痛みと苦しみの伴う母を犠牲にしていた日々もあったこと、そして私の家族を優

先したために亡くなる母を看取ることができなかったことで、本当に母に申し訳なく、多くの後悔に苦しみ、思い出しては涙する毎日を送っていました。それでも主は、私が必要以上に苦しむことがないように、オープンハウスの準備に思いを向けることで苦しみから解放してくださっていました。下を向き、後悔に苦しむ暇もないほど準備に忙しい毎日となりました。もし母がまだこの世に生きて存在していたならば、オープンハウスの準備どころか、再奉献式に母を一人家に残して責任のために神殿に向かうことは決してできなかったと思います。

すべてに主の時があり、主の深い御心は私たちにすぐには明らかにされなくとも必ず果たされることを知っています。この福音は確かに真実の福音であり、天父と御子イエスキリストが確かに生きておられ、私たちの必要をすべてご存じであることを証します。一生に一度しか経験できないであろうこの再奉献式での音楽委員長としての責任をいただけたことに心から感謝しています。また私のアシスタントの酒井香奈姉妹と松本一恵姉妹、そして聖歌隊を指導してくださった指揮者の兄弟姉妹、また指揮者を助け、共に聖歌隊を導いてくださった伴奏者の姉妹たちに心から感謝しています。そして聖歌隊員のみなさんお一人お一人の熱心な働きと主を賛美したいと心から望み練習に励んでくださったその模範に心から感謝をしています。

最後に私を助け導き、よきアドバイスをくださり、時には励まし労をねぎらってくださった當真健一兄弟、るり姉妹に心から感謝をお伝えしたいと思います。

これらのすべての記録と証を、主イエスキリストのみ名によって書き記しました。アーメン。

高久 夏美



一般オープンハウス枠での生演奏



オピニオンリーダー枠での生演奏

聖歌隊メンバーのエピソード

私は4年間学習塾の事務をしています。仕事柄いつも帰宅が夜9時で家族と夕食を共にするのは週末と休日の時のみでした。主人は時差出勤のため毎朝6時には家を出ます。出勤が早い主人と夜の帰宅が遅い私とでは一緒に話す時間がほとんどなく、いつもすれ違う日々を過ごしていました。そんなある日、私に東京神殿再奉献式の聖歌隊員として第1セッションで歌う機会が訪れました。朝1番のセッションですから早起きをしなくてはなりません。朝7時30分に別館集合と指示が来ました。夜の帰宅が遅い私にとって早起きはチャレンジでした。どんなに急いで帰宅後家事をこなしても、夜11時に寝るのが精一杯で、いつも起床は朝7時でした。朝7時30分に別館に到着するためには家を朝6時前には出ないといけません。必然的に最低朝5時には起床する必要があると思いました。しかも朝は歌うのに思ふような声が出ません。それを克服するためには早起きを日課にして体を慣らし、発声練習をする必要がありました。しかし、いつも帰宅が遅い私がどうやったら毎朝5時に起きて、発声練習をすることができるのでしょうか？

東京神殿再奉献式を3週間後に控えたある日、会社の上司から電話がありました。

「堀田さん、勤務のシフトを変えたいと思っています。午前と午後のシフト、どちらがいいですか？」

耳を疑いました。私はすかさず午前を選びましたが、これは神様のお導きだと確信しました。おかげで夕方には帰宅し夜9時には床につけるようになりました。毎朝5時の起床も苦ではなくなり、朝の発声練習ができるようになりました。何日か歌ううちに声が出るようになり、朝の発声にも自信が持てるようになりました。東京神殿再奉献式当日、自

信を持って歌うことができたのは言うまでもありません。

本当に神様は私たちの必要をよくご存知で、状況を変え不可能を可能にしてください。仕事のシフトが変わったことにより家族と過ごす時間も前よりずっと増えました。もっと家族間の話し合いができるようになり、もっと家族の関係が良くなりました。私の家族を愛しています。東京神殿再奉献式は私たち家族に大きな祝福をもたらしてくれました。心から天のお父様に感謝しています。

堀田 ひとみ

「東京神殿再奉献式第二セッション聖歌隊指揮者」…。今文字にして読んでみても、なんて大きな責任だろう…と、圧倒されます。この責任を果たすには、ただひたすら導きを求めて導かれるまま、助けを求めて助けられるまま、文字通り主を完全に信頼しないと成し得ないことでした。

このお話があったばかりの時は本当に大きなプレッシャーを感じていました。「各ワードから来る歌のうまい人たちに教えることなんてできるだろうか？」「この指揮者の指導はつまらないと思われたらどうしよう？」

でも、そんな私の愚かでこの世的な考えも全て飲み込まれてしまうほどの、ある思いが心に満ちてくるのを感じました。「人の目を気にして主の道を外れてしまわないように、ただ天父にのみ栄光があるように、最良の捧げ物をするために学ぶ努力を惜しまないこと、主に導きを求めること、それらに集中すれば何も恐れる必要がない」ということを示していただきました。同時に、これから再奉献まで沢山の祝福を目の当たりにするという確信が心に湧いてきて、主から平安と勇気をいただきました。そこからは本当に毎日、主の恵みと愛に気づくという日々でした。分かち



第1セッション聖歌隊グループ 吉祥寺の教会にて



第2セッション聖歌隊グループ
指揮者の白井姉妹がメンバーのために作った、2nd（第2セッション）のロゴ入りバッグを手に

合いたいと思った聖句は全て開いたページに見つけることができました。落ち込むようにと誘惑を受けることが沢山ありましたが、それ以上にあらゆる手段で主が励ましてくださるのを肌で感じました。

聖歌隊メンバーは皆、時間やお金、家族の協力など沢山のものを差し出して練習していました。主がそれを受け入れて、皆の献身を愛されたので、結果として私の舌が緩められました。自分の引き出しにない言葉まで語ることを促されたので、練習が終わった後は毎回疲労困憊でした。

また、悩んで元気のないメンバーがいた時は「励まさなくていい、証を聞きなさい」という導きを受け、早速実践しました。主からの導きでその人は元気を取り戻し、喜びに満たされて練習できるようになりました。

日の栄えの部屋で歌う機会は本当に特別で、明らかに16人ではない美しい声が聴こえました。天の聖歌隊も共に歌ってくれているのがわかりました。

あの場に主がいないと説明のつかない奇跡と祝福もいただきました。あまりに不思議で個人的でしたが、こんな私のことを主は忘れていないし、祝福を沢山用意して私が家族を連れてみもとに行くのを両手を広げて待ってられると知って、涙が止まりませんでした。書ききれない多くのことがまだまだありますが、どんな小さなことでも奇跡と恵みであることに気付くことができるという機会であったと感じています。

天のお父様とイエス様が確かに生きておられて私たちを愛してくださっていること、聖霊によって答えをくださり、この教会を導いてくださっていることを心から証します。

白井 美和

皆さんはご自分に与えられた才能についてなぜそれが与えられたか考えたことはありますか。黒木兄弟は賛美歌を歌うことが大好きで、毎週日曜日聖餐会では大きな声で歌っています。その兄弟に思いもしない責任がきました。奉献式の日に聖歌隊として歌うというものです。その責任を喜んで果たしたいという気持ちはあったものの、皆の足を引っ張るのではないかとしり込みしたそうです。数か月の練習

を経て不安からわくわくに変わっていきました。そこに主の御手があったからです。裏山で大きな声で歌を練習する兄弟の声に私のわくわくも募っていきました。

奉献式には私と娘たちも一緒に神殿に参入することになりました。神殿に着き兄弟と別れてからエンダウメントの部屋で待つ私たちの所に白い服をきたマスク姿の2人が音もなく静かに突然現れました。まるで天使がその部屋に訪れたのかと感じました。それはアイリング管長とスティーブンソン長老でした。2人は私たちにやさしく微笑みかけ、アイリング管長は両手を胸に置き、その両手を私たちに差し出すようなしぐさを何度もして見せてくださいました。そこに言葉は一つもありませんでしたが、ただ静かに彼らの愛を私たちに向けてくれているのが分かりました。

どんなにこの東京神殿を愛しているか、そしてどんなに日本人を愛しているかということを強く感じました。大きな愛がその部屋を包んでいました。

日の栄えの部屋の入口に一番近いエンダウメントルームにいたので、彼らがいなくなるとすぐに、私たちが見ているモニターに映し出される日の栄えの部屋に現れました。そして奉献式が始まりました。聖歌隊も日の栄えの部屋に入ってきました。

そしてそこで聖歌隊が歌い始めると16人の声が部屋中に川の流れるように満たし愛と平安が響き渡っていきました。私の心の中にカートランド神殿で起こったような奇跡が広がりました。そして確かに東京神殿にも天使たちが、そして主がいることを感じました。天使の歌声に誰もが心に何かを感じたに違いないと思います。そんなメッセージが後に沢山兄弟のもとにきたからです。

夜になって同じ聖歌隊のメンバーの一人から連絡があり、兄弟の歌声を大変褒めてくれて、なおかつ日本タバナクル合唱団へのお誘いがありました。「忙しいからな～」と言う兄弟に私はやることを進めました。その才能が伝道になるでしょう！イスラエルの集合に役に立つに違いないと。

兄弟は8歳の時に他の教会で賛美歌を聞いてから賛美歌が好きになり、12歳に改宗した時には、学校の帰り道にへたな賛美歌を歌って友達を困らせていたそうです。その時



第3セッション聖歌隊グループ 渋谷の教会にて

から今日にいたるまで、自分は賛美歌好きだけど、上手だとは気が付かずにいました。以前同じワードのある兄弟に「黒木兄弟の賛美歌好きは賜物だね！僕は賛美歌は好きだけど、兄弟ほどではないな」と言われたことを話してくれました。奉獻式というこの日の為に、黒木兄弟の賜物は用意されてきたのだと二人で気づいたのです。聖歌隊メンバーの中でも、この日の為にこれまで備えられてきたことに気づいたという、同じように考えている兄弟がいたことを聞きました。

一人ひとりに与えられる賜物は千差万別、でも一つはつきりしたことは、その才能は主の王国を築く為に、それぞれの使命を果たすためにあることです。聖歌隊の練習中は皆で合わせるのがとても難しく感じていた兄弟が、奉獻式の日、歌声が共鳴するという初めての経験をしたと話してくれました。それは主が一生懸命頑張れば、後は何段階も引き上げてくださる事が確かに分かった経験だったそうです。

私たちが喜んでその使命を果たすとき、主は必ず隣にいてくださるのです。東京神殿が再稼働した今日、沢山の日本中の先祖が待っていることを強く感じます。私たちはファミリーサーチを全力で突き進める使命があります。主が再び地上に訪れる日に天使の歌声が響きわたる、その時に共に歌いたいと強く感じています。その歌を歌うとき、大切な家族、親族、友人、知り合い、そして先祖までもその中にいることを想像するとそれはなんと喜ばしいことでしょう。

黒木 静香

2カ月間練習をして課題を乗り越えて当日を迎えました。しかし、全員が同時には発声することだけは、気を抜くと誰かがフライングしてしまい解決に至らず、当日の声合わせの時には不安をのぞかせていました。そんな状況で私たちは本番を迎えました。でも、歌いだしたら会場に歌声の響きと御霊とが溢れ、そんなことを心配することが全く必要のないことだと、歌っていて理解しました。全員が御霊に満たされて歌い続けました。感情が溢れ歌声が震えてしまうのをこらえながら歌いました。

赤塚 周

この度、第2セッションの聖歌隊員の1人として私にとって身にあまる光栄な務めをいただきました。2ヶ月間の練習期間、若く、柔和な人格と霊性と音楽の高い能力を持つ指揮者から多くを学ぶことが出来ました。賛美歌の歌詞の解釈の仕方、暗譜の仕方、発声、信仰を込めた表現、誰かに聞かせるためではなく、ひたすら神様の栄光のために…。それらの全てが私の学びとなり、私自身の信仰が良い方に変わって行くのを感じていました。練習は毎回祈りと証で始まり、隊員の皆さんからも強い信仰の模範を受け御霊溢れる特別な時間となったのです。

そんな中、私には喉の不調という不安がありました。25年も前のこと、身体の病気をきっかけに喉に影響が出て声が出にくくなり、歌う時には特に声が出にくい状態で、病院で何度も診てもらいましたが、声帯に問題が無いとのことでした。ですが、歌うことが大好きでしたので諦めきれず、祈りの中で「お父様、私は思いの丈で歌が歌いたいのです。歌える様にしてほしいのです」と切実な思いを打ち明けましたところ『大丈夫、心配ありません』というはっきりとした平安に溢れる答えが帰ってきたのです。

それは、かつて、福音の真実を尋ねて、初めて御霊の促しを感じた時と似た温かくははっきりとした感覚でした。それからは、私はその『大丈夫』という温かい励ましを頼りに歌うことを諦めませんでした。早る気持ちで、直ぐにも癒されるものと期待したものの、実のところ、何年もかけながら、ほんの少しずつ改善されていきましたが、完全ではなく、特に低音から中音の部分の声がかれる症状が残り、悲しくなるのでした。完全に回復した状態でこの務めをいただけたなら、どんなに良いかとも考えましたが、この状態については神様はご存知の上でのことでしょうから心配せず臨もうと決心しました。

練習期間、ほぼ毎日、祈りと共に声が改善されることを心から願いながら練習をした私は、不安な部分も全て神様に捧げたいという思いになりました。神様のお望みは私の願いのような小さなものとはほど遠く、救い主の贖罪と慈

愛への理解と信仰と私の最善の行為と謙遜さでした。

奉献式の2日前、日の栄えのお部屋でのリハーサルの時、緊張で声が震えましたが、そこに天の聖歌隊が加わっているのをはっきりと感じました。天使もリハーサルに来れるのだという驚きと共に、頼もしくて本番の日が待ち遠しい思いになりました。案の定、私の声は少し枯れてはいましたが、天使と一緒に歌うのは本当に楽しいものでした。

そして、再奉献当日の朝、出かける前に夫が「あなたの周りには天使がたくさんついています」と祝福してくれましたので、道中、その言葉を心の中で繰り返していました。本番前の最後の練習の時、私の喉はやっぱり枯れていましたがこのまま精一杯歌えば大丈夫、神様はお受け取り下さるという安心がありました。

いよいよ再奉献式が始まり、開会の歌では、ほんのわずかに枯れただけでしたので、嬉しかったです。この感じで次も楽しんで歌おうと力が湧きました。

2曲目、いつもは枯れる所もスムーズに声が出ました。そして、常に天使の存在をはっきりと確認出来ていました。天使は私の弱い腹筋の所を支えてくれていたので声が震えませんでした。3曲目も声は全く大丈夫でした。最後のホザナ賛歌も思いっきり、声の心配もすっかり忘れて神様に捧げる思いだけで歌いました。

あの日、25年悩み続けた私の身体に奇跡が起こっていました。しかし、この奇跡については、暫くは誰にも話せずにはいました。ひとつの疑問があったのです。これはこの奉献式のためだけの奇跡で、これからはまた、前の状態に戻ってしまうのだろうか？この事を誰かに言ってしまったら私は

高慢になり、この奇跡は終わってしまうかも知れないと…。

あのあと、恐る恐る歌ってみると、ちゃんと歌えましたし、次の日もその次の日も…。しばらくしてから、指揮者と夫に伝えてみました。でも、声は大丈夫で今でもちゃんと歌えています。それからというもの、歌うことが特別に楽しいのです。家事仕事をしながらも自然に歌が出てきます。おまけに嬉しくて、あの日を思い出しては涙まで出て来ます。

神様にとって、私の喉の不調を治すことなど、極簡単なことであると知っていましたし、神様の時があることも理解していましたので、私は長年、あの日、祈った時の平安を頼りに、その日を待ち望んでいました。その日が、東京神殿の、日の栄えのお部屋の再奉献式の時だったのです。

長かった25年は今となってはあっという間の出来事の様です。その間、耐えられる様に神様が一緒にいて下さいました。だから、待ち望むことが出来たのです。

私は、癒していただいた日の事を決して忘れず謙遜でいたいのです。これからも神様に喜ばれる最良の歌だけを歌おうと心に決めています。

丸中 葉子



奉献式直前の声出しの様子

交通・誘導委員会



概要

オープンハウスおよび再奉献式に一人でも多くの方が来られる環境を整備する。特に車での来場者に安全かつ迅速に入庫、駐車、出庫して頂くために駐車場予約システムを構築・運用し誘導を行う。一般道路の通行者、近隣の住民に迷惑をかけないことで、教会、神殿へ良い印象を持ってもらえるように調整。物質的な側面を通して、怒り、焦り、不安等、オープンハウスや再奉献式で感じる御霊を妨げるものを取り除き、来場者に御霊を最大限に感じてもらう。

メンバー

委員長 全体管理：
大谷 宏三

ボランティア運営：
楠城 与守也

会計・予約承認：
宮坂 かよ

システム構築・予約承認：
新野 徹

記録・構成：
謝花 丈治

交通・誘導委員会において「できるだけ多くの人に御霊を感じてもらおう」という目的のもとで「正義と憐れみ」のどちらを行使するのか、というのが全ての面において大きな課題でした。たとえば、駐車場に予約なしで来た方に対し、秩序を守って「ルールだから」と正義を行使してお断りするか、「せっかく神殿に足を運んでくれたのだから」と憐れみを持って許可を出すのかというような案件です。これに対しては、委員会内で長い間評議し、全員の一致した意見として判断基準を定めておき、それに基づいて判断しました。また、個々の予約や来場者の状況が特殊だった場合も、よく評議をし、御霊の導きによる判断を常に仰いでいました。そのために委員一人一人が、常に御霊を感じられるよう、心にゆとりをもてるよう備えており、大きな決定事項に対しては委員長が導きを求めて決定していました。

ただ、交通・誘導を行うのではなく、まさに主の宮である神殿に関わる特別な交通・誘導を行えたと言えます。その結果、何度も駐車スペースが限界までなくなる場面があっても、必ず助けがあり、大きな混乱も事故もなく終えることができました。この委員会は、「交通・誘導委員会」ではなく、「交通・誘導『評議会』」と呼ぶのがふさわしいのかもしれません。

謝花 丈治

神殿に関わる奉仕の機会が与えられ、心からの感謝の気持ちでいっぱいです。神殿は特別なところで、文字通り、イエス・キリストの幕屋であって、御霊に満たされた場所です。

オープンハウスが始まった頃、別館の礼拝堂から神殿まで、本当に強い御霊を感じ、喜びと畏敬の念で全身が震えたことをよく覚えています。そして、その感動はオープンハウスから再奉献式まで、常にもたらされました。

私は、交通・誘導委員会の一員として、一人でも多くの方が、オープンハウスに安全に参加して、御霊を豊かに感じることができるように全力で奉仕させて頂きました。でも、その奉仕の全ては、主の深い慈愛と、天使として与えられた"幕の両側の"多くの同僚の皆様の、愛と思いやりに支えられてもたらされたものです。神殿とは、そのような主と主の軍勢に囲まれた場所、主の慈愛に満たされた場所であることを心から証します。

主が確かに生きていらっしゃるって、神殿を通して、私たち一人一人に語りかけて下さることを証します。

大谷 宏三



会場設営委員会



概要

オープンハウス前と再奉献式前の会場設営全面下準備：委員会予算管理のうえ、敷地計画を作成し、神殿部マネージャーのマーク・ロビンズ兄弟と東京神殿コーディネーター當真ご夫妻をはじめ、管理本部・教会職員、全専門委員会、及びテント・備品・全専門委員会依頼用品や印刷物などを提供する外注業者会社と備品レンタル会社との連携。教会中央神殿部より靴カバー、サイネージ、及び名札テンプレートの注文。神殿直近地元のステーキやワード役員との連携と設置・清掃ボランティア募集、調整、アサイメント計画などの実施。現地の各エリアにおける備品設置作業・サポート提供：ツアーのビデオ視聴室エリア、レセプションエリア、通路と靴のカバー取り外しのテントエリア、誘導・駐車場エリア、及び多目的別館各階のエリアなど。再奉献式前の神殿内における幹部指導者用特殊な椅子、一般会員用客席、その他家具の準備と設置。OH 後と再奉献式後の全面解体・撤去・レンタル備品返却・片付け作業と処理まで。

メンバー

委員長 全体管理：

児玉 光治（松戸ステーキ越谷ワード）

アシスタント：

児玉 和子（松戸ステーキ越谷ワード）

テント・備品等担当：

寺井 隆（松戸ステーキ松戸第二ワード）

会計等担当：

Douglas H. Shumway

（東京南ステーキ東京第一ワード）

企画等担当：

田頭 裕（松戸ステーキ越谷ワード）

（2021年8月23日 逝去）

私は東京神殿・再奉献会場設営委員会で奉仕させて頂いた寺井兄弟と申します。

委員会奉仕の中で印象的だったのは、会場に設置したテント設営の際ですが、その設営はオープンハウス (OH) 直前3日前に始まりました。が、一旦は設置完成した後に、全てのテント部材（風速に耐え得る為のテント支柱を支えるウェイトや、そのウェイトと支柱とを結ぶワイヤー等）も神殿が清さの象徴とする「白」を基調との指導を受け、その追加工事を設営会社様に夜遅くまで対応頂き、設営の翌日夜までに全体を白で装飾される様修正いたしました。

神殿内で奉仕されてるワーカーの方々始め、参入される方の衣装も「汚れがなく、清さの象徴の白い様相で参入」する姿と同様、OHで来られる人々に「主の宮居に」に相応しいお招きの環境に出来た事は喜びを感じました。

寺井 隆

スケジュールの不確実性と人事異動のため、テントと関連資料の計画はいくつかの段階を経たところ、2022年3月24日に最終的に後方支援を提供するために選ばれるイベントプランナーの村越業者の担当者と会ってから本格的に動き始めました。神殿委員会のサポートと多くの人々からのインスピレーションを受けたアイデアにより、オープンハウスと再奉献式の際に使用するため、控えめだがエレガントなテント構造が神殿と別館の間のエリアに組み立てられ、準備エリアと対策を提供しました。神殿に入る前後に参入客が靴カバーを着脱するのを手伝うため、雨風から身を十分に守ることができました。

工業用ファンと屋外構造は夏の暑さから身を守るのに役立ち、雨天時には外部パネルをすぐに下げることができました。ありがたいことにその必要はそれ程ありませんでしたが、台風レベルの暴風雨が発生した場合に備えて計画が





立てられていました。イベント前の計画は、ほとんどの緊急事態に対応できる十分な堅牢性を備えていたことが判明しましたが、最初の夜の後に追加の照明と昆虫防御の必要性が明らかになったとき、機敏な思考の神殿職員やスタッフ、委員会メンバー、ボランティアの方々が一緒に力を合わせて必要な変更を開発し実行したため、主の優しい慈悲深い祝福を受けられました。

オープンハウスが始まると、会場設営専門委員会は本格的に「本番運営モード」に入り、主な活動は、神殿と別館の両方の毎日の清掃とともに、テントの構造と靴カバー着脱エリアを覆うプロセスの監視とサポートでした。多くのボランティアのフルスケジュールと長距離通勤、そして毎日の活動後に夜遅くまで掃除をする必要があることを考慮し、東京第一、東京第二、麻布の各ワードが定期的に神殿の別館に集まるように割り当てられることが決定されました。その多くの兄弟姉妹たちは、神殿近辺に比較的近くに住んでおり、建物に最も精通しているため、清掃業務を引き受けるよう求められました。各ワードには、ある週は神殿を、次の週には別館を交代で清掃する責任が割り当てられました。地元の指導者たちのサポートと個人的な関与により、一日の終わりにはすべてが整い、多くの人が神殿の清掃を一生に一度の機会とみなしていました。

作業時間は長く、時には多忙になることもありましたが、関係者全員の顔に浮かんだ何よりの表情は、この主の御業に対する喜びと、この歴史的な「愛の奉仕」に携わる機会に対する感謝ばかりでした。

Douglas H. Shumway



2020年6月17日付の手紙により、教会中央神殿部の幹部ディレクターであるケビン・R・ダンカン長老に日本東京神殿オープンハウスおよび再奉獻委員会の管理委員会メンバーとして歓迎され、私は会場設営専門委員会の委員長を務める割り当てを受けて驚きました。もちろん喜びの気持ちですが、この責任は肉体的にも精神的にもとてもハードルの高い任務の一つであること、その一方人生で最も霊的にやりがいのある祝福満ちる教会の責任になることは、このときは想像もつきませんでした。でも、その特別な手紙を受けてから3年間経とうとする今の私が振り返って想うと、天のお父様に対する心からの感謝の気持ちばかりです。

主の聖なる宮を整える為に他の兄弟姉妹と一緒に主の神聖な目的に携わるための共通の信仰によって、まさかのコロナ禍の時代にあったにもかかわらず、奇跡が起こるといふ確固たる証が残ったことに非常に感謝しています。また、それから今までも大いなる祝福が天から継続的に流れ出ます。特にオープンハウスと再奉獻の期間中は、毎日朝早くから夜遅くまで愛する東京神殿委員会と多くボランティアの兄弟姉妹が奉仕され、私は仕事の前後の時間に一緒にさせて頂きました。そして、My Beautiful Wife 児玉和子姉妹が突然途中から中央神殿部マネージャーのロビンズ兄弟から会場設営委員会の「委員長アシスタント」としてアサイメントを受けて、一緒に奉仕することができたのも私にとっては非常に嬉しい特別な祝福でした。

このレポートに既にあります様に、良き専門委員会メンバーの愛する寺井兄弟とシャムウェイ兄弟の素晴らしい

チームワークのお陰で、管理委員会のビジョンと目的と取り組み全体をよく把握し、沢山の時間を掛けて慎重に詳細計画、下準備、及び外注業者の連携を設けながら忠実に実行したことにより、この複雑なプロジェクトの多くのリスクを早い段階で軽減することができました。また、もちろん我が専門委員会だけで動いていた訳ではなく、むしろ会場設営に関連するニーズや要求が他の全ての専門委員会から多々の依頼があった為、100% 協力する必要があるユニークな立場だったと思います。しかしながら、私たちは改めて早い段階で、これはすべて主の御業であることをよく思い出させられました。細部に注意を払い、あらゆる規模の課題を実行することが非常に重要であると同時に、主イエス・キリストご自身が常に私たちの成功への道を導いてくださっておられることも忘れませんでした。私たちは、最終的には御霊に頼ること、そして人間の視点や人間的な考え方による人間の目ではなく、霊的な目を通して物事を見ることがより重要だったと思います。この少人数の会場設営専門委員会が積極的な姿勢を維持し、オープンハウスへの訪問者一人一人と再奉献式の参加者一人一人が主と主の聖なる宮の精神さを感じられるように、毎日良きチームワークで貢献することができたことを誇りに思い、感謝します。

でも、沢山の祝福と共に、思わぬチャレンジもオープンハウスと再奉献式の前後の時期に色々ありました。そのうち2つ印象深いチャレンジとそれに伴う得られた証を最後に分かち合います。

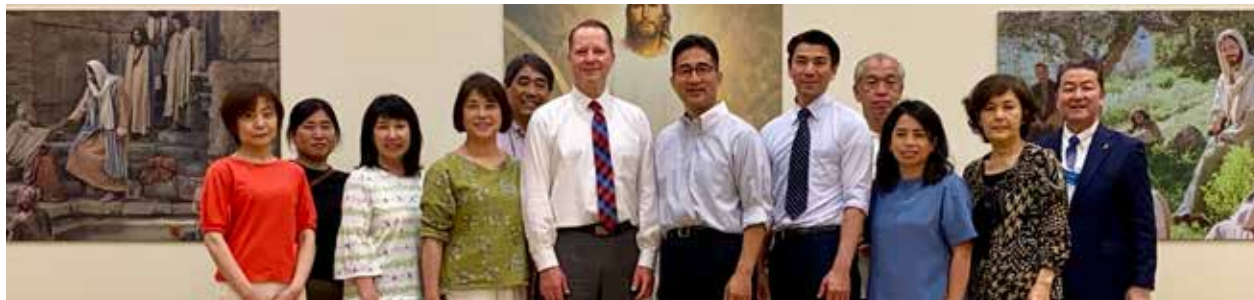
私が一番最初に会場設営委員会のメンバーに推薦して招いた愛する友人の田頭裕兄弟がこのボランティア活動が始まった後の期間中、2021年8月23日に突然倒れ、急逝されました。田頭兄弟は私にとって委員会の単なるメンバーではありませんでした。彼は当時同じ越谷ワードにおいて私と一緒に親しく懸命に努めてくださった長老定員会会

長会の素晴らしい第一顧問で、私個人と家族、そしてワードファミリーにとっては偉大な存在の御方でした。良き永遠の友と兄弟を無くした私は何日間も泣きましたが、そこで決心した一つは、この東京神殿オープンハウスと再奉献式に対する自分の奉仕の貢献も残りの会場設営委員会メンバーたちの奉仕の貢献も、毎日努めながら天幕の向こう側に先に旅立った愛する田頭兄弟を尊重する意をもって天にその気持ちを捧げて参りましたことです。

個人的な話で恐縮ながら、同じ東京神殿委員会でも多くの皆さまは存じていらっしゃると思います。再奉献から約2か月後の9月初旬、私は突然急性の健康状態に陥り、病院で倒れて緊急治療が必要になりました。その日、私は明日生き残るのかも不安になる程の大変な思いでした。幸いなことに、すぐ適切な治療を受け始めることができ、数ヶ月の間はMy Beautiful Wifeが毎日私を助けてくれたお陰でやがて回復しました。しかし、治療を受けていた間は、毎日のフルタイムの仕事を続けることができず、会社を4ヶ月間休職せざるを得ない状態でしたが、幸いに翌年1月から無事仕事に復帰できるほど回復しました。それまで健康な人生で初めてこの様な辛い経験をしたこの試練の間は、ずっとどうにかして奉仕を続けることができるように毎日願いました。私は東京神殿管理委員会で奉仕できた特別な特権に預かっていた感謝の気持ちを決して忘れず、今日に至るまで毎週儀式執行者として東京神殿で奉仕できていることも神様からの大いなる祝福です。天のお父様が常に私を守ってくださってきたことを知っております。

人生の困難のさなかに、私たちの人生全体の中心に主の聖なる宮があることと、そのお陰で私たちと家族が祝福されていることに感謝します。これらすべてが真実であることをイエス・キリストの御名により証します、アーメン。

兄玉 光治



保安・警備・救護委員会



概要

神殿部や教会本部のセキュリティーチームと連携しオープンハウス及び再奉献式における災害・不審者・不審物・救急などに関する対応を行う。保安警備チームにおいて様々なケースへの対応マニュアルを整備し、オープンハウス期間中はボランティアを募り、警備巡回。救護チームでは救護室を設置し、看護師・医師のボランティアによるけがや急病人の対応。現役の医療従事者以外にも退職済みの方や再就職活動中の方などたくさんのボランティアが参加した。

メンバー

委員長：
辻 和明

アシスタント：
平田 寛

保安・警備チームリーダー：
内田 秀明

看護師チームリーダー：
浄泉 英子

医師チームリーダー：
アンドリュー ロムニー

再奉献後のミーティングで、當眞コーディネーターは、私が警備会社の社長と聞いていたらしく、ソルトレークに推薦したと言われました。私は不動産屋であり、「警備」にはまったく縁がないと伝えると大笑いになりました。しかしこの保安警備救護委員会のアサインメントを受け、働く機会があったことを心から感謝しています。共に働いてくださった、各委員会の兄弟姉妹、特に当委員会の平田兄弟、ロムニー兄弟、芝山兄弟、内田兄弟、浄泉姉妹、港道姉妹、吉野兄弟、落合兄弟、坂本兄弟には感謝しています。共に主のみ業に奉仕できたことは私の一生の財産です。また、主の預言者が奉献の祈りを捧げた姿は、永遠に忘れません。神殿が「神の宮」であり、これは主の御業であることをイエス・キリストの御名により証します。アーメン。

辻 和明



通訳委員会



概要

ミーティングが行われる際の通訳サポート、オープンハウス・再奉献式に関連する資料・SNS 投稿や動画字幕の翻訳、手話通訳。新型コロナウイルス感染症の影響によりミーティングの大部分はオンラインで行われたため、通訳サポートもオンラインでの同時通訳がほとんどであった。

メンバー

委員長：

瓜生 英里香

佐々木 貴良

茶山 雅恵

柳原 優美子

会計：

柳原 優美子

翻訳のみ：

稲葉 英実

下宮 みゆき

山口 みさ子

通訳・翻訳：

Cade Bushnell

Michael Whitmer

Richard Nibley

Sarah Wong

山口 めぐみ

新野 由紀子

佐藤 聖志

手話通訳リーダー：

平良 裕希

手話グループ仲介：

茶山 雅恵

通訳機に関するエピソード

オープンハウスで自由に使用できた通訳機は 20 台でしたが、5/29 のオピニオンリーダーガイド訓練会時は、通訳機希望者が 50 名までに上ることが直前にわかりました。そのような時、管理本部がたまたまレンタルしていた 50 台のパナガイドが 5/27 返却予定で、幸いにも 5/26 には管理本部と連絡を取り合うことができ、返却を延期していただき、利用することができました。本当に天の助けだ！と感じました。もし仮に手元の 20 台のみでしたら、集会は片方の言語が逐次通訳となり、その分集会時間も長引いたでしょう。さらにその集会には 70 名のガイドについて初めて学ぶ方々が出席しており、質問がかなり出ることも予測できました。当日は、結局 50 台のレンタル通訳機に加え、さらに数名通訳を希望されたので、ステーキから借りた通訳機も数台利用することになり、すべて同時通訳で行うことができました。

Newsroom からの記者たち

オープンハウスの最初の一週間は教会指導者や VIP、記者会見など特別な方々のための週で、通訳委員会としての割当はほとんどありませんでしたが、私は通訳委員長として、念のため別館で待機していました。別館で、唯一あまり使用されていない、ある委員会の荷物置き場兼休憩室として使われていた、入口付近の部屋で待機していました。そこにはソルトレークから派遣されていた Newsroom の記者とカメラマンも待機兼作業室として使用していました。

週の初め頃、彼らが管理本部からもヘルプで入っていた若いバイリンガルのアメリカ人姉妹と英語で話しているのが耳に入ってきました。今回のニュースの記事の翻訳をできないだろうか、いや、バイリンガルと言ってもそこまでの日本語のレベルではないので難しい、といったようなやり取りで困っているようでした。そこで、「私、翻訳手伝えますよ。」ともちろん口をはさみました。

それからは、その一週間、私はただ待機して暇していることなく、記事の和訳や、動画に入れる字幕の切れ目の確認など手伝うことになりました。たまたま私がその部屋に、そのタイミングでいて、英語もたまたま理解できたので、みんなで神様のすばらしい助けに驚き喜びました。



再奉献式当日の手話通訳の様子。

割り当てが少なめの通訳者

通訳委員会のメンバーには、和訳のみ対応可能、これまで逐次通訳のみで同時通訳の経験がない、仕事や教会の責任で多忙といったように、様々なメンバーがいました。そのため割り当てをお願いする際に、あまり活躍できない通訳者もいて、それが気になっていました。けれども、そのうちに固定の時間にとらわれない翻訳や、手話チームと海外との仲介役の他、0円だった委員会の予算が急に色々と発生して急遽会計が必要になったり、とそれがうまい具合に、ちょうどあまり活躍できていないメンバーをお願いすることができ、それがまた、それぞれが適任者であったのも驚かされました。神様が本当に私たちの状況、私たち一人一人をよく御存じであるということが改めてわかりました。

委員長の証

通常は、6か月位で解散となる通訳委員会でしたが、コロナの関係で、実に2年間活動させていただき、逐次通訳しか経験がなかった人は同時通訳を行う機会にも預かったり、ステーキ大会のみでたまに通訳していた人はほぼ毎月何回か通訳を行う機会があったり、と通訳者としてはスキルを磨くことのできたすばらしい機会となり、本当に感謝しています。神様はだてにそのような期間が生じることを認められたわけではないので、必ず意味があると感じています。オープンハウス前の1, 2か月は息つく暇もないほどでしたが、皆さん一人一人が快く協力してくださったおかげでやり遂げることができました。神様に、助けて下さった一人一人の方に感謝します。

瓜生 英里香

メンバー写真



瓜生 英里香



柳原 由美子



Cade Bushnell



Michi Whitmer



Richard Nibley



Sarah Wong



山口 めぐみ



新野 由紀子



佐藤 聖志



佐々木 貴良



茶山 雅恵



稲葉 英実



下宮 みゆき



山口 みさ子



平良 裕希

案内・受付委員会



概要

オープンハウスの予約システム（システムの設計と運営）、参加者の誘導（オープンハウスの動線、ボランティアの配置案、雨対策など）、ボランティア（ボランティアの募集・トレーニング・支援）、コロナ対策（地元の規制を踏まえた各種の感染対策の設定と実施）

メンバー

委員長：

高堀 伸二・暢子（千葉ステーキ浦安ワード）

補佐兼コロナ担当：

楠城 康生・好江（千葉ステーキ浦安ワード）

予約システム担当：

謝花 研登（東京西ステーキ国立ワード）

誘導担当：

松澤 裕（東京西ステーキ福生ワード）

ボランティア担当：

村上 徳高・亜紀（渋谷 YSA アドバイザー）

ボランティアリーダー：

渡辺 友吉・紀子（松戸ステーキ足立ワード）

山下 博・由利子（千葉ステーキ浦安ワード）

佐藤 清彦・祐子（東京西ステーキ吉祥寺ワード）

光林 繁夫・芳子（神奈川ステーキ川崎ワード）

加藤 真一・真理子（東京ステーキ桶川ワード）

辻元 基・恵美子（千葉ステーキ浦安ワード）

山岡 大志（東京西ステーキ八王子ワード）

楠城 里辺花（千葉ステーキ浦安ワード）

東京神殿のオープンハウスと再奉献の奉仕で人々の献身と模範を目の当たりにしたこと、私たちへの主の深い愛を一層理解できたことを考えると、私の心は感謝で満たされます。

多くの人々と同様、私自身もこの奉仕を通して様々な祝福や御霊の促しを受けました。

オープンハウスがまさに始まろうとしていた5月に私が案内受付委員会の委員長としてどのように奉仕すべきか考えているとき、私は心の中で非常に強い促しを受けました。それは「毎日オープンハウスで奉仕しなさい」というものでした。私はこの勧めに従い月曜から木曜は就業前・昼休み・終業後に、金曜（有休を取りました）・土曜・日曜（ユース・オープンハウスがありました）は終日、オープンハウスの期間中毎日奉仕できました。この結果、多くの人々の信仰と模範に触れ、私自身の信仰と証が高まる数多くの貴重な経験をし、また御霊の導きを通して人々に仕えることが出来たことは、私にとってとても有難いことでした。

奉仕している際、様々な御霊の促しを受けました。例えば、オープンハウスの初日に新任宣教師と話している時に、この人々を神殿に案内できたら素晴らしい、それを主が望んでおられる、と感じたのです。各責任者の承認を得て、新任宣教師は20分の短縮版の神殿ツアーを行うことが出来ました。神殿から出て来た宣教師の顔が喜びで満たされていたことと、彼らが「素晴らしい経験だった」と感想を述べていたことで、私自身は微力ながら主のみ旨を行うことが出来たとの確信を得ることが出来ました。

私と高堀姉妹が建築関係者のご家族を神殿ツアーで日の栄えの部屋ご案内したとき、大型の資材はドアから入らなかったためスタンドグラスの窓枠からクレーンで搬入し、その後にスタンドグラスを完成させたとの非常に興味深い話をお聞きしました。結び固めの部屋ではティーンエージャーのお嬢様が「すごくきれい、ここで結婚したい」と言ってくれたの聞き、キリストの光は多くの人の心を照らす

ことを改めて強く感じました。

土曜日にボランティアが別館に集まったツアー参加者を礼拝堂からビデオルームに送り出す作業を見ていた時のことです。予約数からすると、あと数分で数十人の参加者が礼拝堂に入ってきて、礼拝堂の人数が急速に膨れ上がる見込みであることを担当ボランティアに伝えました。その時、丁度礼拝堂に数人の参加者が入ってきました。これを見たボランティアは瞬間的に事態を完全に把握し、迅速に参加者を送り出したうえ、その後も的確に送り出しの業務を行いました。後でそのボランティアと話したところ、確かに参加者が入るのを見たとき「スイッチ」が入ったとのことでした。小さなことかもしれませんが、私はまさに人に知識を与える主の奇跡を見たと感じています。

私が前庭でボランティアと話しているとき「暑いから水を飲んだ方がいい、どうぞ館内に入ってください」と勧められました。断る理由もないと思い別館に戻ってみると、ある姉妹宣教師がビデオルームの前で待機していました。話しかけた方が良いとの導きを受けたので話してみると、何かの手違いでそのビデオルームには一時間以上全く参加者が送り込まれていないことがわかりました。すぐにそこに参加者を送り込んでもらい、その姉妹たちはその日のボランティア終了時間前にもう一度ビデオのプレゼンテーションが出来たのです。

再奉献式の当日、私は神殿前にいる一人の兄弟に気づきました。その兄弟は地元で神殿が建つという靈感を受け、それをアイリング管長に伝えるためアポなしで来たのです。無理なら知り合いである青木神殿会長だけでは伝えたいとの希望が受け入れられ、その兄弟は神殿内で青木会長と面談が出来ました。これだけでも例外的ですが、青木会長はアイリング管長の警護員に面会可能か尋ねるよう私に勧め、結局その兄弟はアイリング管長と面会出来たのです。自分の息子と孫が日本で伝道した時の伝道主任だったその兄弟にアイリング管長は「私の家族の面倒を見てくださり有難



うございます」と言いその兄弟と二人で写真を撮りました。その兄弟は神殿内でお互いに知り合いのスティーブソン長老とも親しく話しており、神殿会長、十二使徒、預言者がアボなしの訪問者を例外的ながら温かく迎えるこの教会のふところの深さを目のあたりにして私は心が温まるのを感じました。

他にも、この小さな滝の音は決して忘れないとのドアキーパーのボランティアの姉妹の言葉、神殿前庭の参入者の風景を眺めながら来て良かったと言った警護ボランティアの兄弟、私自身も警護ボランティアとして見た日暮れの神殿の姿、地下駐車場でボランティアを手伝った時に触れた兄弟姉妹の信仰、夜に神殿と別館を掃除できたこと、多くの旧友と会えたこと、などなど一つ一つが私にとって忘れない経験となりました。

ボランティア訓練集会で私は「ボランティアの皆様が将来東京神殿の前を通るとき、また東京神殿の中で奉仕をするとき、ここでオープンハウスのボランティアをしたよね、と思い出していただけたら嬉しいです」とお伝えしました。多くのボランティアにとって東京神殿での奉仕がそのように個人個人の記憶にとどまるものになったと感じています。

またオープンハウスの最終日の作業終了後の祈り会で私は「主は私達の働きを受け入れてくださった」と心に強く感じました。他の委員の姉妹もその場で全く同様の確信を得たとのことでした。

オープンハウスと再奉獻は終わりましたが、この素晴らしい機会で多くの兄弟姉妹と共に奉仕できたことは私にとって永遠に消えない宝物となりました。また私はこれからも東京神殿での様々な奉仕を通して主の御業に関わっていきたいと思っています。

高堀 伸二

東京神殿オープンハウスと奉獻式で委員会メンバーをはじめ、ボランティアのみなさんと共に働くことができたことを感謝しています。

最初の東京神殿が立つまでの歴史を学び、その何年も前から困難を乗り越えながら備えが始まっていたことを知りました。東京神殿の再奉獻の準備に携わることができて、神様の業は今もさらに進み続けていることを強く感じました。

また、神殿のオープンハウスに足を運んでくださった多くの人々に心から感謝し、歓迎し、案内したときに、彼らが神殿の中で御霊を感じていることを彼らの顔の輝きから知ることができました。そしてそれが私自身の大きな喜びとなりました。それぞれの委員会のメンバー一人一人がその持ち場で能力を発揮し、力を尽くして働くのを目にしたときに、特に若い会員たちの働きに感動し、本当に素晴らしいと感じました。そして彼らがこれから先、指導者となって人々を導くことを思うと、わくわくしました。

今回の貴重な奉仕の経験を通して、神殿のすべてのことが私たちをキリストのもとに導く業であることを、さらに深く知ることができたことを心から感謝します。

楠城 好江

ユースディボーションナル委員会



概要

委員会が組織された当初は東京神殿再奉獻前日に行われるユースディボーションナルの計画と準備。2022年4月にユースディボーションナル中止が決定。それに代わり、ユースによるオープンハウスの準備と運営。青少年が東京神殿再奉獻に心に向けることができるように各ステークにも働きかけを行う。

メンバー

委員長：

青柳 明弘・美樹

YA リーダー：

宮城 成歩瀧・愛弓

Dan Naoki McGary・Danica Vivian Patiag

田中 奏太

蘆川 裕太

会計・書記：

逢坂 理基・レナ

ユースディボーションナル青少年委員会：

中沢 隼人、佐々木 ゆりあ（松戸ステーク）

前田 拓巳、伊藤 優音、志茂 彩海、川島 伶
（東京西ステーク）

中野 裕也（桐生ステーク）

杉本 光太、柿木 雪乃、上村 ひより、石井 颯真
（東京ステーク）

百瀬 理菜、糸数 悌真（千葉ステーク）

早川 祐太朗、大嶺 莉緒、佐藤 笑鈴、山野井 愛志、

岩間 直、長濱 佳衣璃（神奈川ステーク）

今回いただいた責任は自分自身と夫婦、家族の信仰と絆を強める責任だったと思います。姉妹と子供たちの助けがなければこの責任を果たせませんでした。わたしの家族に感謝しています。

また、素晴らしい委員会のメンバーと知り合うことができたことも大きな祝福です。このメンバーでなければ決してこの責任を最後まで果たせなかったと思います。委員会運営に必要な才能を一人一人が持っており、才能を発揮してくれました。委員会メンバー一人一人に心から感謝をしています。

ユースディボーションが中止になった時には、神様が何を望んでいるのか、全くわからなくなりました。でも、神殿でエンダウメントを受けているときに、わからなくても主の命令に従っているアダムとエバを見て、わたしたちができることをただ行っていけば良いのだと感じました。

青少年主催のオープンハウスで青少年が一生懸命奉仕している姿や、オープンハウスに笑顔で参加している姿を見たときに、これが神様が望んでいたことなんだとわかりました。ユースディボーションでただ話を聞くのではなく、自らが奉仕をし働くときに、神殿の大切さをよく感じ、神殿に早く参入したいという気持ちが強くなるんだと思いました。

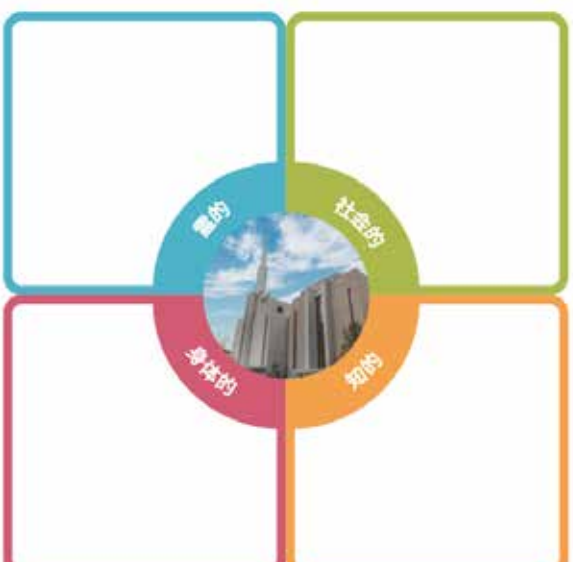
神様はわたしたちのことをよくご存じであることを知っています。すべての子供たちを愛していることを知っています。神殿がわたしたちにとって大切な場所であり、儀式を受けることで、幸せになることができる場所であることを証します。

青柳 明弘

名前: _____ ワード&ステーク: _____

CHALLENGE リスト

目標: 青少年が東京神殿再奉獻3ヶ月前から「子供と青少年」の活動の中で、神殿再奉獻のために自分ができる備えの「目標」を作ってもらいそれを行なってもらう。



この度、東京神殿再奉獻のユースディボーション委員長として特別な責任をいただいた事に心から感謝しています。

1975年スペンサー・W・キンボール大管長が、アジアで最初の神殿を東京に！と発表された時、私はその場に家族といました。(と言ってもかなり小さかったですが) その後、東京神殿が奉獻される時のオープンハウスでは、家族と一緒に奉仕をしたのを今でも覚えています。そしてそれから40年後に、東京神殿が再奉獻されることを聞き、またその再奉獻式の前日に行われる「ユースディボーション」の委員長を夫婦で！とお話を頂いた時は、東京神殿の再奉獻に関わることができる！と思えずごく嬉しかったのを覚えています。

それからコロナが世界中に広がり始めてしまったので、約2年間は関東の各ステークのユースの代表と指導者と一緒にいろいろ神殿に係る活動を考え、行い、ユースディボーションの日を迎えるのを皆で楽しみにしていました。しかし、突然のユースディボーションキャンセルの発表、その知らせは私にとって物凄くショックなことで、寝ても覚めても涙がとまりませんでした。

その時ちょうど先祖の儀式を受けに夫婦で札幌神殿へ行き、神殿の中で神様の大きな愛を感じ慰めを得ることが出来ました。今振り返るとその「タイミング」は、神様の計画の中にあったと思います。そして、ユースディボーションは行われなくなってしまいましたが、2週続けてユースの為のオープンハウスを行うことができました。それぞれのステークのたくさんのユースが奉仕をしてくれて、またたくさんのユースとそのご家族の方、指導者の方々がオープンハウスに来て下さり心から感謝しています。

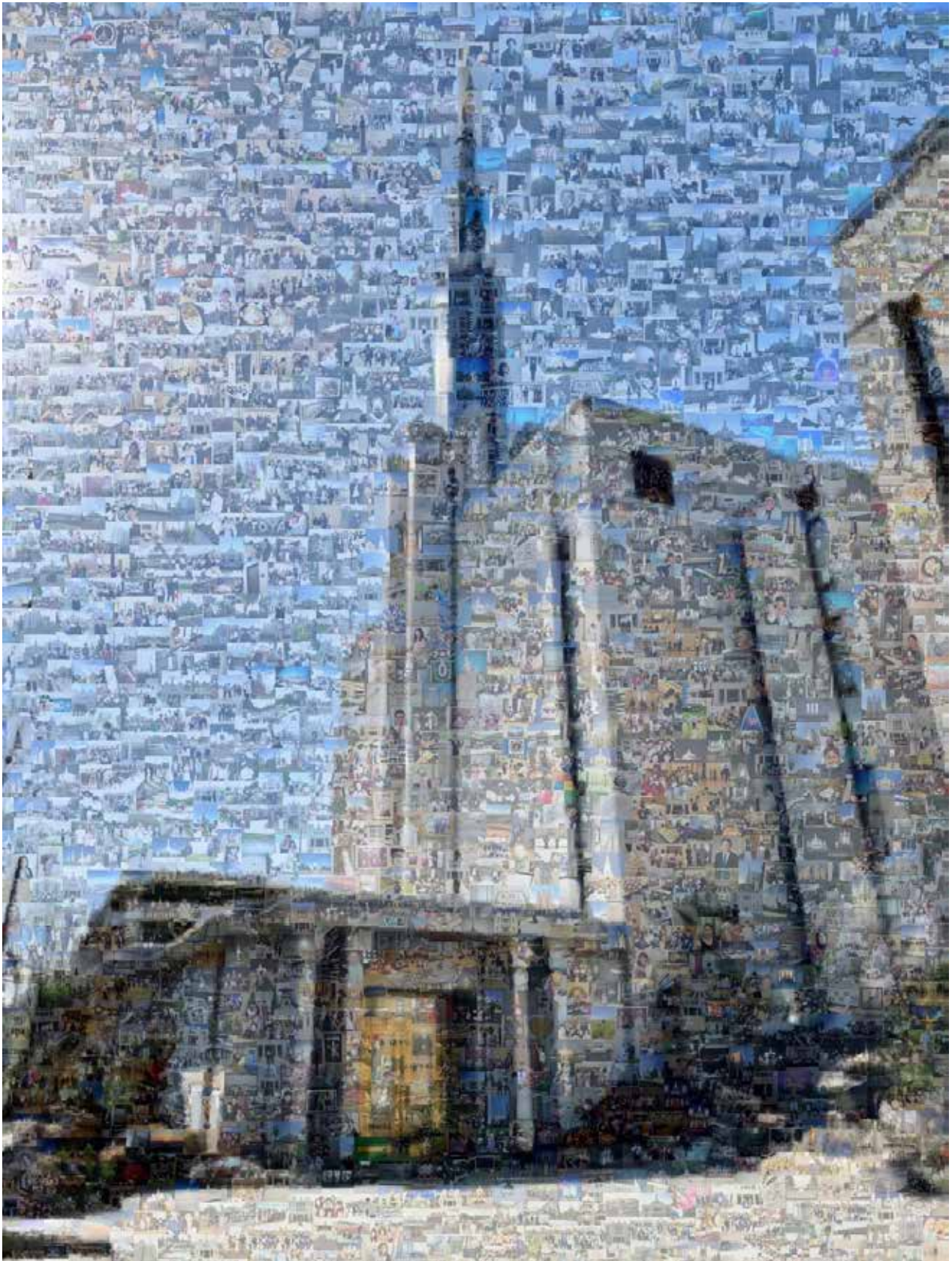
この経験を通してたくさんのユースの皆さんが、これからも神殿や先祖に目や心を向けてくださることを心から願っています。私にとって今回の経験は、人生の中で特別な宝物となりました。この経験を下さった神様に心から感謝しております。また、この地上に「主の宮」が与えられている事に心から感謝しています。

青柳 美樹

例/アイデア:

- 神殿について友達に話す。
- 再奉獻に友達を誘う。
- オープンハウスで奉仕する。
- 自分の先祖について調べてSNSにあげる。
- 神殿の絵を描く。
- ミニスタリングの担当先に神殿について証する。
- 自分の家族に神殿について家庭のタペでレッスンする。
- 神殿再奉獻が無事に行えるようにお祈りをする。
- ミニスタリングの担当先がファミリーサーチを使えるように助ける。
- 断食をする。神殿推薦状をもらう。
- 世界の神殿を調べてみる。
- モルモン書を読み終える。

チャレンジリスト。ユースが霊的、知的、身体的、社会的の4つの目標を記入するための用紙を作成、各ステークで青少年に取り組んでもらった。



関東地区のコースと指導者から、神殿と自分が写った写真を募集し作成したモザイクアート

この特別な責任のおかげで私は神殿をいつも近くに感じることが出来ました。コロナウイルスの影響によって教会すらも閉鎖されるという状況の中、この責任を通してとても素晴らしい兄弟姉妹たちに恵まれ、ZOOMで共に集い、神殿や青少年たちについて話し合うことが出来たのは本当に私たちの夫婦の信仰を強め、また育んでくれたと強く感じています。

神殿再奉献の日付が近づくと同時に色々な変更があり、青少年のためのオープンハウスを開くことになりました。戸惑いともどかしさの中、すぐに気持ちを切り替えてチーム一丸となって、急ピッチで計画を立て直し、オープンハウスを迎えることができました。無事に終わって振り返って観た時にチームの皆が疲れているにも関わらず、物凄く喜びに満ち溢れた顔をしていました。それを見た時に、本当にこのプログラムが主によって計画された特別なプログラムであったことを改めて感じる事ができ、それと同時に御霊を強く感じる事ができました。神殿は確かに主の宮であって、神殿に行く時確かに主を近くに感じることができると心から証します。

宮城 成歩滝

神殿結婚をして間もなくこの召しをいただいたので、初めて夫婦と一緒に奉仕をするという特別な機会となりました。再奉献の日付がいつになるかわからないという、先が見えない状況の中で活動を計画することは正直難しいと感じることも多く、どうしたらいいのか分からない時がほとんどでした。その中でも主の御心を求め、祈り続けたことはわたしの信仰を強める特別な経験となりました。ユースディボーショナルの中止の連絡を聞いた時に、本当に残念な気持ちでいっぱいになりましたが、意外にも素直にそれが主の計画なんだと受け入れることができました。

青少年のためのオープンハウスが行われると聞いた時に、なんて素晴らしいんだろう！と思いました。青少年が神殿の中に入り、そして青少年が神殿の中を案内している姿を想像するだけで、本当にわくわくした気持ちと感動する気持ちになりました。実際のオープンハウスもその通りになりました。青少年とその家族が、神殿の中でイエス・キリストとの特別なつながりを感じることでできる機会を提供できてとても良かったです。

宮城 愛弓

神殿再奉献の為にユースディボーショナル委員に召された時、自分なんかかふさわしいのかとたくさん考えました。本当に私のことが必要なのか、何かの間違いなのかとたくさん悩み、考え、祈りました。結果、自分はここに居ていいんだと感ずることができました。ユースディボーショナル委員に召されても、いつ再奉献されるかわからない状況で見通しがもてない状態でした。その中でユースディボーショナルが中止。よりお先真っ暗な状態になりました。けれどもユースのためのオープンハウスの計画を委員会メンバーとユース、指導者で行うたびにこのプログラムが必要で再奉献に欠かせないプログラムと認識することができました。ユースとオープンハウスの奉仕をしている時たくさんの御霊や証を感じることができました。自分が様々な悩みを抱えている中で、ユースの純粋な信仰と証を聞くことができ自分の成長に必要であったこと、そして神様は何かの役目を僕にくださったことを感じることができました。

伝道を考えている今、少しでも決意が固まったこと、たくさんの愛や祝福を感じることができました。神殿は日の栄えのような、みんなが集まって再開することができる素晴らしい場所です。そして地上で神様を1番近くに感じら



2022年3月13日（日）東京神殿別館にてラズバンド長老夫妻を迎えてユースのためのファイヤサイド

れる場所だということが分かりました。また再奉献式で日の栄えの部屋で儀式を見ることができ、貴重な機会をいただけたことは本当に祝福でした。自分の力では出来ないことを委員会メンバー、ユースと奉仕できたことに感謝しています。自分の基となったこの機会、一生忘れません。本当にありがとうございました。

蘆川 裕太

このユースディポーションナル委員を経て、様々な経験を得ることができ本当に感謝しています。

私は当初、横浜ステーキにてこの委員会メンバーに任命され奉仕を行っていたのですが、神殿の再奉献の日程が決まる前に三重県に引っ越すこととなりました。引っ越して距離が遠くなってからも委員会として携わることとなったのですが、新しいステーキでの召しや責任との兼任、また新しい環境に適応することへの疲れ、再奉献の日程が発表されず先行きが見えない中での準備など、難しい状況が重なり、多くの試練があったように感じます。その中でも主の助けがあり、委員会をやり遂げることが出来ました。主が確かに私たちの為に道を備えてくれているということへの証が深まりました。

結果として計画していたディポーションナルは行われませんでしたが、青少年のオープンハウスを行えたことにより、青少年が「いつか日の栄えの部屋にまた入りたい」という望みを持つ瞬間を見ることができたのは、本当に祝福でした。この委員会に携われたことに心から感謝します。

田中 奏太

準備をしている時は奉仕をしてくれるユースが多くて当日ツアーに参加してくれる人はそんなにこないのではないかと心配していました。蓋を開けてみればとてもたくさんのユースが来てくれました。ユースたちの強い信仰に圧倒されました。また奉仕をしてくれたユースたちもとても楽しそうにしていました。今回のオープンハウスは私たち委員会にとっても、奉仕や参加をしてくれた指導者や、ユースにとってもみんなの祝福になりました。主があの方にいてくださって祝福してくださっていたことを証します。また神殿が主の宮であることを証します。

逢坂 理基

この責任は個人的にもとても意味のある時期に与えられました。伝道から帰ってきて、自分の霊性を保つことの難しさを感じていた時でした。

私がバプテスマを受けたきっかけは、アメリカで神殿の奉献式にユースとして参加したことでした。神殿が何か、福音が何かも分からなかった高校生の私が感じた御霊を、今でも忘れられません。

そして今回は青少年が神殿に関わるのを助ける責任だったため、自分の経験をよく思い出す機会となりました。青少年は特別です。環境は目まぐるしく変わったり、大人すら経験しない試練も経験したり、自分の価値に疑問を持ったりします。その時期に得た証は、自分の中で信仰の芯となります。辛い時いつでも戻ってこられる、そんな証を青少年たちがこのオープンハウスで得られたらと祈っています。



ユースディポーションナルの Instagram アカウント

責任を受けている中で結婚したので、夫婦として一緒に受けた初めての責任にもなりました。本当にこの素晴らしい機会を与えてくださり、主に感謝しています。

逢坂 レナ

ユースディボーショナル委員として約一年半働いて、そしてユースのために東京神殿の再奉献に関わることができて本当に良かったです。コロナの影響で再奉献までに時間がかかりましたが、再奉献までの間、委員会のメンバー、そして青少年と再奉献のために共に霊的に準備することができて本当に良かったです。特に妻のダニカは日本に来てまだ数年しか経っておらず、日本で何か奉仕できる機会がないか考えていた時に、このユースディボーショナル委員の機会が与えられたので今回ダニカと共に奉仕をすることができてとても嬉しかったです。

この責任を通して感じたことは、神様が私たちを含め青少年を愛しておられることです。青少年の時に経験し、そしてその時に得た証は人生の中でかけがえのないものとなります。今回はユースディボーショナルの中止によってオープンハウスを通して青少年を助けることになりましたが、少しでも青少年が神殿を通して神様の愛を感じる助けができたかなと思っています。

再奉献後、妻と共に東京神殿に参入する機会がありました。とても御霊に溢れる特別な時間となり、自分たちがユースディボーショナル委員として行った奉仕について思い出す良い機会となりました。本当に今回の奉仕に感謝します。一生忘れられない特別な時間を過ごすことができました。神様が青少年のことを愛していて神殿を用意してくださったこと、神殿が主の宮であることを証します。

マクガリー ダン

夫が青柳兄弟からお電話をいただいた時のことをはっきりと覚えています。ユースディボーショナル委員会の一員としてアサインメントを依頼され、私はとても嬉しく思いました。そしてその同じアサインメントが私にも与えられると聞いたとき、私はとても驚きました。私は日本人ではないし、日本での滞在も短かったので、このアサインメントには不十分と感じたからです。でも青少年を助け、また青少年と委員会のメンバーから学ぶことができればという望みを持って、引き受けました。

パンデミックのため、全てのミーティングはZoomで行われました。ユースディボーショナルを計画するにあたり、バーチャルであっても御霊を強く感じ、導きがあったことに感謝しています。同じ委員会のメンバーの証を聞いて、私の証も強められました。彼らは皆、霊を鼓舞してくれる良い模範です。彼らと共に奉仕することで、より霊的な視点を持つことができました。

また青少年と彼らの霊的なインスピレーションを受けたアイデアにも感謝しています。ユースディボーショナルは中止となってしまいましたが、青少年は特別な存在であり、

彼らが東京神殿オープンハウスに関わることは必要だったと私たちは信じています。様々な担当にボランティアで参加してくれた青少年は本当に多く、彼らの献身と進んで奉仕をしようとする姿を見て、心に大きな喜びを感じました。彼らが人々をキリストに導き、聖なる神殿の儀式を受けられるよう末日に必要とする天父の勇敢な子供たちであることを知っています。彼らの奉仕は、全ての主の子供たちに対する天父の愛を感じる助けとなりました。

このアサインメントを通じて、違うワードやステークのたくさんの素晴らしい人々に出会うことができたことに感謝しています。また、たゆまぬ努力で私が話し合いを理解できるように助け、私のメッセージを英語から日本語にして届けてくれた通訳委員会からも愛を感じました。

またこのアサインメントのおかげで、夫と私が東京神殿の再奉献式に出席できたことにもとても感謝しています。あの素晴らしい瞬間は私たちの心に永遠に刻まれ、このストーリーは子孫へと語り継がれるでしょう。このアサインメントは、私が神殿に目を向ける助けとなり、4歳の娘にも同じ影響を与えてくれました。娘が神殿の重要性について知識と理解を得たことに感謝していますし、「神殿を通して家族は永遠に結ばれる」という娘の言葉を繰り返して伝えたいと思います。神殿に行くといつも、子どもたちや子孫が全ての聖なる神殿儀式を受けられるようにと、強い望みと希望が湧いてきます。神殿が皆に永遠の喜びをもたらす主の家であることを知っています。そして再奉献の際の、ジム・ラスバンド長老のメッセージの通り、私も「神殿があることを、日本の山々が喜び叫ぶ」と証します。イエス・キリストの御名によって、アーメン。

マクガリー ダニカ

1年半の長い委員会だったけどその分神殿のことをたくさん考える時間がありました。神殿が前よりも身近に感じるようになり、神殿の大切さをすごく知ることが出来ました。また、色々な人と会う機会、話を聞く機会が沢山ありました。

神殿は本当に外の世界での喧騒を忘れさせてくれて、主を近く感じることができました。奉献式ではもちろん感じだし、委員会の活動のために別館に来る時、委員会のために働いている時、いつも悩みを忘れることが出来ました。神殿の力はほんとに偉大で真実であると知っています。神殿が本当に神の宮であることを証します。

百瀬 理菜

まず率直にディボーショナルのために準備して来た中で中止になってしまったのは悔しいというか悲しいというか残念というか…。沢山準備して来た訳ではないですが、自分たちで何も創り出せなかったことは悔しいです。でも奉献式に参加した時にとても霊的な気持ちを感じて、神殿が再び奉献されたこと、これが最も大切なことで最も感謝すべきことだと感じました。また奉献式に向けてオープンハ

ウス等の活動に携わる中で本当に神殿が大切な場所であってみんなが待ち望んでいるんだと知る機会が与えられたことに感謝したいです。また委員会を通じてあまり関わることがなかった他のステークの人とも仲良くなれたことに感謝しています。神様は一人一人を大事に思ってくれているのだと証します。残念に思われる時があるかもしれませんが、祝福は最後にとって置かれるのだと思います。この証をイエスキリストの御名によって証します。アーメン。

早川 祐太朗

オープンハウスの奉仕をしている時に、別館で何年も会っていなかった従兄弟と叔母を見かけました。とても久しぶりだったので、話しかけられずに一回スルーしてしまったのですが、もう一度見かけた時に、勇気を出して話しかけろという御霊の導きがあったように感じました。そして自分から話しかけて久しぶりに話せました。嬉しかったです。他にも良い気持ちを沢山感じられて、とても良い経験になりました。

石井 颯真

聖文を読みながら、すぐ壊されてしまうのが分かっていても自分たちの全財産を捧げて神殿を建設する人たちを沢山見してきました。それほどまでに、神殿で受ける儀式や祝福は大切なものなんだと知って、私は神殿に対する意識が変わりました。この神殿再奉献に、たくさんの素晴らしい方が携わってくださった中で、私もその中のひとりとして活動できたことを、誇らしく思います。

佐々木 ゆりあ

オープンハウス期間での奉仕に参加しました。イエス様が子供と立っている絵画の横が自分の持ち場だったのですが、横から見た時にイエス様が寂しそうな顔をしていて珍しい絵だな、と気になっていました。そこで空いた時間で正面から眺めてみたところ、イエス様が微笑んでいるように見えました。イエス様は、私が主の道を真っ直ぐに歩むときに喜んでくださる、ということ強く感じました。

伊藤 優音

最初は面倒臭いなどかと思って話し合いに参加しないことが多かったけど、後の方に出て、全部出とけばよかった！と後悔してます。友達がたくさんできたし、人生に2度はないであろう経験をさせてもらったことに感謝します。

柿木 雪乃



2022年3月13日（日）東京神殿別館にてラズバンド長老夫妻を迎えてユースのためのファイヤサイド

歴史記録委員会



概要

オープンハウス及び再奉献式の様子、再奉献前の東京神殿の歴史、歴代の東京神殿会長とメイトロンの略歴や証、委員会の概要と証、参加者のエピソードなどを文書と写真を用いて記録。当初、1つの冊子にまとめる予定であったが、2022年9月頃からガイドラインが新しくなり、データにてソルトレイク本部へ提出することになった。歴史記録を作成するにあたり、すべての世代の人が読むことを想定しつつも、特に若い世代に向けて作成した。

メンバー

委員長：

慶久 花梨（千葉ステーキ長生ワード）
村上 悠平（松戸ステーキ松戸第二ワード）

執筆チーム：

泉谷 輝（東京西ステーキ町田ワード）
富田 英志（東京西ステーキ多摩ワード）
小和田 愛奈（横浜ステーキ山手ワード）

デザインチーム：

小山 拓真（東京ステーキ所沢ワード）
糸原 愛美（山口地方部山口支部）
白木 真実（横浜ステーキ山手ワード）

カメラマンリーダー：

須田 幸之祐（東京ステーキ所沢ワード）

神殿は私にとって以前から儀式を受ける場所であり、学びの家であり、教会の友人と出会い元気をもろう場所でした。しかし、今回歴史記録委員会として活動することを通して神殿は以前と変わらず天から力を受ける場であるとともに、主の御業のために奉仕をし時間を捧げ、何かを与える場であることに改めて気づかされました。歴史記録委員会の役割を果たす中で、東京神殿再奉献委員会のメンバーをはじめ東京神殿再奉献式とオープンハウスのために奉仕する人々の様々な働きを目にする機会に多く恵まれました。彼らの姿はまさに、東京神殿の奉献の際に奉仕した人々と同じもののように感じました。また、その信仰と奉仕の精神が今回のオープンハウスや再奉献式で奉仕したユースやYAなどの若い世代にも受け継がれているのを見るときに、まさに過去、現在、そして未来へわたって主の御業が進められていることを感じることができました。私自身も記録に残すのみにとどまらず、この奉仕の精神を受け継ぎたいと強く思っています。

新型コロナウイルスの影響をはじめ、様々な問題やイレギュラーの多い状況の中でも素晴らしい委員会メンバーや様々な方の助けにより、また天の助けによって無事に歴史記録委員会の役割を果たすことができたことに感謝します。

村上 悠平

東京神殿再奉献委員会で、唯一 YSA 世代の委員長としてアサインされたのはこの歴史記録委員会でした。コーディネーターの眞真ご夫妻が、特に若い世代が神殿へ心向けられるようにという思いがあったからだと思っています。

まだ再奉献の日程も決まっていなかった頃、私は歴代の神殿会長とメイトロンたちに略歴や証を寄稿していただく連絡をし始めました。私にとって、彼らは雲の上のような存在で連絡をするだけでも緊張しました。しかし、連絡を取るにつれて、彼らが非常に謙遜で、仕える人々だということがわかりました。神殿会長という大きな召しを受けられる時に驚きと恐れがあったということ、神殿へ奉仕に来られる方々から神殿会長たち自身が励ましを受けたことなどを知りました。

再奉献の日程が決まってから、コーディネーターをはじめ、委員会の方々の「心を尽くし、勢力と意思と力を尽くして」(教義と聖約 59:5) 働く姿を間近で見る機会がありました。難しい状況であっても、朗らかな態度で、最善を尽くし、主を信頼する姿は、まるでアルマの民のようでした。(モーサヤ 24:15)。

再奉献が終わってから、参加者の方々から個別のエピソードを募集しました。その1つ1つのエピソードを読む時に、主の御手が確かに一人一人に差し伸べられており、今も変わらない「奇跡の神」(モルモン 9:19) だと感じました。

たくさんの聖徒の模範と主の深い愛に心から感謝しています。この歴史記録を通して、今の私たちの世代から、さらに若い世代へと証が受け継がれていくことを祈っています。

慶久 花梨



2021年5月15日神殿別館での下見



7

証集



「この神聖な建物は、
窮乏の時代にも繁栄の時代にも建造され、
守られてきました。
これらの神殿が、大勢の人々の力強い信仰の所産です。
彼らは、生ける神と復活された
主への証を持った人々なのです。」
(ゴードン・B・ヒンクレー「なぜ神殿を」
『リアホナ』2010年10月号、27)

オープンハウス、再奉献、奉献後の神殿に関わる
個人のエピソードや証。

私は、このオープンハウスで宣教師として働く機会に心から感謝しています。本当にこの期間は、何にも代えがたい期間でした。多くの人と出会い、彼らが神殿に行くまでの導入部分を私たち姉妹宣教師は担当しましたが、神殿に入るまでに霊的に高められてもらいたいという思いでした。

本当に神殿はすべてを繋ぐ場所であると、何度とビデオルームにいた私は強く感じました。先祖と私たちを繋ぐ、家族と私たちを繋ぐ、友人と私たちを繋ぐ、私たちと神様を繋ぐ、神殿はすべてを繋ぐ場所だと御霊を通して感じた3週間でした。

また、神殿の前で、チラシ配りをしましたが、神殿の力を強く感じた瞬間でした。私たちがいつも行うストーリーティングとは全く異なる経験でした。オープンハウスは終わりましたが、伝道活動でも常に神殿を近くに感じながら伝道できたらなと思いました。

麻布ワード渋谷 YSA グループ
小山 ちひろ



私は自分の家族と、その時までバプテスマをうけていなかった姪と東京神殿オープンハウスに行きました。オープンハウスのツアーの中で案内役の方が飾られている絵の紹介をしてくださった時『イエス・キリストの背景に稲穂が描かれています。稲穂の絵は日本ならではの、イエス・キリストが日本の人々を愛しておられることを、この絵から感じることができます』と言っていたのが印象に残りました。

再奉献された東京神殿のいたるところに日本らしさを感じる装飾がありました。

翌月、オープンハウスと一緒にいった姪のバプテスマ会が行われました。姪が『私は東京神殿のオープンハウスに行ってきました。バプテスマフォントを見たとき、私もバプテスマをうけたいなと思いました。また神殿にいきたいです』というような証をしていて、それを聞いたとき、姪をオープンハウスにつれて行って本当に良かったと感じました。

現在建設中の沖縄神殿も入れると日本に神殿が4つあり、通える場所に神殿があるということは神様の愛の表れだと感じます。

静岡ステーキ静岡ワード
松永 麻奈



家族6人で東京神殿のオープンハウスに行きました。このことは我が家にとっては本当に大切なことだったのです。

42年前の東京神殿オープンハウスの前日夜に突然父が

「明日東京神殿のオープンハウスに行くぞ!」と言って父、兄、私、弟の4人で行った時に私が感じた気持ちを、今度は自分とその妻と子どもたちと一緒に感じる機会があったのです。札幌神殿のオープンハウスにも行きましたが、その記憶がまだ残っている我が家の子たちも少し大きくなって、また行く機会があったのはとてもよかったと思っています。全員、行きたいという気持ちがあり、そこに入ることができたのです。私にとって42年前の記憶にも残っているバプテスマフォント、結び固めの部屋など、そこに家族で入ることができたのです。

先祖に心に向け、先祖のお墓参りをして帰ってくることができたのは本当によい時間となりました。亡き父との神殿での思い出はあまりありませんが、オープンハウスを通して思い出す機会があったことに感謝しています。

本当に、神殿が家族を強め、先祖と子孫を結ぶ大切な場所であると証します。

ステーキの青少年と新 YSA、そして名古屋地区の YSA たち総勢 80 名でバス 2 台でオープンハウスに行きました。青少年が神殿にバスで行くのは本当に久しぶりのことでした。

活発な青少年も、しばらく来られていなかった青少年も、また YSA も神殿に入ることができるこの機会に青少年の指導者たちが丁寧に時間をかけて、お招きくださり、本当に



多くの青少年とともにオープンハウスに入ることができました。また彼らの中にはこの機会に学校の友達を招待した人もいます。この機会に福音を宣べ伝えることを自然にできる本当に神様が特別に備えられた世代と感じています。

彼らは、変わったバプテスマフォントを見て、身代わりのバプテスマを受けたい気持ちを思い出しました。見たことがないいくつかの部屋に入り、本当にまだ知らぬ神殿の儀式について考える時間となりました。結び固めの部屋では夫婦として家族として結ばれることを知り、対面鏡を通して、永遠と言うことに少し何かを感じたようでした。青少年とYSAの姉妹たちの多くは花嫁の部屋や結び固めの部屋を通して、神殿結婚に対する思いを強められました。日の栄の部屋を通して神様に近づくことの意味を少し理解したのかもしれませんが。彼らは本当に神殿を通して喜びを感じる機会がありました。

彼らと共に神殿に入り、私たちも強められる機会があったことに感謝しています。神殿に参入することで彼らの霊が強められていく様を感じる機会があったことに感謝しています。神殿が近くにある時に、若人たちの守り手となります。神殿が確かに主と宮であると証します。

6/8に家族とまた妻の教え子と入り、6/11に青少年/YSAとまた1名の青少年の友達と入ってそれぞれ喜びを感じていましたが、自分が誰かをもっと熱心に招くことができていると感じていました。長女も同じように感じていたことを知り、たまたま仕事のスケジュールが何

も入っていなかったのが最後の金曜日に休むことにして、長女と二人でそれぞれ友人を招き、東京神殿に行く機会がありました。うまく表現できたかどうか分かりませんが、私は高校の同級生と1学年上の先輩と共に入ることができました。福音を分かち合うには本当にとてもよい方法であるとうまく理解できましたことに感謝しています。

また、私が伝道に出る前のビショップであった大阪の大林兄弟との再会もあり、写真を一緒に撮りました。娘を待っていた時には、井上龍一兄弟と別館の廊下でお会いし、亡き父母について、神殿に対して思いを向けていたことをお話していただきました。娘も合流し写真を共に撮りました。

この機会を通して、亡き父母のことを知っている方々も年を取られ、今のうちにいろんな両親との思い出話をお聞きし、ファミリーツリーアプリに記録として残しておかねばならないと感じています。先祖の探求も必要としていますが、この両親の記録を残しておく大切さを思い出させてくれた機会に感謝しています。神殿が先祖と子孫を繋ぐことを儀式を通して行っているだけでなく、そのことをとてもよく思い起こさせてくれる場所であると感じています。

神殿が、私たちにと与えられた特別な場所であることを証します。

名古屋東ステーキ瀬戸ワード

名古屋東ステーキ会長

杉本 浩彰





この日、私は朝から色々な奉仕をする予定になっており
ました。私にとってのボランティア最終日に初めてツアー
ガイドを割り振られて、朝から緊張していたのを覚えてお
ります。何故、ツアーガイドなのか、どなたか他にも適任
の方が沢山おられるのに、どうしたものかと不安を感じな
がら、礼拝堂で順番を待っておりました。ツアーガイドの
予定は2時間ほどで、2回ツアーを回れば終わるとわかり、
主にお任せするつもりで引き受けることにしました。

一回目のツアーを終えた時、不安は解消され、次のツアー
の為に礼拝堂に戻りました。次のツアーは車椅子の方のフォ
ローを頼まれました。少し離れたところに車椅子を押して
おられる方を見た時に、同じワードのご家族だと気がつき
ました。車椅子に乗っておられる姉妹は大病を患い、ワー
ドに転入されてから教会に集うことは中々叶わない状況で
した。同じワードでも姉妹の顔を知っておられる方は本当
に少なく、私はたまたま扶助協会の責任で、そのご家族の
状況を知る機会があり、お顔を拝見した時に気がつきまし
た。

姉妹の病状を知っていた私にとって、その場にそのご家
族がいらしているのが、正に奇跡的なことだと感じました。
ご家族だけでゆっくり回る方がいいだろうと、本当に小さ
なグループになり神殿の中をツアーし始めました。パプテ
スマフォント、花嫁の部屋、日の栄えの部屋、結び固めの
部屋…とゆっくり回りながら、その時々で、車椅子の上か
ら姉妹が伝えたいことがある様子がわかりました。一緒に
ツアーを回る姉妹の娘に神殿の祝福を分かち合う為に何度
もメッセージを分かち合ってくださいました。車椅子に座
りながら、身体は病と闘いながら、その姉妹はどんなに大
変な中でも、神殿で結び固められる祝福と喜びを分かち合
う姿を見て、涙が溢れてしまいました。どんな状況でも姉
妹が母親として、子ども達に証を分かち合う姿は、同じ母
親である私には何より励まされ、力づけられるひとときだっ
たのを覚えております。

その日何故私がツアーガイドになったのか？と朝感じた
疑問はこのご家族と一緒に回る為だったのだと改めて知り
ました。

東京ステーキ浦和ワード
興津 留美

事や育児の合間をぬって、あるいは仕事を休んで朝早くか
ら夜遅くまで参加してくださいました。この世の網を置き、
すぐに主に従ったペテロのような信仰に心打たれ、お一人
お一人の奉仕が、主への聖い捧げ物と感じました。

千葉ステーキの担当の初日は5月31日、SVIP（特別待
遇の招待者）とオピニオンリーダー向けの日でした。その
日初めて顔を合わせたメンバーが30分くらいの打合せで、
リハーサルなしで大切なお客様をお迎えするのです。主の
民への主の愛と信頼の深さを改めて思いました。

ボランティアを終えた方に「どうでしたか？」とお尋ね
すると「楽しかった」「素晴らしかった」と顔を輝かせて答
えてくださいます。神殿別館ではご友人を案内している教
会員とすれ違うことが多かったのですが、皆誇らしい様子
で神殿と教会について説明されているご様子で、アイリン
グ管長の預言の成就をみる思いでした。

『わたしには、主が日本において、教会を劇的な方法でお
建てになり、発展へと導かれるという証があります。・・・
その奇跡は、日本の教会員の心に大きな変化が生じると言
う形で起こります。・・・日本の教会員が職場の同僚や近所
の人たちに教会について話す特権について考える日がやっ
てきます。皆さんの子供たちは、あなたが今見ている日本
とは違う日本で生きることになります。なぜなら、教会が
驚くべき発展を遂げ始めるからです。教会は傑出した存在
になり、人々は教会について知りたいと思うようになります。
彼らは興味を持ち、やってきます。』

皆さんの子供たちは、イエス・キリストについて証する
ことを恥ずかしく感じる事のない学校や地域社会で育ち
ます。彼らは自分たちが末日聖徒であることを、一緒に学
校に行く友達や、また先生にさえ喜んで伝えるでしょう。
彼らは恐れません。・・・』

オープンハウス終了後も奇跡は続いています。お招きし
た親戚の方から先祖の儀式の許可をいただいた、知人が参
加されて先祖の探求に興味を持たれた、遠くから招いたお
母様が神殿に感銘を受け、ずっとその話をされていたなど、
たくさんのお話を伺っています。

美しく神聖な東京神殿を間近にいただき、この地でさら
に神様のみ業が力強く行われることでしょう。このみ業が
真実であることを証し、すべてをイエス・キリストの尊い
お名前によって証いたします。

千葉ステーキ浦安ワード
山下 博・由利子



東京神殿再奉獻に先立ち、東京神殿のオープンハウスが
実に42年ぶりに行われました。一般公開は6月3日～6
月18日でしたが、それに先立ち、建築関係、近隣、招待
客向け等々への公開も行われました。平日でも連日200名
以上のメンバーがボランティアに駆けつけてくださり、家

5月28日(土)から始まった東京神殿のオープンハウス
が、6月18日(土)に無事に終わりました。この期間内に
約19,200名の方がオープンハウスに参入し、ボランティ
アとしては延べ4,000人以上の方が奉仕をして下さいまし
た。ボランティア募集当初、ボランティアの人数が不足し

ている状況がありましたが、再度の声掛けにより多数の方がボランティアに参加して下さり、まさに天の軍勢が応援に来て下さったかと思うような奇跡が起きました。また、ボランティアには関東だけではなく東北や北海道など全国から奉仕に来て下さった方もおられ、骨身を惜しまず献身的に働くボランティアの方々は天使のように見え、感謝の気持ちで一杯でした。

また、オープンハウスに参入して下さった方は、東京神殿のオープンハウスを待ち望んでいた教会員の方はもちろんのこと、教会から足が遠のいていた方、教会員ではない方や教会員のご友人、近所の方、通りすがりの方までオープンハウスに来てくださったことなど、たくさんの奇跡がありました。30年ほど前にご夫婦で東京神殿で結び固めをされ、会員ではない息子さんと結び固めの部屋と一緒に入っておられたご夫婦は、息子さんが「両親が永遠の結び固めをした部屋を見てみたかった」という言葉を聞いて感無量のご様子でした。参入した方お一人おひとりが東京神殿への厚い思いを抱き、それぞれの物語を抱えて神殿に参入し、そして神殿を後にする際には皆さん笑顔で帰られていたのは本当に素晴らしい光景でした。

そして、7月3日(日)には日本の全ての教会員が心待ちにしていた東京神殿の再奉献式が行われました。恵まれて神殿内でのアッシャーの責任を頂き、3つのセッション併せて約1,800名の方が再奉献式に参加する姿を見ることができました。ゲーリー・E・スティーンソン長老の司会により始まり、ヘンリー・B・アイリング管長の奉献の祈りにより終わった再奉献式では、自分自身が神殿への思いを新たにし、これから先祖の探求を熱心に行い、神殿で行われる主の業に多くの時間を使いたいと決意する機会となりました。

ラッセル・M・ネルソン大管長は、2022年の総大会で

「霊的推進力は、神殿で礼拝し、そこで受ける祝福がどれほど幅広く、深いものであるか、理解を深めることで増していきます。神殿の永遠の祝福に焦点を合わせることで、この世的な方法に抵抗するようお願いいたします。神殿の皆さんの時間が、永遠にわたる祝福をもたらします」とおっしゃっていました。

この度のオープンハウスと再奉献式の機会により、幕の両側にいるすべての方々との永遠の祝福に思いを馳せ、そして天のお父様や愛する人たちと永遠に共に住むことに力を注ぎたいと思いを新たにしました。この御業が真実であることを心から証します。イエス・キリストに御名を通して証します。

千葉ステーキ浦安ワード

辻元 基・恵美子



オープンハウスの最終日の最後のツアーに参加されたグループが、私の集っているワードの家族でした。現在、両親は教会に通われていますが、子どもたちは成人した頃から、日曜日の集いに顔を見せることが少なくなり、次第にお休み会員となりました。3人いる子どもたちはみんな私と年が近いこともあり、みんなプライマリーや青少年の時代を共に過ごしていた仲間でした。

当日は両親と2人の子供が参加されました。当日予約されていることを知らなかったのも、久しぶりに会ったときに驚きながらも彼らを歓迎し、彼らが神殿に足を運ぶという選択に、熱い思いと喜びを感じました。教会に活発でなくても、近況を聞いたり、彼らと話すとき教会に通っていた頃と変わらず、優しく、親しみのある大人になっている



ことがわかり、安心を感じました。

彼らが神殿から戻り、ビジターセンターに戻ってきたときに、神殿内部のパナーがあるところで写真を撮るお手伝いをしました。数十分前の彼らと姿は同じでしたが、何か違うことに気づきました。彼らが、自然な笑顔になっていて、家族として、まとまりというか一致しているように感じました。その姿を見たとき、御父と主が彼らを愛しておられることを感じました。そして、天では彼らの計画があり、それが目の前で進んでいると感じました。

私たちのこの地上での経験は一人ひとり異なり、天の御父が私たち人類に選択の自由を与え、天の父母のもとに戻るために必要な試練や経験をすることをお許しになっていることに感謝しています。そして、私たちが彼の愛と憐れみを必要とすることを知っているため、救い主を用意され、愛を示してくださっていることを感じました。教会に活発であるかないかに関わらず、ただ主の御心が行われるように、私たちが隣人に愛を示し、福音の喜びを伝え続けたいと改めて決意する貴重な経験となりました。

東京ステーキ所沢ワード
須田 幸之祐



6月に東京神殿でオープンハウスがあり、私は恵まれて家族と参加する機会がありました。5年ぶりに入る神殿の中は新鮮で、特別な気持ちを感じました。また、神殿が再奉献されるにあたり、私は子どもの頃を思い出しました。

東京神殿が建てられると発表された時期、わが家は諸事情で出費が重なり、生活はかつかつだったようです。しかし、東京神殿は、何を売ってでも絶対建ってほしいという気持ちがあり、どんなものを手に入れるより東京神殿が与えられるという喜びのほうが大きかったようです。その為、もっている貯金をすべて下ろし、貯金では賅いきれないので、保険を解約して将来の為の積み立てをすべて東京神殿の献金にまわしたようです。しかし、私は子供心に、自分の家族が貧しいという気持ちはありませんでした。私の家には、テレビ台はありましたが、テレビがありませんでした。家には駐車場はあったものの車もありませんでした。自転車は、双子のゆきと使いまわしていました。しかし、家の中には平安があり、父が好きだった音楽がいつも家庭の中にありました。

トーマス・S・モンソン大管長は、このように言われています。「神殿に入ると、ある種の霊性がもたらされ、人の心に感じられるいかなる感情よりも崇高な平安を感じることができます。救い主が語られた次の御言葉の真の意味が理解できます。『わたしの平安をあなたがたに与える。……あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな』そのような平安は、問題を抱えている心、悲しみに打ちひしがれている心、困惑している心、必死で助けを求めている心など、どんな

心をも満たします。』

神殿を中心に生活する時に、どんな辛い状況があるにせよ、私達の中に平安がもたらされます。私は、それを、先祖が私達にもたらしてくれる祝福だと感じています。

今回の東京神殿のオープンハウスで、私はある特別な経験をしました。私が青少年の頃、尊敬していたあるビショップの話を見せて頂きたいと思います。彼のことをA兄弟と呼ばせて頂きます。A兄弟は、私が青少年の時、ビショップ室に私達青少年を招き、毎月一回、ご馳走をしてくださいました。ご馳走といっても、ご馳走と呼べるものではなく、パンとレタスがあって、そのレタスをマヨネーズにつけて食べるくらいな感じでしたが、私達は、ビショップのA兄弟にいろんなことを話しました。教会のことだけではなく、学校のことや個人のことにについても話しました。彼は、青少年の良き理解者でした。

私が高校を卒業して1年ほどたって、私はA兄弟に伝道に行くことを伝えたことがありました。しかし、それは正しくない目的によるものでした。彼は、私が心を改めて伝道に行くことが出来るよう、私にあるチャレンジを与えました。それは、半年の間に3大聖典をすべて読むこと、インスティテュートのクラスに参加すること、そして、毎週一回宣教師と行動することでした。また、私がそれをできるようフォローアップしてくれました。

半年後、与えられたチャレンジを達したことをA兄弟に伝えた時、彼は、心から喜んでくれました。私は彼からのチャ



レンジを行うことにより、伝道に対する自分の心を改めることができました。

伝道に出てから、A 兄弟より定期的に手紙をもらいました。彼は、私が伝道中にビショップを解任されたのですが、解任されてからも引き続き手紙を送ってきてくれました。宣教師が終わる 3 ヶ月前にも、家族と一緒に映っているメッセージ付きのポストカードを送ってくれました。

私が伝道を終えて最初の日曜日に私のホームワードで証をしました。しかし、そこには、彼と彼の家族の姿はありませんでした。後に父が私にこう言いました。彼は、教会を去ったと。彼は、青少年の時に、私達をいつも理解し、励まし助けてくれました。伝道出る時に、私の心を改めてくれました。彼は私に対して色々なことをしてくれたのに、私は彼に何もできませんでした。無力感で非常に悔しい思いがありました。

それから、15 年ほど経ち、あることがきっかけで Facebook で繋がりました。私は彼に、「私にとって A 兄弟はずっとビショップのままです」と伝え、更に、彼が今まで私にしてくれたことに対する感謝を伝えました。A 兄弟からは、「長い間続け、血となり心のかげまで流れ培った教会への良い思いはそんなに簡単には消えませんが、教会に戻る気持ちになれない」というお返事をいただきました。彼の心の片隅にでも教会の事が残ってくれていたことは、私にとっては嬉しい気持ちがありました。ただ、彼はもう教会に戻ってくることはないと言う残念な気持ちがありました。

私と同様、青少年の頃に A 兄弟からたくさんのいい影響を受けていたある姉妹がいました。彼女は、A 兄弟に連絡を取り続けていました。彼女が結婚した時、出産した時、コロナが始まった時など、ことあるごとに A 兄弟に連絡をとって、繋がっていました。

そして、オープンハウスが始まった 6 月にも同様に A 兄弟をオープンハウスに誘いました。私は彼女が A 兄弟を誘ったと言う話を聞いた時、彼は来ないのではと感じていました。しかし、彼女の継続した A 兄弟との繋がりにより、彼は東京神殿のオープンハウスの誘いを受け入れました。

A 兄弟が広尾駅についた時、彼は、一度引き返して帰ろうとしたそうです。それは、30 年近く教会から離れていて、自分にはふさわしくないという気持ちがあったからです。ただ、その揺らいだ気持ちも、彼女の電話の一言で変わりました。彼女は電話で気さくにこう言いました。「何やってんのよ。早く来なさいよ。今どこにいるの？そこまで迎えに行くから」そして仲間達に手を引かれ、彼は神殿のオープンハウスに参加することができました。

神殿別館で、A 兄弟をよく知っている年配のある姉妹は、彼を見つけると、「この放蕩息子〜！」と言って、泣きながら彼のことを力いっぱい抱きしめました。

私は、仕事で A 兄弟と一緒にオープンハウスに参加は出来なかったのですが、その後、ご一緒させていただいた食事でその話を聞きました。彼は、広尾駅で迷っていた時に

かけてくれた電話、そして、神殿別館での抱擁、そして神殿そのものに温かみを感じたそうです。彼は教会に対していろいろな思いがあったようですが、その時彼はこう感じたようです。「自分のいるべきところはここなんだ」と。

後日、彼からきた LINE のメッセージにこう書かれていました。「近いうちに戻るよ」と。

ヘンリー・B・アイリング管長は、東京神殿の奉献の祈りの中でこのように言いました。

「何にもまして、この聖なる場所を訪れるすべての人に対する慈愛、キリストの純粋な愛があるよう彼らを祝福してください。」

私は、A 兄弟が神殿を訪れた際、アイリング管長が言われたこのキリストの純粋な愛が A 兄弟に及んだと感じています。スティーブンソン長老はこのように言っています。「イエス・キリストのわたしのもて来なさいという招きは、すべての人に対する招きです。」

A 兄弟を含め、すべての人に主が招きを与えられ、祝福を与えて下さっていることをこの東京神殿のオープンハウス、また、再奉献を通して感じることができました。主が神殿を通して、99 匹の羊だけではなく、いなくなったすべての羊に対して愛と祝福をもたらして下さったことに心より感謝しています。

松戸ステーキ松戸ワード

岡本 康



ツアーガイドの責任を受ける中で様々な方に神殿の紹介をする機会に恵まれました。ガイドの責任を一生懸命果たそうとすると、決められたシナリオの通り、神殿の外形的な説明に集中してしまいがちです。しかし、ガイドの大切な責任の一つは、ツアーに参加する人たちの霊をガイドすることにあると感じました。

ある日、三組のご家族の案内を任されたことがありました。三組のご家族はすべて親戚同士でしたが、その中の一組のご家族のご主人さんだけが教会員ではありませんでした。他の家族は神殿で結び固められていましたが、その一組のご家族だけは、ご主人さんが教会員ではないため、家族の結び固めの儀式は行っていませんでした。結び固めの部屋で説明をしているときに、外形的なガイドではなく、彼らの霊をガイドするべきだと強く感じました。なぜならば、夫婦の結び固めを行っていないご夫婦の奥さんの気持ちをその瞬間に強く感じる事ができたからです。

私は「よろしければ、ご夫婦で祭壇にひざまづいて、お互いの手を取り合って、結び固めの儀式がどのようなものか感じてみませんか？」と伝えました。二人は驚いた表情をして互いの顔を見つめ合いました。すると、ゆっくりとご主人さんが立ち上がり、祭壇にひざまづき、奥さんも続きました。二人が手を握り合うと、子供たちもご両親の手

の上に自分たちの手を重ねました。さらに、他の二組の家族も「私たちも加わりたい」と言って、握り合う手の上に自分たちの手をのせ始めました。しばらくの静寂の後、一人が感動のあまり泣き始め、みんなが涙を拭い始めました。まさに、人々をガイドするツアーから、彼らの霊をガイドするツアーに変わった場面でした。

その三組のご家族の気持ちが一一致し、無言のうちにも、彼らが共通した希望を確信しあった瞬間に立ち会えたのは大きな祝福となりました。

アジア北地域 神殿家族歴史部エリアマネージャー
関口 治



英語を話すツアーガイド

6月3日から18日までの東京神殿オープンハウスの間、東京南ステークの英語ガイドは、毎日午前9時から午後12時、午後12時から午後3時、午後3時から午後6時、午後6時から午後9時までの4回の3時間シフトでした（月曜日は午後6時終了）。各シフトでは、午前10時、午後1時、午後4時、午後7時に英語のツアーが予定されていました。各シフトで奉仕するために、72人のボランティアの方々がいて、オープンハウスの期間中、ひとつのシフトだけ入られたボランティアもいれば複数のシフトに入って下さった方々もいました。ある熱心な姉妹は19回ものシフトに率先して入って下さいました。主の宮居を訪れるゲストの数に応じて、各シフトに4人から6人のツアーガイドを配置し、そのうちの1人がリーダーとして割り当てられていました。ゲストの人数は8人から72人で、1回のツアーの平均人数は38人でした。

フィリピン出身の若い夫婦であるメンデス兄弟姉妹は、6

月4日（土）の午前9時からのシフトにボランティアとして参加しました。私たちがシフトの準備をしていると、フィリピン人の家族が神殿ツアーのためにやってきました。ツアーは日本語と英語しかなかったため、日本語のツアーに参加するものと思っていたそうです。しかし、メンデス兄弟姉妹は自己紹介をし、タガログ語のツアーを案内することを申し出てくれました。また、姉妹宣教師も神殿のオープンハウスの紹介ビデオをタガログ語で用意してくれました。ツアー終了後、メンデス夫妻は、ツアー中、全員が御霊を感じるという祝福を受け、多くの喜びの涙を流したことを伝えてくれました。この神殿のオープンハウスの奇跡は、主がそのご家族とメンデス夫妻を同じ場所に同じ時間にいるように導いてくださったことで起こりました。

また、土曜日の朝には、ラーソン兄弟姉妹がボランティアで神殿ツアーを案内してくれました。シフトの準備をしていると、ブラジルからの会員家族がツアーに参加するために別館の礼拝堂にやってきました。彼らも日本語のツアーに申し込んでいました。ところが、日本語で話をしていると、ポルトガル語でのツアーはないかと質問されました。ラーソン兄弟は、スペイン語圏で宣教師をしていた経験があり、スペイン語とポルトガル語は似ている言語なので、コミュニケーションが取りやすいということで話に加わってくれました。そして、その家族は自分たちが会員であり、若い娘さん2人にぜひポルトガル語のツアーを体験してもらいたいと考えているといことを分かち合ってくれました。ふと、前日に会ったポルトガル語（英語、日本語、スペイン語も）を話す二人の姉妹宣教師を思い出しました。私は彼らに、ポルトガル語で神殿ツアーを案内してもらえないか尋ねました。彼らは、訓練を受けてはいないが、もし私が神殿を案内すれば、ポルトガル語でトーキングポイントを話すことはできると答えてくれました。姉妹宣教師はポルトガル語で神殿オープンハウスの紹介ビデオを見せ、自分たちは与えられた役割にとどまる必要があると説明し、別のボル





トガル語を話す姉妹宣教師を紹介してくれました。田中姉妹は何の準備もしていませんでしたが、私が彼女と若い家族を神殿の部屋へ案内しながら、神殿ツアーの間、ポルトガル語で分かち合ってくれました。父親と母親は、田中姉妹を助けながら、神殿の様子や自分たちの証を詳しく話してくれました。わたしたちは全員がそうでしたが特に若い娘さんたちは、ツアー中ずっと笑顔でした。私はというと、唯一知っているポルトガル語で「オブリガード」、つまり「ありがとう」という言葉を使い続けました。

その後、土曜日には、スペイン語圏の家族とその友人がツアーに参加しました。その際も複数言語を話す姉妹宣教師が、神殿オープンハウスの紹介ビデオをスペイン語で上映し、今回はツアーに同行して、神殿ツアーのトーキングポイントをスペイン語で伝えてくれました。後で知ったことですが、このツアーでも喜びと感謝の涙がたくさんあったそうです。

訪問者の多さと臨時ツアーが入ったことで、私は2度、1人だけで神殿ツアーを案内することになりました。1組はプライマリーの年齢の小さな男の子たちが3人いる教会員の家族でした。男の子たちはとてもよく聞いてくれて、ツアーの間中ニコニコしていました。私は彼らの両親に、自分たちの神殿での経験や、学んだことを分かち合ってくれるようお願いしました。ツアーの最後に結び固めの部屋で座った際、私は子供たち一人一人にどんな気持ちがするか尋ねました。1人は「平安な気持ち」、もう1人は「静かな気持ち」、最後の子は「敬虔な気持ち」と答えました。3人の男の子たちのシンプルな証を聞いて、ご両親と同じように私の目にも涙が浮かびました。

1人だけで案内した2組目のツアーは、母親と、秋からB Y Uアイダホに行く予定の10代の娘さん（8人兄弟の末っ子）でした。私たち3人だけでしたので、ツアーのトーキングポイントについて話し合ったり、10代の娘さんから質問を受けたりする時間がありました。身代わりのバプテ

スマしか受けたことがない彼女は教えの部屋や祭壇の意味、教えを受ける方法や教えの内容に興味を持っていました。通常のトーキングポイントの説明に加えて、母親は自身の経験と証を分かち合いました。娘さんは特に日の栄えの部屋の美しさ、象徴、御霊に感動していました。ツアーの最後に結び固めの部屋に座ったとき、母親が娘さんに神殿の印象を尋ねました。彼女は神殿の様々な場所にあるイエス・キリストの絵画について答えました。母親は、自分も神殿の絵画が大好きだと述べ、イエス・キリストと神殿のことを思い出せるよう、これまで住んできた多くの家（米軍勤務30年で15ヶ所以上）で、全ての部屋にイエス・キリストの絵を飾ってきたと言いました。娘さんはちょっと考えてこう言いました。「お母さん、考えてみたら確かに家の全部の部屋にイエス・キリストの絵が飾ってある！今まで全然気づかなかった！やっと意味がわかった、教えてくれてありがとう！」彼女はまた神殿では時間が止まっているようだったことに触れ、答えを求め、答えを受けるためによく考え、祈るのに「悩みや疑問を持って神殿に行く」教会員の証についてより深く理解ができたと言ってくれました。また神殿で、特に日の栄えの部屋と結び固めの部屋で、天父、イエス様、聖霊を近く感じる事ができたそうです。

大きなグループのツアーの後、神殿の外で4名の女性グループから質問を受け始めました。彼らは長年近隣に住んでいる方々で、神殿の内部と敷地の美しさを褒めてくれました。また神殿の外壁がなくなったことで、通りかかる人がその美しさを見ることができるようになったことに感謝していました。以前の外壁は神殿の外観を隠しており、物質的にも壁になっていましたが、神殿を世間から隠すような見えない壁にもなっていました。神殿のおかげで近所がより美しかったこと、物質的な壁も見えない壁もなくなったことを彼らは喜んでくれました。日曜日の礼拝や、神殿別館での他のイベントへの参加についても尋ねてきました。

神殿&別館の清掃ボランティア

18日間のオープンハウスの間、東京南ステーク（英語）の東京第一ワード、東京第二ワード、麻布ワードからの何百名ものボランティアが、最終のオープンハウスツアーが終了した午後8時半から神殿と別館の清掃をしてくれました。ある兄弟は、日の栄えの部屋に掃除機をかける担当となった特権と、決して忘れない体験に対する深い感謝の気持ちを分かち合ってくれました。

ユースのボランティア

東京南ステーク（英語）からは、靴カバー、神殿別館の礼拝堂の扉の開閉、神殿の扉の開閉、別館のドアの開閉など、6日間で71名、6月10日（金）に26名、6月18日（土）に32名のユースボランティアが助けてくれました。

再奉献のための神殿&別館へ椅子移動のボランティア

神殿再奉献に備え、東京南ステーク（英語）の座間軍人ワード、横田軍人ワード、横須賀軍人ワード、東京第二ワード、東京第一ワード、麻布ワードが、神殿スタッフと神殿委員会と協力しながら、6月25日（土）の朝に200脚の椅子を別館から神殿内へ移動しました。さらに東京第一ワードと東京第二ワードの神権会の兄弟たちが、7月3日（日）の再奉献の中継放送に備え、250脚の椅子を設置／収納しました。

奉献式

ヘンダーソン姉妹と私は、4番の結び固めの部屋で東京神殿再奉献式に参加する機会に恵まれました。神殿会長会第一顧問の野田会長とメイトロン補佐の野田姉妹が1980年10月27日に行われた東京神殿の最初の奉献式に参加したことについて話しました。ヘンダーソン姉妹もその奉献式に出席しています。1980年の奉献式と2022年7月3日の再奉献式の両方に出席した聖徒は数百人しかいなかったと思われます。この2つの歴史的な行事に参加できたことは、なんとという祝福と特権でしょうか。府中ワードの平良姉妹（私たちが府中ワードにいた頃は生まれたばかりでした）は、「他人の良いところを見つけること」と「いつも笑顔でいること」について証と経験を分かち合ってくれました。アイリング会長が奉献の祈りを捧げました。ヘンダーソン姉妹は、地域七十人のサブストローム長老が英語から日本語に同時通訳した祈りの間中、聖霊を強く感じていました。アイリング管長が「アーメン」と言われたとき、私は頭のてっぺんからつま先まで、天のお父様の力を感じました。今この時に、生者と幕の向こうに行った方々のための救いの儀式が行われるよう神殿が主に奉献されたのです。また、天からの力が、尖塔の天使モロナイ像を通して4階の壁や床、3階、2階、1階、地下へと届いているのを想像しました。

この栄光に満ちたイベントは、多くの聖徒が時間と才能を自主的に提供し、神殿を準備し、オープンハウスの間、訪問者の方々とその経験を分かち合うために捧げられた何時間もの奉仕と犠牲の結晶なのです。

東京南ステーク座間軍人ワード
フレッド・ヘンダーソン





教会員（佐藤さちこ姉妹）がお友達（佐藤けいこさん）を東京神殿オープンハウスに連れてきてくれました。オープンハウスのツアーの後、姉妹宣教師のいるレセプションエリアへ移動しました。私たちは彼女たちと話し、神殿の中での彼女の経験を聞きました。次のレッスンで、もう一度、彼女に神殿の中での経験を尋ねました。彼女は、特にバプテスマの部屋が印象的だったと答えました。彼女はエネルギーをその部屋で感じ、それはとても良いものだと思います。そして彼女は、自分もこの部屋で学んだように、清くなりたいと思いました。彼女は現在、2週間後にバプテスマの予定があり、彼女の娘も会員になることを楽しみにしています。

東京ステーキ麻布ワード
マリー・コニシ



私は26年前に浦和ワードで宣教師として働く機会がありました。その時に英会話に来てくださっていたお友達と26年来のお付き合いがあります。私が結婚して浦和ワードのエリアに住む事になりお互いの結婚披露宴にも参加した仲良しのお友達です。

彼女とは子育て中はあまり会えなかったり彼女の旦那様が飲食業を2店舗経営されている事もありお忙しく会えない年もありましたが、ここ何年かは毎年会ってお食事をしたりして近況を話したりしています。彼女は英会話に来ていたので教会には来た事があります。ただ福音についてはあまり興味が無い方です。

私は今回オープンハウスに彼女をお誘いしたいと思い、ずっと祈り続けていました。どのようにアプローチするかよく考えました。私が教会員である夫と結婚した場所で神聖な場所であるとお伝えし、今回オープンハウスでどなたでも参加出来るので行ってみたいかとお誘いしました。お返事を待つ間も祈りました。ドキドキしながら彼女のお返事を見ました。「どんな内容かな？」というお返事でしたので、Web版のオープンハウスの招待状を送りました。彼女は行ってみたいとお返事をくださいました。嬉しかったです。

電車で広尾駅に着いて歩いて行くと、モロナイ像が見えてきました。あの像が見える所だと伝えました。いよいよ別館に着いてオープンハウスが始まりました。最初に見たビデオの時、最前列だったのですが、彼女はじっとビデオを観ていました。神殿に入るとあちこちを見ていました。バプテスマフォントではフォントの下までよく見ていました。更衣室の後ろに見た花嫁の部屋では私に「ここで過ごしたの？」と聞いてきました。礼拝堂、教えの部屋と続き日

の栄えの部屋では静かに瞑想しているようでした。

最後に結び固めの部屋では参加者の皆さんが出た後に、私と一緒に合わせ鏡の前に立ちじっと鏡の中を見られていました。私は後ろの鏡も見てもらいました。彼女は「すごいね」と驚かれています。綺麗な部屋と雰囲気感動しているようでした。私自身もその時に鏡の中をじっと見たのですが永遠を感じました。オープンハウスが終わり外に出ました。

その時に彼女は辻岡姉妹（旧姓前田姉妹）も今日参加するとFacebookで見たと言われました。辻岡姉妹は私が浦和ワードで伝道していた時の同僚です。私は今日参加していると知らなかったのですぐに辻岡姉妹に電話してみました。残念ながら彼女は私達より少し前にオープンハウスを終えて帰路に向かっていました。ただ分かったことは私達が神殿の中にいた時間に辻岡姉妹もいたということでした。私はそのことを電話で知った時に、御霊をととても感じました。主が同じ時に主の宮に仲良しな私達3人を招いてくださっていたのだと感じました。

この日、辻岡姉妹とは会えませんでした。彼女が神殿に儀式を受けに来る時に3人で会おうねと約束しました。主がそのように導いてくださっていると感じました。

後日一緒に参加してくださったお友達からきたメールの中で彼女は私のような一般の人も招待して下さった事が嬉しく、バプテスマフォントと結び固めの部屋が印象的だったと伝えてくれました。彼女のFacebookには私と東京に行ったこと、私が送ったWeb版のオープンハウス招待状が投稿されていてとても驚きました。

その投稿を見た時に私は涙が止まりませんでした。高慢ですが、その時『私はこの為にずっと祈ってきたのだ』と感じました。私は主が私の祈りを聞いてくださったことを証します。私のような小さな者でも主の御手として使わせてくださいと祈り、努力をするならば使っていただけると感じる事ができました。そのことに感謝しています。

神殿が主の宮であることを証します。主が生きておられ私達一人一人を愛し両手を広げて招いておられることを証します。オープンハウスの為に沢山の準備をしてくださり奉仕して下さった素晴らしい兄弟姉妹に感謝しています。イエス・キリストの御名によりアーメン。

東京ステーキ浦和ワード
渡邊 和代



神殿結婚をしたが、途中教会から遠ざかっていた70代の姉妹は、神殿参入にもあまり熱心でなく、膝を痛めていたにも関わらず、神殿ボランティアに名乗りを上げ、1日だけでなく、もう一日追加して奉仕をした。

その後、儀式奉仕者になることを願い、彼女の望み通りに召され、初めて自分のために神殿着を購入した。彼女自身が証を得ただけでなく、死者のために働くという信仰をそばで見る事が出来た。

松戸ステーキ足立ワード
笹本 恵子

今独身者が増えていたり、コロナ禍の中、教会員男性が少なく結婚相手を探すのが困難でしたが、教会員じゃなくても魅力的な人は沢山います。教会員と結婚してもお休みになったら-1になるし、教会員じゃない人が改宗したら+1になります。その人がもし仮に教会をお休みしてもプラマイゼロになります(笑)。

彼と出会わせてくれた神様に感謝しています。誰かしら福音を必要としてる人がいるので周りに目を向けて見るといいかもしれません。この証とお話をイエス・キリストの御名によってアーメン。

神奈川ステーキ港北ワード
瓜生 安愛



あれは5月の夜、私たちが初めてデートをした日に私は彼と共に広尾の神殿に足を踏み入れました。モロナイ象はライトアップされておらず、周りに少し明かりがあるくらいでした。彼はその時私に「心臓の鼓動がなぜか速いんだ」と伝えてくれ、私は彼に「神様があなたのことを歓迎してくれてるんだよ」と伝えました。

その後1連の出来事があった夜に付き合い始め、次の日彼から「実は前に神殿のモロナイ象と滝のところで帰り道の夢を見たことあったんだよね」と教えてくれました。

それから毎週千葉の方から教会に来てくれるようになり、宣教師からレッスンを聞き、7月にバプテスマを受けた彼はその後すぐ家族歴史に取り掛かって30人以上のご先祖さまの儀式を出来るように準備しています。

子供4人を連れて、家族でオープンハウスに参加しました。顔見知りの兄弟姉妹がボランティアとして奉仕してくださっている様子を拝見し、心から感謝の念を持ちました。最初のブースで姉妹宣教師さんとお話する姿は清く尊い印象を受けました。神殿の中を案内してくださった姉妹は同じワードの姉妹で子供たちは親しみをもっていたようです。一番下の子は幼児なので、途中から静かに過ごすことができず親としては気もそぞろに過ごしていましたが、後日案内をしてくださった姉妹から「家でお子さんたちの話をしたら、うちの子(ヤングアダルトの年代)と一緒に遊びたいと言っています。今度一緒に遊びませんか。」と声をかけてくださいました。神殿は生者の関係をつないでくれるものなのだなと祝福を感じました。

東京西ステーキ八王子ワード
八木 敦史





主の神殿のオープンハウスのボランティアに応募できると知った時、心がパッと明るくなり、これは素晴らしい特権だと感じました。早速手帳を取り出し都合のつく日をボランティアに当てました。11回の奉仕の機会がありました。主の宮で奉仕できることに喜びを感じながら参入者のお世話をさせていただきました。沢山の方を歓迎し見送りました。神殿が美しく神聖なところであることを誰もが感じてくれたことに私は秘かに満足感を感じました。他宗派の方からも賛辞を頂けたことに誇りを感じます。奉仕者は皆自信と証に満ちていました。あるボランティアの障がい者の姉妹は階段の昇り降りがきついと思われる中、参入者を従えて案内しておられました。世の標準とは違う差別のない真実の教会と感じた人もいることでしょう。また年配の兄弟は車椅子に乗りながらツアーガイドの名札を下げ、エレベーターで移動する人たちと共に行動を共にしておられました。神様の教会では誰でも奉仕できる機会にあずかることに気づいてくれた人もいることでしょう。

ある夜の担当の時、9時に終わり神殿を出てビジターズセンターに行ったところ沢山の兄弟姉妹たちが掃除を始めていました。私はとても疲れていて一刻も早く帰りたいと急いでいました。ある姉妹達は階段をバケツの水に濡らした雑巾で拭いていて、兄弟達は絨毯の廊下に掃除機をかけていました。兄弟姉妹達が心を一つにし奉仕するその光景はまさにシオンでした。彼らの姿が清く美しく輝いていました。明日に備え夜遅くまで奉仕される兄弟姉妹達に感謝の言葉を残し、私は2時間近くかかる帰路につきました。東京神殿が主に再奉献される前にオープンハウスが無事主の見守りの内に執り行われたことを嬉しく思います。この歴史的な主の業に関わることができましたことに心より感謝しています。主のみ名によりアーメン。

東京ステーキ浦和ワード
田熊 敦子



「…わたしはそのくつをぬがせてあげる値うちもない。…」姉妹とこの聖句を読んで、「どこまでそのような気持ちで奉仕できるか経験してみたい。」と話し、同じ日にシューカバーのボランティアをさせていただきました。気持ちよく「ようこそいらっしゃいました。」と声掛けしながら対応していました。思いのほか忙しくしていた時、お体が悪い兄弟が姉妹の前に立ちました。姉妹はすかさず、自分の椅子を離れて直接その兄弟の脇に寄ってシューカバーを履かせてあげました。側には付き添いの兄弟もいました。何事もなかったように姉妹は席に戻り、お体の悪い兄弟と付き添いの兄弟は去って行きました。顔を見る余裕はありませんでした。

後日、ワードでの日曜学校の時間です。「オープンハウスでの経験」というテーマで、グループで話し合いを行いました。ある兄弟が印象に残ったこととして「小さなことですが、シューカバーの時隣の〇〇兄弟は片方の足を差し出すとき体を支えることが難しいので両手でバーを握っていたところ、即座に担当の姉妹が自分の椅子を離れて、回り込んできてシューカバーを履かせ、即座に元の席に戻った何気ない行動が心に残っていました。」と話されました。そのグループに同席していた兄弟も頷いておられました。その兄弟は大病により失語症の後遺症があったのです。そのグループにいた私と姉妹は顔を見合わせました。姉妹は〇〇兄弟と初めて顔を合わせたのです。〇〇兄弟はこのワードに最近転入した方でした。そのグループの、その時間、温かい思いが満ち溢れていました。奉仕は行う者も、受ける者も感謝の思いが溢れて初めて奉仕になるのだと気づかされました。

東京ステーキ浦和ワード
田熊 敏和





この日はYSAが中心となってボランティアを行う日で、私は朝から晩まで奉仕させて頂きました。夜は警備を担当させて頂きましたが、あまりにも平和なので暇で仕方なく、友人と共にボランティアのストラップを外してツアーに参加させていただくことになりました。日の栄えの部屋にて、私はその時だれにも話していなかった悩みについて主に打ち明けました。そしてその場と、帰り途中日記を書いている時とで、私は主に愛され、祝福されていると感じることが出来ました。その悩みが解決に向けて大きく動き出したのは最近のことですが、あの時祈ってよかったと今でも思っています。

松戸ステーキ足立ワード
塩 大佑



東京神殿のオープンハウスに、先日法事があった時にモルモン書を渡したおじさんを招待しなさいと、聖霊を通して主から促しを受けました。それまで、ピンと来ていなかったのが、そのことで目が覚めたようで、早速おじさんに手紙を書きました。書いているうちに他のおじさん、おばさんにも手紙を書くことにしました。おじさんは、仏教天台宗のお坊さんです。主が言われるのだから、オープンハウスに来てもらえるのではと期待をしつつ手紙を送りましたが、次々とお返事の電話が来てことごとく断られました。中には、「なんで招待するの?」というようなニュアンスが感じられる方もおられ、ガックリきていましたが、千葉に住んでいるいとこと幼馴染みを招待したいという思いが湧いてきて、気を取り直して手紙を書きました。いところからは、ショートメールでお断りの返事、「電話してこないで」というニュアンスで、もう誰も無理かと思っていましたが、幼馴染みから、「いつどこで会える?」と返事が返って来て、最終的に、その幼馴染みと、実家近くに住んでる親友と2人を招待することができました。

ここまでの道のりは長く、結局おじさんたちを招待できませんでしたが、その間主が、意気消沈している私に慰めを与えてくださいました。おじさんたち、友人を招待できるように、主に心が向かいますようにと家族でお祈りしました。ハワイにいた次男のお嫁さんがハワイの神殿に名前を入れるように動いてくれました。

ある日、私もおじさんたちの心が神殿に向かうようにお祈りしたところ、主がすぐに私の脳裏に、モーセが紅海を分けた場面を思い起こさせてくださり、信仰によって、海をも動かせるその海は、人の心だと理解しました。おじさんたちは必ず、主のみこころが叶ったときに、福音を受け入れてくださる、時があると確信しました。

友達と神殿に入り、日の栄えで友達が、静かに瞑想している様子を見て、受け入れる準備ができていたのでは、と感じました。千葉の友人は中学生の時に引っ越して行って、本当に悲しい思いでいましたが、福音を通して、それが永遠の別れでなかったことに心から主に感謝しています。招待した2人の友人同士は40年ぶりの再会でした。イエスキリストの福音があって、この友情が永遠に続くことを本当に主に感謝しています。

名古屋東ステーキ中津川支部
水野 朋子



5月14日の朝、わたしは個人的にあるミッションを控えていた。もうすぐ行われる東京神殿のオープンハウスに、居住しているマンションの別の棟に住んでいる多少交流のある市議員さんに招待状を渡そうというものだった。そしてできればその議員さんを通じて、市長さんも招待しようと考えていた。

事前にアポイントを取っており、市議員である下田さん宅の玄関先で当教会について、また神殿について説明したところ、思っていた以上の良い反応で、市長さんにも招待状を渡してくださることになり、とりあえずの目的を果たすことができ、充実した思いでこの訪問を終えることができた。

翌日の安息日の夜、下田さんからのメールが届いていたことに気が付いた。それは昨日招待状を渡した神殿のオー



ブンハウスに行くように予約を入れたというものだった。正直、このメールにはかなり驚いた。地元のオピニオンリーダーといえる人々に、この機会に教会についてお知らせするようにとの目的で招待状をお渡ししたのではあるが、こちらで交通費を負担するわけでもないの、現実には儀礼的なものと認識していたからだ。そしてその数日後には、間違いなく市長さんにも招待状を渡していただいたことも、ご報告いただいた。

その後、実際に予定通り6月2日に、オープンハウスに下田さんがお出でになったことが確認できた。翌日の6月3日からは一般会員向けのオープンハウスが始まり、私は家族とともに早朝に家を出て東京に向かっていたところ、オープンハウスの実行委員会で奉仕している同じワードの姉妹から、市長さんから今回のオープンハウスについてのお祝いのメッセージが届いたことを知らされた。下田さんからそのような可能性があることを知らされてはいたものの、本当に送ってくださったとは驚きとともに大きな感謝の気持ちで受け止めたのである。

聖文にはエズラ記やネヘミヤ記で、ユダヤの民のエルサレムへの帰還と神殿の再建についての記録がある。キリストの教えを信ずる私たちにとっても重要な出来事である。

「ペルシャ王クロスの元年に、主はさきにエレミヤの口によって伝えられた主の言葉を成就するため、ペルシャ王クロスの心を感動されたで、王は全国に布告を発し、また詔書をもって告げて言った、『ペルシャ王クロスはこのように言う、天の神は、主は地上の国々をことごとくわたしに下さって、主の宮をユダにあるエルサレムに建てることをわたしに命じられた。あなたがたのうち、その民である者は皆その神の助けを得て、ユダにあるエルサレムに上って行き、イスラエルの神、主の宮を復興せよ。彼はエルサレムにいます神である。……』」（エズラ記1：1～3）

旧約聖書からこの前後を読むと、当時のこの地方を支配していたペルシャ王が、異なる民族（この場合はユダヤ人）の信仰を尊重していたことが分かる。またエズラやネヘミヤといった人々が、ペルシャ人の指導者階級と信頼関係を築いていたことが読み取れる。

今回、東京神殿に招待した市会議員の下田さんと私の関わりを多少述べてみたい。

私たちの居住しているマンションは、四つの棟を合計すると、600所帯弱が入居しており、管理組合の役員を輪番制でこなすことになっている。任期は2年で、毎年半数が入れ替わることにより、連続性を担保するシステムで運営している。その2年目に、私は副理事長という役職をいただき、その年度に新任の理事として、下田さんも同じグループで奉仕することになった。

この方が市会議員であることを知った当初は、「おそらく公務との関わりで管理組合は欠席が多いだろう」と予想したのだが、それは裏切られることになった。有難いことに必要な会合にはほとんど出席していただき、住民への配布資料を袋詰めするような地道な作業にも骨惜しみせずに参加してくださり、大いに助けられたのだ。そして、年度の替わりには後任の副理事長を引き受けていただくことになったのだ。

政治に携わる方々に、あまり良くない印象を持っている人は少なくないとおもう。それは世の中で目立つ存在であり、何かと大きく、特に好ましくない行いが取り上げられるからであろう。しかしほとんどの議員さんのような人々は、世の中に人々の役に立ちたいとの動機で、その道に入られたことと思う。それが年数を経たり、立場が変わってそれなりの振る舞いが求められたりするうちに、当初の志が薄れていったりするのではないだろうか。けれどもそうではない、人の役に立つことを今現在も第一に考えている人がここにいることに気づかされたのだ。

この管理組合での活動を通じて、下田さんに深いリスペクトを抱くようになり、「奉仕」する心、という面ではそこはかとなく共感できているのではないかと感じていた。それが冒頭の招待につながったのである。

政治家と宗教団体との関係について、これまでになく注目が集まっている世相ではあるが、他の人のために無私の心で「奉仕」することにおいて、協力しあうことが健全な関係ではないかと思う。それは誰がどこから見ても、恥じることのない健全な関わり合いである。そういった交わりのなかで、尊敬できると感じた方を応援するのは、思想、信条、宗教に関わりなく、当然のことではないかと考えるのである。

信仰を持つものとして、こういったすばらしい方と知己

を得たことに神様の助けも感じる。オープンハウスに招待はしたものの、たまたまその日に下田さんが東京に行く用事があった。偶然だろうか。私が関西に定着することを決め、中古の分譲マンションを探し、ここに住むことになった。たまたま下田さんと同じ年度に管理組合の役員を務めることになった。偶然だろうか。神様は私たちを守り導き、機会を与えてくれる。それを如何に生かして行くかは、私たちに任されているのではないだろうか。

「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえっておのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死にいたるまで従順であられた。」（ピリピ 2：6～8）

キリストがそうであったように、他の人のために何かできることをしたい。残りの人生、少しでもそのようにありたいと思う。

※プライバシー保護のため、人物名は一部、仮名に変更しています。

京都ステーキ茨木ワード
芥野 正己



去年の6月13日（日）の夕方にズームで伝道に関する特別集会有りました。わたしの通う春日部ワードはその1週間前の日曜日の特別ステーキ大会で、それまでのさいたまステーキから松戸ステーキに所属が変わっていたので、松戸ステーキが開いてくれたこのズーム集会には見慣れない兄弟姉妹が次々と登場しました。その中で「山内兄弟」という高等評議員（たぶん伝道担当）のチャレンジが心に残りました。

「会員一人につき、5人の人に近況を聞く」というチャレンジです。長い間バプテスマのなかったある支部で宣教師がこのチャレンジを会員にしたところ、たくさんのバプテスマがあったということでした。この事例を紹介して「同じことを皆さんにもチャレンジします」と言いました。

山内兄弟はその少し前の総大会の神権部会でネルソン大

管長が話した次の言葉を引用しました。

「孤独な人がいたら、たとえ自分も孤独であっても、手を差し伸べてください。理由やメッセージや用事は必要ありません。ただあいさつをして、愛を示すだけです。テクノロジーが助けになります。」

孤独かどうかに関係なく、昔の友達5人と連絡を取ってみようと、そのとき決心しました。

ところが、1年近くたっても、たった一人と連絡を取ただけでした。「理由やメッセージや用事」は必要ないとは言っても、そういうのがないと、なかなか難しいです。これではいけないと思っていたときに、神殿のオープンハウスの発表がありました。それまでに連絡を取っていたたった一人の友達とはランチを食べたときに期日未定のままオープンハウスに誘って、すでにOKをもらっていました。あと4人を厳選して、メールを書きました。メールアドレスの分からない人には手紙を書いて、わたしのアドレスを伝え、メール連絡をお願いしました。

4人のうち3人から連絡があり、そのうち二人から「ぜひ行きたい」という返事をもらいました。というわけで、5人と連絡を取るというチャレンジを達成しました。

これは伝道のチャレンジでしたが、神殿に行った3人のうちだれかが宣教師のレッスンを受けるようになったということはありませんでした。でも、たくさんの祝福がありました。

まずは昔の友達に久しぶりに会えて、とてもうれしかったこと、友達もとても喜んでくれたことです。

でも、もう一つの祝福の方が大きかったと思います。それは、わたしの考えが変わったという祝福です。

2週間のオープンハウスで3人の友達を別々に連れて行き、そのほかにもボランティアで3回神殿に行きました。仕事はほとんどそっちのけです。毎月決まった給料がもらえる仕事をしているわけではないので、仕事をしない日がこんなに多くなると収入が激減します。神殿のオープンハウスの最終日に3人目の友達と一緒に神殿に行って帰って来たとき、さて、来月からどうやって暮らせばいいのだろうか、と途方に暮れました。事情があって貯金も底をついていたのです。

しかし、祝福されてその翌週から仕事が忙しくなり、窮地を脱しました。いつでもこううまくいくとはかぎらない



のかもしれませんが、要するに、これまで仕事優先で奉仕や友達付き合いが二の次になっていたわたしの考えが変わったのです。「優先順位を変えて仕事よりも神様と隣人を愛することを上にすると、幸せになる」ということを知りました。

神殿に行かない生活パターンが定着していたので、わたしは神殿がオープンしても行く時間がないと思っていました。神様はわたしの頭の中を変えるという祝福を与えてくださいました。神殿に行きたくてたまらなくなりました。神殿を中心にして、その次に仕事、というスケジュールをこれから組むことになると思います。このような祝福を与えてくださったことに感謝します。また「山内兄弟」は知らない人でしたが、神の僕のチャレンジを実行すると祝福が頂けることを改めて実感しました。その祝福は、わたしが予想していたのとは違う祝福で、わたしの人間の頭で考えるよりもずっと大きなものでした。

この教会は神様の教会です。神様が導いておられます。なすべきことは、神様の僕が伝えてくださいます。神様の僕の言うことを実行すると祝福があることを、イエス・キリストの御名によって証します。アーメン。

松戸ステーキ春日部ワード

阿部 和枝



友人の紹介により、神殿のキヨスクビデオ撮影にたずさわる機会をいただき、我が家にとっても特別な経験をさせていただきました。

子供達はキヨスクビデオにママがうつるのを楽しみにし、実際にママが映し出されると、『ママ！ママ！』と何度も何度も神殿の説明の動画を自分で選んで再生していました。神殿の前で特別な奉仕が出来て本当に幸せです。私は夢が叶ったかのようなでした。

また、ビデオに映ることを理由に教会員ではない祖母や、お休み会員になった家族をオープンハウスに自然に招待できたことも私にとっては奇跡でしかありません。

ボランティアとしては5日間、オープンハウス期間中は8日間、神殿に行くことができました。私は他ステーキの奉仕日に参加してた為か、ほとんどが駐車場係として働き、警備にも携わりそこでも素晴らしい兄弟姉妹と過ごすことで得る喜びや奇跡を感じられました。





ですが、やはり、花形のツアーガイドは一味も二味も違いました。1日だけツアーガイドをしましたが、その時の喜びと奇跡、そして帰ってからの衝撃的な疲れ(笑)はとても印象的でした。

初めて神殿に入られた教会外の方が日の栄えの部屋で涙が出て止まらないうと、何故か止まらないうとおっしゃってました。お休み会員の息子と家族でここにこれて感動された涙も見ました。その他多くの一人一人の感動のストーリーと一緒に経験しました。

私のボランティアの最終日には朝から予定していた電車には乗れず、お金も時間もかかって、焦りながら神殿に向かっていました。その日に限りボランティアはいっぱいで(ボランティアが楽しくて後からボランティアしたいと来た人たちでいっぱいということ)空いてる所はなく、とりあえず警備に回ることになりました。

人も多く、その日は娘の誕生日でもあるので、早く帰りたいため、すぐ帰る気満々でした。今日は休めば良かったと思いました。警備を回ったあと上がらせてもらい、もしツアーガイドが足りなくなったら入れますよって言おうと思ってました。

すると、まさかのガイドが手薄のタイミングのため、一回だけ入る機会が与えられ、偶然にも同年代の姉妹とツアーガイドに入れることになりました。もう一回ツアーガイドさせてもらえて本当にラッキーだなと思いながら心を込めてガイドをしました。

ツアーの終盤でツアーに参加されていた姉妹が突然私のとなりに寄り添うような形で私にこう言いました。

『姉妹、今日はガイドツアー本当にありがとうございます!!私はお休み会員の家族を連れてきて、今日ずっと良いツアーガイドに巡り会うようにお祈りしてました。本当に姉妹でよかった。本当にありがとうございます!!』と涙ながらにお礼を伝えてくださり、ツアー終わりには、ま

た別の姉妹が私のところにきて、『今日の姉妹の話を聞いて、本当に肯定されて感動しました。』と話しかけてくださり私は感無量心が感嘆と喜びでいっぱいでした。

主がその日私を使ってくくださったという確信と奇跡の喜びを感じられました。その日さっさと帰ろうとしていた私を最後に使ってください、そして私の祝福として大きな喜びを与えてくださり、とても満たされました。

同時に同僚となった姉妹と喜び、ツアーガイド中に、何度か同僚が変わりながら、伝道での経験がよみがえり、あの頃の伝道している時の感覚と喜びが染み出てきました。

特別な経験となり、この素晴らしい機会に携われたことを心から感謝します。また、主はふつつかな私をまだ使ってくださいというを証をまた更新できたことに感謝します。

東京ステーキふじみ川越ワード

深澤 歩



神殿のバプテスマの部屋の案内でお年寄りや子供連れの家族を前にして、先祖の身代わりの儀式を青少年が先祖のために受けて先祖と共に喜びで満たされる様子を心に描くことができ、家族の絆を結びつける神様の祝福の深さを伝えることができた。

「神殿の説明は神殿の建物自身が語るのに任せなさい」という言葉の意味が分かった。日の栄えの部屋で皆さんに静かに瞑想をお願いした後で感想をお聞きした。ある人は「騒々しい世の中から神殿に参入して、静かに自分の人生を思い返す機会が持てて良かった。」また、世界各国で仕事をし外国を度々訪れた経験の深い方が「神殿と聞いてヨーロッパの大聖堂の装飾の施された権威の象徴を誇示するかのような建物を想像していたが、この神殿はシンプルで神聖さ

のある建物であるのに感心しました。」と語られた。

私自身が招待をした人も神殿に来てくれて嬉しかった。一人の友人は仏教徒であるが神殿のツアーを喜んでくれて、後日神殿公開時の記事の載ったリアホナを渡すと写真を見てもう一度感謝された。また、学生時代に改宗したが40年以上教会から遠ざかっている地域の有力者である兄弟は、訪問して特別な招待を説明したときに喜んですぐに予約をして、その後一時間以上も昔の教会の話を懐かしくしてくれた。神殿公開にも来て喜んでくれた。また、先祖の系図の資料を彼が持っているのを知り Family Tree を利用する方法を紹介すると、それを使いたいといってくれたので家族歴史の作成を助けることにしている。

神殿公開のときには、いろいろな責任を受け協力して奉仕する喜びができた。若い人とも共に働いたが、入り口の靴カバーを着ける奉仕をしていた時に、イエス・キリストが模範として弟子の足を水で洗ったことを思い出し、自分も今それと同じことをしているのだと気づいて楽しくなった。

神殿は先祖と子孫、また世間の心ある人々とも結びつける素晴らしい場所であることを改めて知ることができた。

松戸ステーキ牛久ワード
重松 征史



私の夫はお休み会員でずっと教会に来ていませんでした。しかし息子が神殿結婚を希望した時に自分が神殿に入れないことを知り、一人息子に申し訳ないという思いになりました。そこから少しずつふさわしい人になるための準備をし、東京神殿のオープンハウスには喜んで参加し実際に建物の中に入ることによって目標が分かりやすくなりました。

息子の神殿結婚には間に合いませんでしたが、ビジョップと面接をして神殿準備セミナーに参加できることになりました。彼の心を変えてくれた息子の愛と神殿の力に感謝しています。神様が私達を愛して下さり、私達の救いの為に神殿を与えて下さっていることを証します。

神奈川ステーキ山手ワード
白木 由美子



まだ7月になったばかりだというのに、暑い日が続いていました。早々に梅雨が明けてしまい、ずっと雨も降っていませんでした。駐車場の係の方、さぞかし大変だろうと思いましたが、ちょうど奉献式に合わせたように雨が降り、徐々に気温が下がりました。また、奉献式の建物に出入りしたり、行き帰りの時間は小雨で、その合間は土砂降りの時もあったと聞いています。奉献式に合わせて、神様が恵みの雨を降らせてくださったのだと感じました。

名古屋東ステーキ瀬戸ワード
安藤 小百合



再奉献の当日は連日の暑さと変わらず晴れでその日を迎えました。会場設営の児玉姉妹は当日は雨対策仕様にはせず、多くの方々を問題なく案内するという強い信仰を持っていました。第一セッションが始まり少し経った頃、雨が降り出しました。「あらら」と私は思いましたが、彼女は大丈夫と信仰を動かさず、その傍ら彼女の旦那様はせっせと雨仕様の身支度を進めていました。

そして第一セッションが終わった頃、雨は止み、暑さが増してきた気温はむしろ下がり、恵みの雨となりました。これが第一セッションだけでなく、第二セッションも同様でした。第三セッションは暑さをピークに外の案内をしていたドーフ兄弟は「扇風機を持ってきてっ!」と嘆くほどでしたが、小雨がありちょうどミストのような感じでした。

これは私の中で神殿再奉献におけるかずこの奇跡(信仰)と命名しています。

東京ステーキ麻布ワード
村上 徳高

オープンハウスと広尾駅前コンビニの縁

オープンハウスコラム



写真左から、平野拓也兄弟、小川久美姉妹、水川安江姉妹、水川マイカ兄弟、興津留美姉妹

広尾駅のすぐ近くにあるセブンイレブンを多くの末日聖徒は利用した経験があるかもしれない。実はオーナーは、小川久美姉妹という、英会話がきっかけで高校生の頃に改宗をした女性だ。その当時、彼女の家では、姉がひどい非行に走り、両親は毎日お互いに責任をなすりつけ合うような環境だった。小川姉妹は、こんなことになったのは姉のせいだという気持ちと、姉妹だから大切だという気持ちで葛藤していた。当時のことを彼女はこう語る。「人を許し愛していく生き方についての本など自分のお小遣いで古本屋へ行き、読みあさっていました。そんな中で教会へ無料の英語レッスン受けに行き教会員の友達もできたりして、理想的な家族の在り方を知る機会が増えました。自分の居場所が家庭に無かった思春期の自分にとっては、魅力的で居心地の良い居場所を見つけた様な気持ちで毎週の英会話レッスンが楽しみでした。」そして、自然に教会にも足を運ぶようになり、英会話に誘ってくれた親友と共に改宗をした。

その後、小川姉妹は教会からは足が遠のいてしまったが、ユース時代に彼女と知り合った興津留美姉妹は、Facebookで彼女を見つけた。30年以上の時を経て、また繋がることができ、広尾でセブンイレブンのオーナーとして店を切り盛りしていることを知った。興津姉妹は、神殿に参入する度に子どもたちを連れてお店に立ち寄ることが習慣とし、神殿閉館後は、年に1回ほど、ユース時代の友人同士で集まった。

オープンハウスでの助け

東京神殿の改修後、興津姉妹は、オープンハウスのホスティング委員会にアサインをされた。委員長の岡野久子姉

妹は、興津姉妹がセブンイレブンのオーナーの方と知り合いということは知っており、何か助けてもらえることもあるかもしれないと感じていた。実際、予想をしていたよりかはるかにたくさんの助けを受けた。興津姉妹はこう語る。「オープンハウスの為に何かお手伝いしたいとずっと願っていた私にホスティングのメンバーとして声がかかった時とても嬉しく感じました。そしてすぐに、小川姉妹の顔が浮かびました。私はオープンハウスにいらしたSVIPやVIP、アメリカからの教会幹部やアメリカ人スタッフ、ボランティアの方々への食事の準備がメインの担当となりました。沢山の食べ物を準備する為に、どうしたら良いか、何が好まれるのか彼女に相談することが出来ました。その時は時間とプレッシャーに追われていた私にとっては、神様からの助けが小川姉妹だったのだと知り、安心して手配をすることができました。」他にも、大量の食品の保管のために冷蔵庫を借りたり、時間がない中でボランティアのためにお弁当を用意してもらった。小川姉妹がいなければ実現できなかったことだった。

「日本で愛をそそいで力になってあげなさい！」

ただ、主の導きを感じたのは、ホスティング委員会たちだけではなく。小川姉妹自身も、ずっと教会に恩返しをしたいと思っていた。

小川姉妹は、改宗した当時、教会で感じた暖かく、理想的な家族のあり方を知りたいという気持ちもあり、アメリカへ留学をした。ユタのセントジョージでは、ホストファミリーと1年間を過ごした。そのホストファミリーは、彼女が今まで探し続けてきた家族のあり方を教えてくれるような家族だった。ある日、自分が学生でお金もなにもなく、

何のお返しも出来ず申し訳ないとホストマザーに話した。ホストマザーは小川姉妹にこう言った。「何もお返しなんていらない！ただいつか自分が大人になり相応しい時期がきたら私たちが久美にした様に今度は、久美がまわりの困った人、とまどっている人の光になり日本で皆さんを照らして愛をそそいで力になってあげなさい！それが一番、私たちも幸せな気持ちになることなのよ！」その教えが小川姉妹の軸となった。

その後、4年間のアメリカ留学を経て、帰国し結婚、双子を出産した。忙しい中で、貿易の会社の海外業務部で仕事していたものの、息子達の中学受験のタイミングで、子どもたちの思春期の大事な時期を見てあげなくてはという思いで貿易の会社を退職し、専業主婦となった。そして、息子達が高校一年生になると同時に再就職先を探した。たまたま自宅の隣ビルで大正時代から続く酒問屋が社員募集していて就職することとなった。小売部門に配属され、それが酒問屋の社長達が加盟していたフランチャイズのコンビニ、サンクスだった。配属されたサンクスで働いていくうちに、店長となり、フランチャイズビジネスの将来性などを学び、どうせ続けていくならいつか独立したいと小川姉妹は思うようになっていった。

とうとう息子達の高校卒業を機にセブンイレブンのオーナー申請をした。その時、たまたま偶然にも、セブンイレブン本部では、広尾駅前の立地で、英語ができ、店長経験もあるオーナーを探していた。そのタイミングと見事に合い、「あなた以上にぴったりのオーナー候補はいなかった」と本部に選出され、導かれるように広尾でセブンイレブンを開業することとなった。

こうして、東京神殿オープンハウスでの助けへ繋がったのだった。小川姉妹はこうのように話している。「神殿が建て替えられたそのタイミングで今の立場を駆使して皆さんの

お役に立てると知り、胸が踊りました。若かりし頃、私の心を支えてくれた牛久ワードの皆さんへの間接的ではありましたが恩返ししっかりできたかな？としっかり自問自答しながら対応させていただきました。そういった機会を運んでくれた留美ちゃんご夫妻に本当に感謝しています。」

友人と共に神殿の中で

コミュニケーションの奉仕宣教師をしているドーフ姉妹もまた、お弁当の手配などを小川姉妹から助けてもらった一人だ。ドーフ姉妹は小川姉妹をオープンハウスのツアーに誘う様に導きを感じて急遽オープンハウス初日の夜のツアーを手配をした。その時、奇跡的にも、小川姉妹と一緒に改宗した水川姉妹が息子と一緒に、アメリカから日本に帰国していた。福岡で伝道した水川姉妹の息子が、もうすぐアメリカで神殿結婚するので、その前の旅行として日本に帰国していたのだった。その時、共にツアーをした興津姉妹はこうのように語ってくれた。「小川姉妹も水川姉妹も教会員として過ごした時間よりも教会を離れてからの生活が長かったのですが、神殿の中を楽しんでくれているのがわかりました。静かで温かい御霊が共にいるのを感じました。結び固めの部屋でツアーの感想を聞かれて話してくれた小川姉妹の言葉はこうでした。『毎日コンビニの店の中は色々な音に囲まれているけれど、この建物の中はなんて平安なんだろう。』その言葉を聞いて、小川姉妹を見守る天父は神殿で得られる平安を与えてあげたいと招いていたのを感じました。」

ライター 慶久花梨

ご協力 興津留美姉妹（浦和ワード）、小川久美姉妹



オピニオンリーダーやボランティアのための食事



写真左から、小川久美姉妹、興津留美姉妹、水川安江姉妹、水川マイカ兄弟

再奉献後の証

再奉献後に実際に神殿へ参入された方のエピソード



東金ワード青少年の神殿参入

東京神殿の再奉献後、東金ワードでは毎月2回の参入計画が立てられました。以前は月1回の団体参入でしたので、ネルソン大管長の仰る「これまで講じたことのない特別な対策」が特に青少年のために設けられたと感じています。

また、救いの儀式を受けることなく亡くなった先祖にとっても大きな祝福でした。我が家は、神殿に提出済みでもなかなか儀式の進まない先祖が沢山います。再奉献後2022年の間に、141名のバプテスマと71組の結び固めをワードの皆さんにさせていただきました。

青少年達が先祖の愛と励ましを感じ、そして先祖を愛し、喜んで熱心に主の救いの業に携わることが出来る、この神殿の祝福に感謝しています。

千葉ステーキ東金ワード
狩野 美礼

私は50年の教会員歴で、その間何回も「癒やしの儀式」を受けていますが、今回のように、その場で完全に癒やされるという経験は初めてです。

執行して下さったワーカーの姉妹達、そして、何より、このような祝福を下された主に感謝しています。

千葉ステーキ東金ワード
結城 差規子



今年の8月に私の母が94才で天に召されました。認知症で施設に入っていたのですが、施設でコロナウィルスに集団感染し、一旦回復したのですが、高齢だったためか急変し亡くなりました。コロナ感染死になったため、会うこともままならず、生前大事にしていた着物に着替えさせることも、お化粧することも出来ず、火葬も一ヶ月待ちと言う状況でした。葬儀納骨も10月となりました。そのような状況で私に出来ることは神殿での身代わりの儀式だけでしたが、近頃目が充血しやすくなっていて、水のバプテスマについて躊躇していました。

すると10月に母の死を知らないワードの田中わか子姉妹から「佐藤姉妹、私と一緒に神殿に行きませんか？」と電話がありました。「断食して深く祈っていた時に佐藤姉妹と神殿が心に浮かんで、一緒に神殿に行かなくてと思った」とのことでした。驚いて事情を話すと、田中姉妹は「大丈夫、私が水のバプテスマ身代わりでやりますから！」と、

家族ファイルを5枚持って、イシャトリの儀式を受けました。この儀式を受けるのは何十年ぶり、今の方式に変更されてから初めてでした。その日は珍しく朝から頭痛がして、理由は明確で、その週に長距離運転をしましたので、その凝りが原因でした。

1回目では、まだ頭痛がズキズキしていましたが、2回目、油が注がれた時にスーッと痛みが消えました。心の中で「私は癒やされた」と分かりました。それ以降頭痛を感じることはなく、午後もしエンダウメントを受けることが出来まし

てきばきと予約を入れてくださって、喜んで身代わりの水のバプテスマを受けて下さり、無事に一日でエンダウメントまで終了することができました。私の母がとても喜んでいてのを感じたということです。そしてその水のバプテスマの最中に何故か 18 年前に他界して儀式が済んでいる父の名前が呼ばれました。父が笑顔で母のバプテスマを見守っている様子が浮かびました。

田中姉妹が清さを保ち、啓示を受けて神殿に誘ってくれたことに感謝します。主は困った時に人を通して助けてくださることを証します。そして神殿は確かに儀式を通して幕の内側と外側を繋ぐ主の宮であることを証します。アーメン。

神奈川ステーキ山手ワード

佐藤 智子

誇らしく素晴らしい模範となっています。調べた系図も娘が全て身代わりとなりバプテスマを受けてくれました。

預言者ジョセフ・スミスは次のように述べています。「わたしたちが語っていること、すなわち地上で記録し、すなわちつなぎ、かつ天でもつなぐ力があるということは、ある人々には、非常に大胆な教義であると思われるかもしれませんが。」わたしたちが地上で作る交わりは、永遠の栄光を伴って天で存続させることができます。実に、「[わたしたちの家族] なしにはわたしたちが完全な者とされることはなく、またわたしたちなしには彼らが完全な者にされることは[ありません。]」すなわち、すべての、ことごとくの、価値あることに時間を使い、主のため、先祖のために系図探究をしたいと思います。

千葉ステーキ東金ワード

望月 いずみ



今回神殿再奉献されるにあたり、改宗した主人の系図の探究に力を注ごうと決意して、今年の夏に家族で田舎に行き、親戚に話を聞きに行きました。義祖母は健在で 94 歳でまだ仕事もしています。子供の頃の話の聞いたり、苦労話を子供、孫、曾孫と 4 世代集まり先祖について話を聞くことができました。貴重な体験をすることができました。

娘の夏の自由研究は系図について調べたことをまとめました。曾祖母、祖母、母にインタビューをして記録に残しています。息子は調べたことを教会の集会で発表したり、今回の系図探究は家族にとってとても貴重で価値のある時間でした。

私たちが系図に心を向けるとき、まだ見ていない先祖を近くに感じ、親しみを持つことができます。娘は月に 2 度死者のためのバプテスマを受けるために神殿に参入しています。夏から欠かさず参加している娘を見るときにとっても



1998 年から神殿施設職員として働いています。再奉献のストーリーの始まりは 2007 年に遡ります。その年から神殿建物リニューアルの調査が始まりました。建物構造、設備、デザイン設計のプロジェクトが始まりました。教会の発表は突然のように見えますが、緻密な青写真が作られてから実行されます。2011 年の東日本の大地震の時に、耐震診断が完了し、内装の基本デザイン承認がおりました。このリニューアルの進め方を目にして、天地創造で、霊の創造から始まり、順番に秩序正しく創造されていく状況に似ていると感じました。

2017 年 9 月 30 日に最後の儀式が終わってから、業者が神殿に入る前に、神殿職員により神聖なものは取り除かれ、破棄しました。その時点で普通の建物になりました。2020 年 11 月に神殿が引き渡され、神殿の定礎石の裏には 1980 年に埋め込んだものと同じ記念の品を納めました。建物に魂が埋め込まれたように感じました。アジア地域最初の神殿として 1980 年スパンサー・W・キンボール大管長によって奉献されました。アジア地域の会員の信仰の魂を強く感じます。

再奉献された後、神殿に入ると、建物内の空気までも違っていました。神殿は生きている建物だと感じました。

千葉ステーキ東金ワード

風晴 豊彦



私は中学生で不登校になってからあまり教会に行かなくなりました。今まで自分の証を持ったことがなかったし、モルモン書や聖典を最後まで読めたこともありませんでした。友達が誘ってくれても教会の活動に参加することはあ

りませんでした。ほとんど教会に行かず、教会の教えも良く理解できていないのに今年5月、いま伝道に出るべきだと思いました。

なぜそう思ったのかはまだ良く分かっていませんが、伝道の召しが来て分かったことが一つあります。それはずっと前から神様が私のために計画されていたということです。

今年の始めに父が神殿職員として働く機会を頂けて、以前よりも神殿が身近な存在になったこと。東京神殿が再奉献されたこと。そのオープンハウスで母と一緒に奉仕する機会があり、そこで出会った姉妹が私自身のエンダウメントを受けるときに神殿ワーカーとして奉仕していたこと。私の大好きな姉妹が私を託児指導者に推薦してくれたこと。その召しが教会に戻るきっかけになったことなど本当に多くのことが重なって、教会にまた行くようになってから半年で伝道に出るための準備が終わりました。申請書を書いているとき、やっぱり私は宣教師に相応しくないかもしれない。今からでも辞めた方が良くないかもしれないと何度も思いました。それでもそんな気持ちとは反対に準備は上手く進みました。申請書を出して召しを待っている間、早く召しが来て欲しいと願ったときには私が札幌伝道部に召される夢を二度も見ただけもありました。

今まで教会から離れたり、標準に沿った生活ができなかった時もありましたが、それでも変わりたいと思って行動した時に神様が助けてくださること、その人に用意された計画を進めてくださることを今回伝道準備をした時に改めて感じました。

教会を離れていたとしても、主が私をご存じで正しい道に戻してくださること、どれだけ遠回りをしても忍耐強く私を待っていてくださること、そして主の道に戻るときに本当に多くの祝福が与えられるということを心から証します。全てをイエスキリストの御名によって証します。アーメン。

東京ステーキ浦和ワード
興津 鈴子



私はワードの神殿家族歴史委員会の若い女性担当をしていて、家族歴史について考えたり話を聞いたりする機会をたくさんもらっています。神殿家族歴史活動をする時に多くの奇跡があることは何度も教わって、自分もそのような経験をしたり、強い証を得たりしたいと思っていましたが、儀式に何回か参加しても、強い御霊を感じることはありませんでした。

そう思っていたとき、ネルソン大管長の次のメッセージを読みました。「神殿参入がまだ好きになれない人は、回数を減らすのではなく、もっと頻繁に参入してください。そこで主の御霊を通して、教えと靈感を授けていただきます。わたしは皆さんに約束します。時とともに、神殿は安

全と慰めと啓示の場所になるでしょう。」神殿参入は前から好きでしたが、これを読んで、神殿に行きたいとより強く思うようになりました。また、神殿になかなか行けないときでも、家族歴史活動をする意欲が湧いてきました。バプテスマを受けずに亡くなった先祖達が、霊界で罪の意識で苦しみながら身代わりの儀式を待っていると聞いたときは、私にできる大きな奉仕の機会があると分かって少し嬉しくなりました。

個人的な強い証を得るためにも、神様と先祖の皆さんに奉仕するためにも、続けて神殿参入に参加したいです。イエス・キリストの御名によって分かち合いました。アーメン。

千葉ステーキ東金ワード
古垣 凜乃



私は、今年の7月にはじめてのエンダウメントの儀式を受けました。ずっと神殿に入ることを楽しみにしていたので、東京神殿が再奉献された時はとても嬉しかったです。東京神殿の閉館やコロナのことで、エンダウメントを受ける日が遅れてしまいましたが、私は神殿に入るためにずっと続けて準備をしていました。毎日欠かさず聖文を読んだり、総大会のお話を読んだり、家のお手伝いをしたり、家族に優しくしたり、私にできる備えを頑張りました。

そして、東京神殿が再奉献されて、7月7日に、母と姉と一緒にエンダウメントの儀式を受けることができました。儀式を受ける時に、私が、再奉献されてから生者のエンダウメント第一号になったということを知りました。とても素晴らしい記念の日となりました。

私は障がいがあって、人前では緊張したり上手く話せなくなったりするので、最初の日は緊張して大変でした。でもその後、3回目に両親と姉と妹と家族5人全員ではじめて儀式に参加できた時、とても良い気持ちを感じることができました。

日の栄えの部屋で、家族と一緒に座っている時、緊張がほぐれてとても安心できて心が温くなりました。日の栄えの部屋で祈っている時、主を近くに感じました。これからは神殿に何回も参入することで、もっと主に近づきたいと思います。

千葉ステーキ東金ワード
鈴木 彩

おわりに



東京神殿が再奉献されてから約1年、過去から現在までの東京神殿の記録が完成しました。この記録のタイトルである「かがり火」は、モンソン大管長のお話から来ています。

「…場所を問わずすべての神殿を与えてくださったことを天の御父に心から感謝しています。それぞれが世界に輝くかがり火であり、わたしたちの証の表れです。すなわち、永遠の父なる神は生きておられ、わたしたちを祝福することを望み、まことにあらゆる世代の息子娘たちを祝福することを願っておられます。」
(トーマス・S・モンソン「聖なる神殿—世界に輝くかがり火」2011年4月総大会)

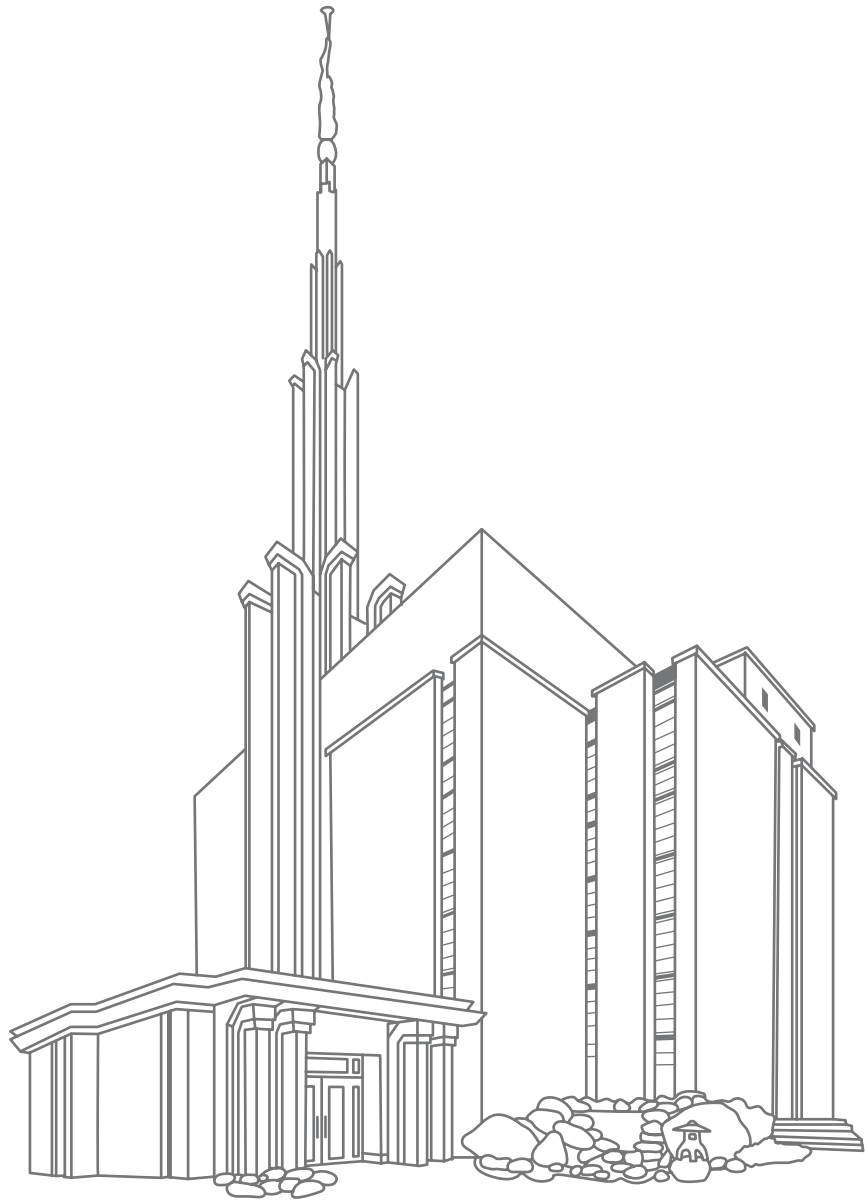
私たちが主の元へ帰れるように道を照らし、そこへ足を運んだものには故郷へ帰ったかのような暖かさを与えてくれます。それが神殿です。その神殿が建設に至るまでに日本の開拓者一人一人の証の土台が不可欠でした。コロナ禍でのオープンハウスと再奉献式では一人一人の証が増し加えられました。神殿稼働後、神殿会長会やメイトロン、神殿ワーカー、神殿参入する一人一人の証によって、先祖の救いを達成できています。この一人一人の証もまた世界に輝く「かがり火」だと私たちは信じています。

この記録に収められた証は、天でも確かに記録されていることでしょう。(教義と聖約 62:3) 証や経験を分かち合ってくださいとお一人お一人の信仰の模範に心から感謝します。

今回、この記録は特に若い世代へ届けたいと思い作り上げました。教会がどのようにこれから発展していくかは若い世代がどのくらい神殿に心に向けられるかにかかっていると言っても過言ではないと思います。親から親へ、友から友へと受け継がれてきた証の火を絶やすことがないように、むしろ、今までの世代にはできないほどに世界を照らす力がみなさんにはあると確信しています。

この記録を作るために犠牲と努力を注いでくれたメンバー一人一人に感謝と心からの拍手を送りたいと思います。毎週ミーティングをし、教会の責任や仕事もある中、記事の執筆やデザインに才能と時間を使ってくれました。辛い時も何回もあったと思いますが諦めずに伴走してくれました。そのおかげで、このように美しい記録をまとめ上げることができました。

そして、最後に、不完全な私たちをずっと見守り、祝福を注いでくれた天の御父とイエス・キリストの完全な愛に心から感謝します。



東京神殿再奉献記念誌かがり火プロジェクトメンバー

リーダー 村上悠平 慶久花梨
デザイナー 小山拓真 白木真実

ご協力いただいた方々

執筆 泉谷輝
記事サポート 富田英志 佐久田愛奈 ハルヴォーソン淳美
デザインサポート 糸原愛美

カメラマンリーダー 須田幸之祐
カメラマン 宮城成歩滝 大津真澄 紀村理希 平田寛 宮野祥一郎

翻訳 東京神殿再奉献通訳委員会の皆様

サポート 岡田琢治 沢田美樹 小和田美愛 松本留香 小山莉奈

當真コーディネーター夫妻、東京神殿再奉献委員会の皆様

歴代神殿会長とメイトロン、ご家族の皆様

証や写真を提供してくださった皆様

東京神殿再奉献記念誌 かがり火

2023年8月27日 発行

編集・発行 東京神殿再奉献記念誌かがり火プロジェクト

表紙デザイン 小山拓真
かがり火マークデザイン 白木真実
東京神殿イラスト 慶久花梨

連絡先 tokyo.temple.historical@gmail.com

本書は有志団体によるもので末日聖徒イエス・キリスト教会発行の公式図書ではありません。
また、コピー、スキャン、デジタル化などの無断複製は著作権法上の例外を除き、禁じられています。

